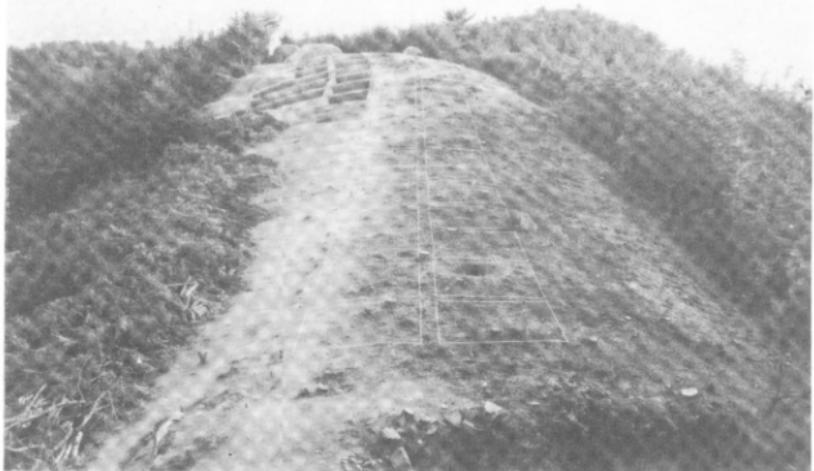




(1) 発掘区設定 (50cより30cを望む)



(2) 発掘完了 (45cより30cを望む)



(1) 発掘区設定 (4bより22bを望む)



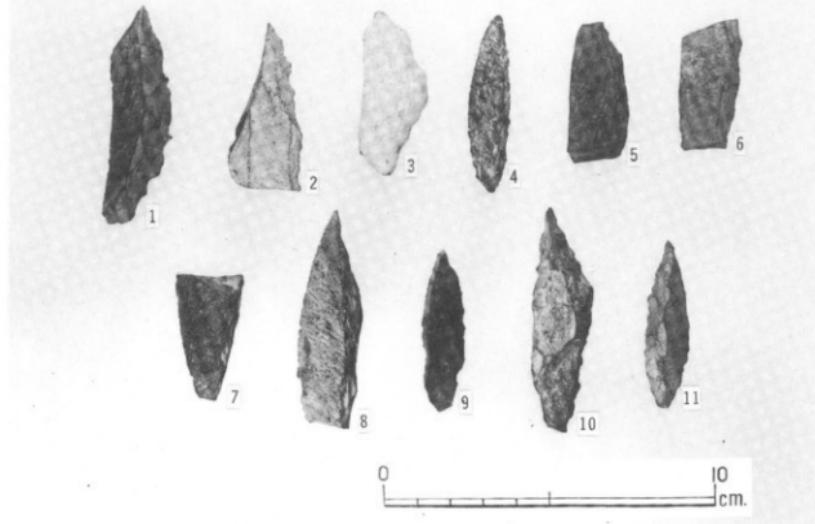
(2) 発掘完了 (3bより22bを望む)



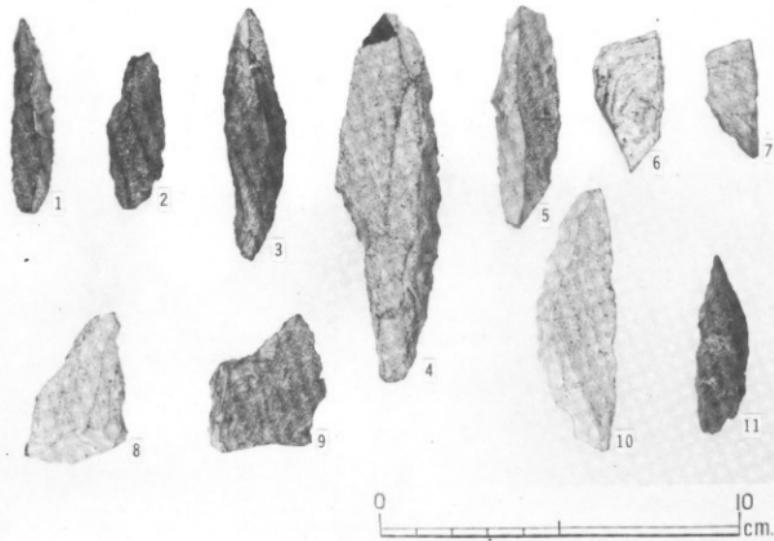
(1) 発 挖 風 景 (43c)



(2) ナイフ形石器(1)



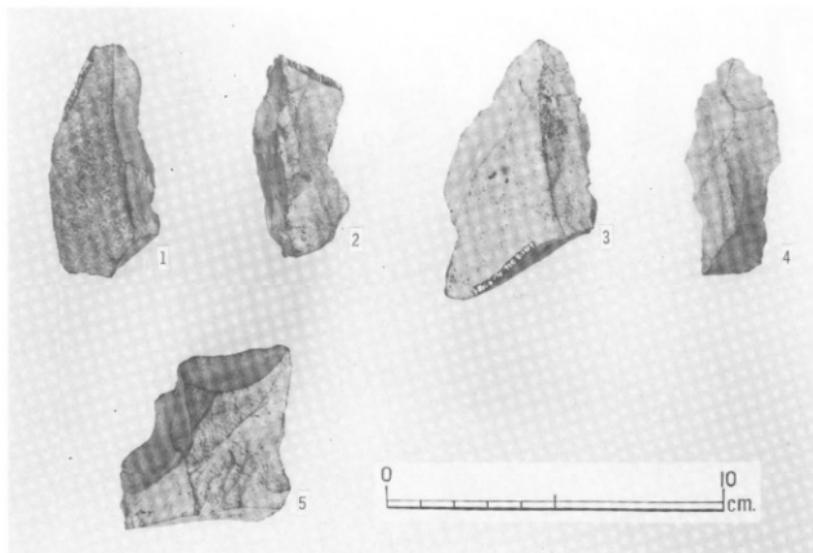
(1) ナイフ形石器(2)



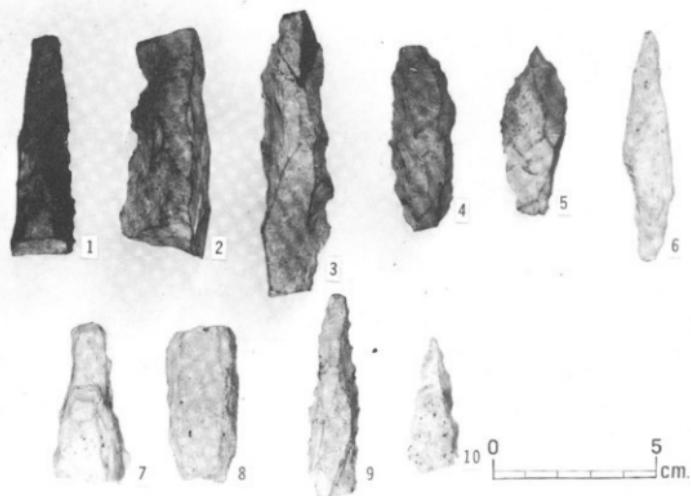
(2) ナイフ形石器(3)



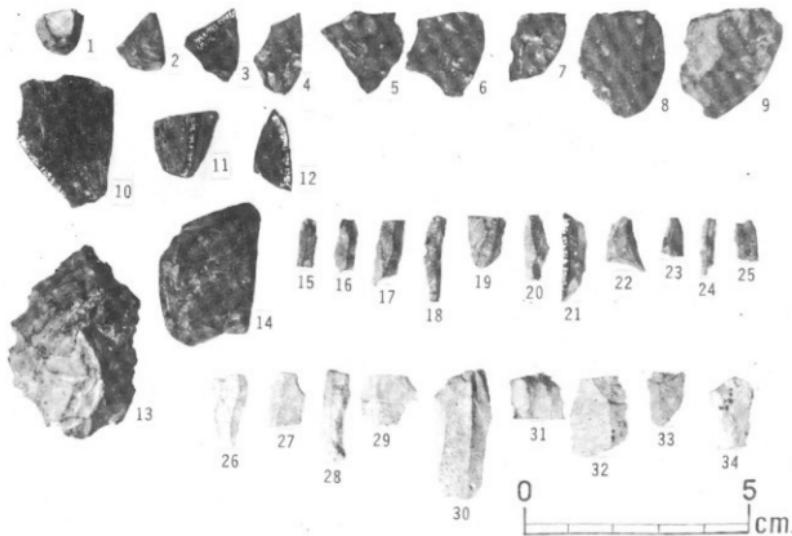
(1) 横長刺片石核(1)



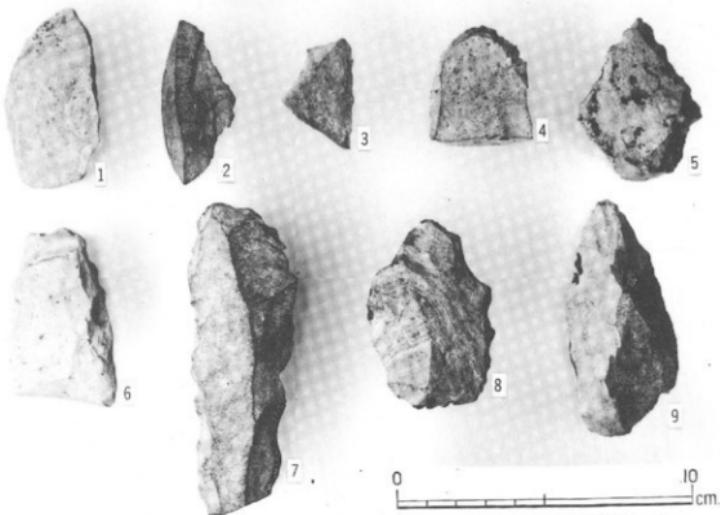
(2) 横長刺片石核(2)



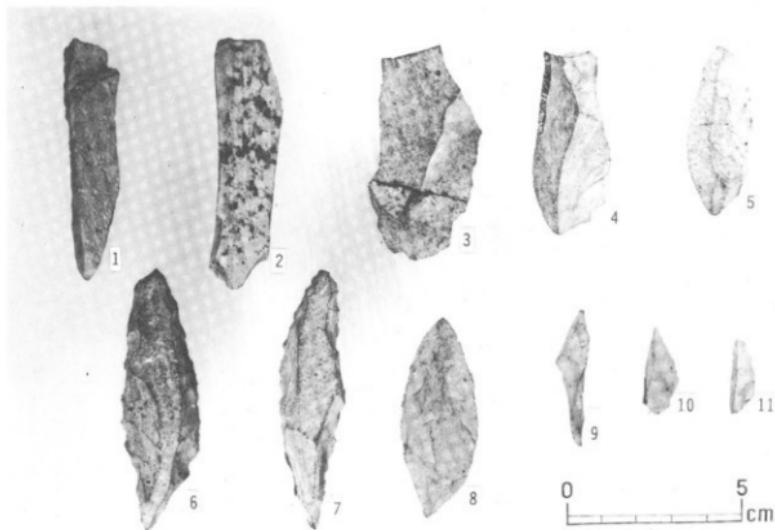
(1) 舟底形石器



(2) 細石刃核・細石刃等



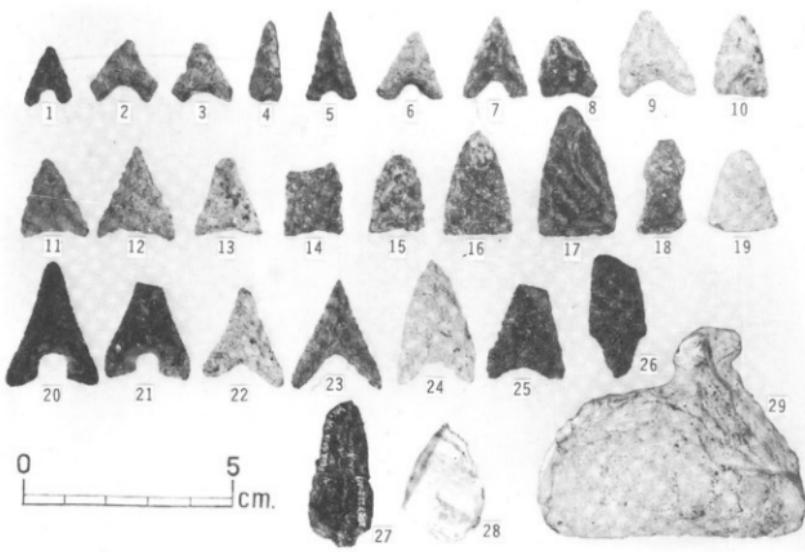
(1) スクレーバー



(2) 縦長剥片, 縦長剥片石核・翼状剥片, 尖頭器剥片



(1) たたき石



(2) 石鎌・石匙

III 大浦浜遺跡の調査

III 大浦浜遺跡の調査

1 はじめに

大浦浜遺跡は、坂出市街の沖合10kmに浮ぶ櫃石島に所在する遺跡である。櫃石島は、面積0.85km²、周囲5.4kmの島で、低い山塊と4つの浜からできている。最も大きい浜が、島の南東部に広がる大浦浜で、南北400m、東西60~80mに砂地が広がり、浜の西は三角形状の後背湿地となっている。遺跡はこの砂浜の上に営まれている。

瀬戸大橋がこの大浦浜を縦断することになり、香川県教育委員会は昭和51・52年度に、架橋工事区域内で予備調査を行い、遺跡の範囲、規模などを確認した。この基礎資料をもとに、本格的な発掘調査を昭和55年5月より実施した。本年度の調査は昨年度調査の継続で、浜の北西部10,000m²を対象地区として実施した。

昨年度調査の概要是すでに『概報(IV)』で報告しているが、簡単にふりかえってみよう。浜の南部約7,000m²を全面発掘した結果、東西幅40~50mの舌状の砂洲が南から北にのびており、この砂洲の上に繩文晩期~中世の遺跡が営まれていることがわかった。繩文晩期~弥生前期は、砂洲の中央部から東側の緩斜面に遺物包含層が広がっていた。^(註2)

弥生中・後期は砂洲の中央部で遺物が少量得られたのみで、前期に比べると極端に遺跡の規模は縮少したようである。古墳時代前期は、浜の中央部と西側の緩斜面部で遺物・構造が検出された。特に西側のゆるやかな斜面部に、南北100mの長さに古式土師器がブロックになって集中していた。

古墳後期は、この浜で製塩が大規模に行なわれておおり、砂洲の西側に製塩土器を主体とする包含層が厚く形成されていた。奈良時代になると、遺跡の中心は一転して砂洲の東側に移っており、ここに製塩土器を主体とする包含層が形成されていた。中世に入ると、砂洲の両側は前代に包含層が形成され埋まつたため、ほぼ平坦な地形を呈し、濃淡はありながらも、ほぼ全域に遺構・遺物が検出された。

以上のような長い変遷の中で注目できる遺構としては粘土土坑、遺物としては祭祀関係のものがある。粘土土坑は径1~3m、深さ15~70cmの粘土張りの土坑で、形・大きさ、さまざまであるが、北部に3基、中央部に1基、南に15基群をなしていた。北部の3基は時期が限定できず古墳~鎌倉時代と推定されるが、南部のものは出土遺物から鎌倉時代のもので、製塩に関する遺構と推定され、從来不明だった採穀工程や、中世の製塩法を解明する重要な遺構である。祭祀関係の遺物は、古墳時代のミニチュア土器・船形土製品、滑石製有孔円板などと、奈良時代の奈良三彩小壺、帶金具、皇朝十二錢などである。前者は古墳時代の製塩・漁撈活動に伴う祭祀を研究する時、出土状況が明確な資料であり重要なものになるだろう。後者は瀬戸内海の島の祭祀遺跡としては岡山県笠岡市の大飛島に次ぐもので、「國家的祭祀」をより具体的に追究していく際欠かせない資料だろう。

以上のように昨年度の調査では予想以上に貴重な成果が得られた。そして本年度調査区域に

ついては次のような予測がなされた。遺跡が営まれている砂洲は、現地形では標高 2 m の等高線の流れと重なるため、この高さの等高線が旧地形を伝えていると推定できる。すると今年度調査区は、①砂洲の北部では昨年度と同様な遺構のあり方を示す。②現代の水路の南北両側は標高 2 m 以下の低湿地であるため遺跡は営まれていない。③ヤケヤマ東・南麓は標高 2 ~ 3 m の部分に遺跡が営まれている可能性が高い。という 3 つの性格の異なる部分から構成されている可能性が高いことになる。

このような大雑把な予測のもとに、昭和56年 4 月 6 日から発掘調査を再開した。昨年度調査区で精査が終了していない箇所が残っていたため、本年度調査区と並行して調査を進めた。調査結果は、①の部分では昨年度と同様に古墳時代の製塙土器包含層や祭祀関係遺物を検出した。②の部分は予想に反し、地表下 1.2 m で縄文後期の遺物包含層がみつかり、この包含層は砂洲の下にも広がっており、縄文後期から晩期にかけて地形が一変したことが判明した。③の部分については、古代末～中世、古墳前期、縄文後期の遺構・遺物が多く検出され、浜の北東部にも遺跡が営まれていることが確認された。さらにこの地区では奈良二彩、皇朝錢が再び出土し、浜で数度にわたり国家的祭祀が行なわれたことが確実となった。発掘調査は現在も進行中であるが、本概報は、昨年度調査の未報告部分と、本年度分の昭和56年12月末までの調査結果をまとめたものである。

(大山)

A ₁	昭和55年度調査対象地区	概 報 (IV) に て 報 告
A ₂		本 書 に て 概 要 報 告
B	昭和56年度調査対象地区	
C	昭和57年度調査予定地	
D	調 査 地 域 外 の 遺 跡 の 範 囲	

注

- (1) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』(I)(II) 昭和52・53年
- (2) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』(IV) 昭和56年



第 1 図 大浦浜遠景写真



第2図 大浦浜遺跡調査範囲図



2 調査の経過

大浦浜遺跡の発掘調査も今年で2年目を迎えた。瀬戸大橋建設に伴う島々の遺跡の調査の中では質、量ともに最大の遺跡と目されていたが、昨年度の調査では予想以上の遺構、遺物が検出された。

今年度も繩文時代の包含層や、奈良二彩、和銅開珎など祭祀関係の遺物の出土をみて、活気ある一年であった。昨年のように夏の長雨もなく、順調に作業は進行した。56年1月から12月迄の調査日誌を抄録しておく。

調査日誌抄

昭和56年

- 1月8日 本日から現場作業再開。全調査区とも砂をかぶっている。
- 1月16日 B-8区で鯨骨下顎の一部を検出。(この時点では鯨骨とは認定されていない。)
- 1月26日 B-5区第3層下層除去作業中に神功開宝出土。
- 1月28日 H-14区SK1除去後に第11土器群を確認。G~J-8~9区終了する。B-4区で長年大宝出土。
- 1月30日 B-8区ピット上面で鉗具出土。
- 2月5日 G~J-4~8区調査区設定。C~D-4~8区第4層上面写真撮影。
- 2月6日 G-6・8区の調査に着手。早くも古墳時代後期の製塙土器破片が多量に出土する。
- 2月9日 石川県立埋蔵文化財センターの小嶋芳孝氏来島。調査中の寺家遺跡について話を聞く。
- 2月18日 鯨骨の検出を終了し、写真撮影・出土状態図の作成を行う。
- 2月24日 G~J-4~8区第1層~第3層の除去を始める。
- 2月26日 今冬一番の冷え込みで調査区が凍結したので水洗い作業に変更。歩道島の箱式石棺の写真撮影を行う。
- 3月5日 B~D-1列(南端地区)の調査開始。
- 3月10日 大浦浜の南で水死体を発見。現場作業が一時混乱する。
- 3月16日 南端地区調査中に円板状土製品多数を検出。
- 3月17日 山陽放送の収録が行なわれる。櫃石中学校生徒見学。G列4~8区では製塙土器層の精査に入る。
- 3月25日 たては北麓地区の埋め戻しを終了。本日で昭和55年度の現場作業を終了する。

で、現場・プレハブの片付けを行う。

- 4月6日 昭和56年度大浦浜遺跡発掘調査開始。調査員7名。D~R-27~40区発掘前現状写真、草木伐採発掘地区設定。G-5・6区製塙土器集中箇所遺物採集。B~F-9~14区土坑実測。
- 4月10日 G~J-27~30区、耕作土排除続行中。J-12区、須恵器集中箇所実測。G・H-11区、土器採集。B-0~3区新設。
- 4月13日 B-8~9区鯨骨のレベル記入、採集。
- 4月14日 G~J-27~30区耕作土排除完了。E-14区S X05、平面実測。G~I-14区北壁土層面実測、写真撮影。NHK「ここはお四国」で発掘現場録画。



第3図 発掘風景

- 4月20日 B~D-4~8区第4~5層上面遺構検出。プロカメラマン山内氏、「自然と生活」撮影のため来島。
- 4月23日 B~D-4~8区第4~5層上面遺構全景写真。C~D-1区円板状土製品集中出土。C-8区SM01実測。G-31~34区耕作土排除。

- 4月30日 H～J－5～8区柱穴群全面精査。B～F－7区南側、B～F－8区北側に土層確認トレンチ。C－11区S X13断面実測。南端地区より縁結片出土。共同企共体の野村、岩室岡氏、発掘現場を見学。
- 5月8日 C～F－10区第3層発掘開始。C－5区S X24断面写真。B～C－0～3区、第3層掘り下げ続行中。豊浜町文化財保護協会37名現場見学。
- 5月13日 H～J－5～8区柱穴群平面実測、レベル記入、B～D－4～8区ピット群の断ち割り、写真、掘り抜き。A～B－8区北壁土層断面実測。作業員は3日間土器の水洗いに専念、成果230箱。ベルコン13台、排水ポンプ7台(200V×5台、100V×2台)搬入。
- 5月18日 F－5～6区炉跡の写真撮影、断ち割り。C～F－8区北壁土層断面実測。D～R－27～40区、J列以東の耕作土排除作業順調、船形土製品(F－30)、滑石製鉗車(F－33)、提砾(F－29)出土。
- 5月22日 D－12区S X12、精査続行。G～H－4～8区第4層(古式土師器、弥生土器不良包含層)除去。B－3区湧水溜構土層断面実測、写真。
- 5月27日 G～J－8区北壁土層断面実測。K～Q－30区地表下150cmに炭化木、磨消繩文同一層。ミニチュア畠出土。
- 6月3日 K～Q－30区北壁土層断面実測。D～R－27～40区、J列以東の耕作土排除はあと2日で終了予定。鐵鏃出土(F－33)。
- 6月11日 昨日、四国地方入梅。G～H－34区土器集中箇所レベル記入。K－28区で曲物検出。K～R－34区掘り下げほぼ終了。K～L－34区より後期繩文土器約20片、石鏃1、石匙1、サヌカイト片数点出土。C－10区S K01実測。B～C－0～3区第2遺構面完掘。昨日の刀装具(貴金属)に続き、四耳壺出土(B－2)。
- 6月17日 E－12区S X06、S X09断ち割り。G～H－34区土器集中箇所遺物採集。B～C－0～3区第2遺構面平面実測。K～R－34区完掘、土層断面写真撮影。刀子出土(G－31)。
- 6月23日 E－12区S X06の $\frac{1}{4}$ 断面実測。G－30区、S X01断ち割り。L－28区で第14土器群検出。K～R－34区土層断面実測。
- 6月26日 公団の石田、金沢、大森各氏とヤケヤマ東麓地区的調査について協議。疲労蓄積のためか、今週から疊部屋で昼寝する調査員が増える。降雨のため作業員は終日、土器洗い。
- 6月29日 ここ2、3日來の降雨のため、今年、昨年度調査区ともに満水。排水ポンプはフル回転すれども調査員、排水に悪戦苦闘。皇朝十二鉄(長年大室)出土(B－0)。
- 7月8日 南端発掘区全景写真。湧水溜完掘全景写真。南端発掘区全区 $\frac{1}{40}$ 平面図作成。F～H－27～34区ピット群写真撮影。水路以北区の草刈り、杭打ち。
- 7月14日 F～H－24～30区第4層精査。I～J－27区南壁土層断面実測。水路以北(M～R－38区)発掘開始。G－5区東壁土層剥ぎ取り成功。
- 7月16日 F－13区S X04断面実測。K－35～38区繩文層精査。中期の繩文土器出土(M－38区)
- 7月23日 酷暑。本日より体力保持のため13：00～15：00は土器洗いを約1ヶ月間継続する予定。E－14区、S X11実測。K－35～38区東北壁土層断面実測、写真。
- 7月28日 F－13区S X14埋土層断面図作成。C－13区S X15平面実測。E～H－30区深掘り終了。
- 8月6日 D～R－27～40区調査終了。C－12区S X13平面実測。C～F－14区第3層除去。8月4日の坂出高校について、丸亀高校地歴部員6名、見学。



第4図 坂出高校地歴部見学風景

- 8月12日 引田中学校郷土クラブ7名、現場見学。B—3区湧水層平面実測。明日13日より、16日まで盆休み。
- 8月19日 K~N-45~48区、縄文層精査。香川大学坂東教授、花粉分析、炭化木C¹⁴分析、依頼要請に応じ來訪。
- 8月24日 D-12区S X12断ち割り。
- 8月31日 D-12区 S X12断面実測図。E~F-11~12区第3層除去。ヤケヤマ東麓地区草刈り。
- 9月10日 全作業員、C~F-9~14区粘土遭構群下層精査。K~N-45~48区土層断面実測。
- 9月17日 D-9~13区弥生層除去継続。C-11~13区遭構精査。ヤケヤマ東麓地区、エンボにより耕作土排除。
- 9月21日 K~N-45~48区にあった水道パイプが折れ漏水。月例担当者会であったが、急遽全調査員、埋め戻しに来る。
- 9月25日 ヤケヤマ東麓地区、耕土の除去。発掘終了地区防災工事。C-10~11区粘土土坑精査。
- 9月30日 ヤケヤマ東麓地区、第3層掘り下げ、焼土面検出（J-2区）北宋錢2枚出土。C-11区粘土土坑断面実測。
- 10月2日 C~F-9~14区土層断面実測図に土層名記入。これで用水路から南は全て終了。ヤケヤマ東麓第3層掘り下げ、皇朝十二銭（隆平永宝）出土（B-2区）。
- 10月6日 ヤケヤマ第3区画で遭構検出、焼土面のほかビット20個、北宋錢（景祐元宝）（H-3）、唐錢（開元通宝）（J-3）出土。K-41~44区発掘開始。
- 10月14日 ヤケヤマ東麓、各区画とも第1遭構面精査。第3区画、平面実測。ヤケヤマ東麓地区谷筋の下草刈り。E~H-51区発掘開始。K-41~44区終了。
- 10月28日 ヤケヤマ東麓地区、焼土面断ち割り。谷筋3本のトレンチとも地表下約2.00m掘り下げ。B~C-51区で須恵器、土師器多数出土。G-405区土層剥ぎ取り、再度



第5図 ヤケヤマ東麓地区調査風景
成功。

- 11月4日 ヤケヤマ東麓地区K~L-3区古式土器層掘り下げ。E~H-51区北壁土層断面実測。M~N-39~44区耕作土排除。
- 11月12日 ヤケヤマ東麓地区第1遭構面、写真撮影。粘土遭構平面実測。M~N-39~44区掘り下げ、N-39~42で縄文中期の土器検出。
- 11月25日 ヤケヤマ東麓地区第2区画、第2遭構面、写真撮影。谷筋埋め戻し終了。O~S-42区完掘。奈良二彩小壺の蓋出土。（B-2）。
- 11月30日 ヤケヤマ東麓第1区画で縄文土器片、コントナ2箱、磨製石斧、石匙、石鍬など遺物量多し。第3区画粘土遭構埋土除土、写真。
- 12月4日 ヤケヤマ東麓第2区画縄文包含層除去。第1区画出土付近から、皇朝十二銭「和同開珎」（C-2）「神功開宝」（B-2）出土。
- 12月11日 ヤケヤマ東麓第1区画古代木石組実測、レベル記入。第2区画古代末ビット実測。湿地部埋め戻し。
- 12月17日 ヤケヤマ東麓第1区画東壁土層断面実測。第2区画、完掘寸前。集石遭構、断ち割り、炉址か？。
- 12月24日 ヤケヤマ東麓第2区画土層断面実測。現場全体の廻境整備。本日で年内の現場作業終了。
(東原)

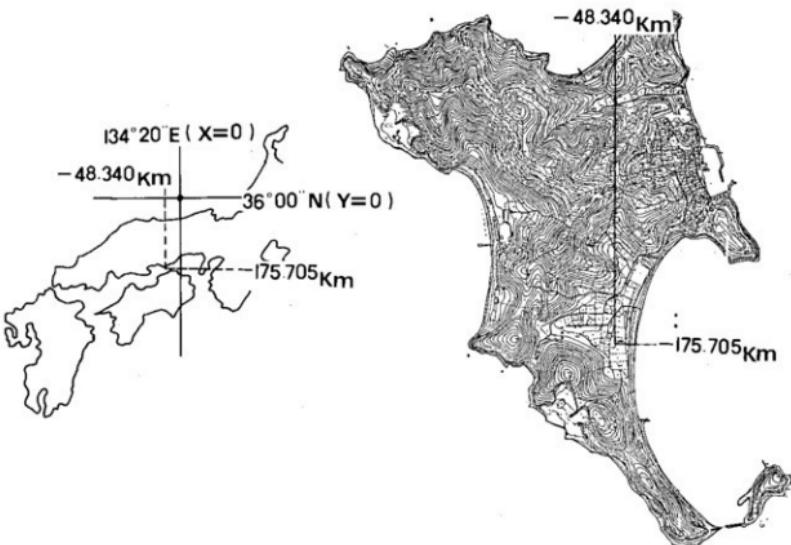
3 調査区画の設定と遺跡の範囲

(1) 調査区画の設定

区画の設定にあたっては、将来大規模な開発によって地形が変化しても、巨視的に見た遺跡の範囲、遺構の位置関係が保存できるように、不变に近いものを基準点にする必要がある。そこで大浦浜遺跡では、第V平面直角座標原点を基準点に定め、第V系の方眼方向に合わせて区画を設定する事とした。

設定方法としては、本四公団櫃石島工事用道路主要点、中間点に第V系原点からの座標値が求められている事を利用し、例えば、既知の2点、A、Bがあれが、A点とB点のX値、Y値の差を求め、この差が一致する点Cをとれば△ABCは $\angle C = 90^\circ$ の直角三角形となり、 $\angle C$ の二方向はX軸、Y軸に平行な方眼方向となる。この方法で測量し、大浦浜遺跡ではX=175,705 km, Y=-48,340 kmの置点を区画設定中心点として調査区画を拡張していった。ただタテワ北麓地区、ヤケヤマ東麓地区では地形及び調査範囲に制約を受け設定方向を変えたが、この場合も各ポイント杭の位置は第V系内の座標値でおさえられている。

調査区画は、昨年度にひき続き最小単位を5m×5mとし、南東隅より、東から西へA～Z、南から北へ1～7とグリッド番号を定め各グリッドを代表する番号は、北西隅の杭に記入する事を原則とした。ただ南端地区は昨年度設定の1列より南に伸びた為、新たに0～05列を設け、ヤケヤマ東麓地区については、設定方向を変えた為、グリッドを代表する番号は南西隅の杭に記入する事にした。



第6図 第V平面直角座標原点と大浦浜遺跡中心点模式図



第7図 大浦浜遺跡調査区画図

今年度の調査対象地区は、南北列05～1までの地区と、27列以北の地区で発掘対象面積10,000m²、発掘実面積4,400m²である。尚、大浦浜遺跡のグリッド配置図及び地区名は第7図に示す。

(白本)

注

- (1) X軸方向は本来ならG・N(方眼北)と表示すべきであるが、T・N(真北)との差は半径10km以内では100万分の1ほどの差であり、あえて区別しなかった。

(2) 遺跡の範囲

昭和51・52年度に実施された予備調査で、大浦浜遺跡のおよその範囲が求められた。この成果をふまえて、昭和55・56年度の全面発掘が行なわれ、遺跡の約3分の2を調査終了、明年度2,400m²を残すのみとなった。2ヶ年の調査は架橋工事区域内だけの調査で、遺跡そのものは、工事区域外にも大きく広がっていることが、今回の調査で明らかになった。今後、大浦浜において調査区域の隣接地で開発が予想されるため、遺跡の範囲を極力推定しここに明示しておくことにしたい。

遺跡の南限は本書報告の南端地区(A・B-05区)とみてよく、これ以南は満潮時の汀線が長崎通丘陵の裾になり、海浜遺跡の立地条件からはずれるため、大きく遺跡が広がっていることは考え難い。

東限は現在の防波堤とみてよく、防波堤にそって発掘調査できたのは22列以南である。22列以北には遺跡が広がっていると推定されるが、大正年間に砂取りが行なわれており(砂取りの状況は、2mの等高線が東側で乱れていることで表現されている)、大きく攪乱をこうむっていることが予測される。また現代水路ぞいの部分は湿地や入江状になっていたと思われ、どの程度の遺跡内容なのか確定できない。22～48列間の、防波堤と今回の調査区域東側とにはさまれる部分(第2図D₁)は不確定の要素が残っているため、今後何らかの調査が必要であろう。

51列以北で、防波堤と今回のヤケヤマ東麓調査区とにはさまれる部分(第2図D₂)については、重要な遺構・遺物が包蔵されているとみて間違いかろう。ヤケヤマ東麓地区では調査区の東に花崗岩の地山が現われ、この地山から東に向って遺跡が広がっていた。遺跡は繩文時代・古墳時代・中世の三時期からなり、東に向うにしたがい、包含層は厚くなっていた。昭和53年、樅石中学校南の畑地で水道管建設工事の際、製塙土器の包含層が確認されている。昭和37年坂出市教育委員会によって樅石中学校校庭の一部が発掘調査されている。製塙土器や中世土器が検出され、ヤケヤマ東麓地区の調査結果と符号し、この部分に遺跡が広がっていることはほぼ確実である。ヤケヤマ北麓に3ヶ所試掘坑(第84図、5～7T)を設け遺跡範囲の確認作業を行ったが顕著な遺構・遺物は検出されなかった。ヤケヤマ東麓地区で遺跡の東限は現地表の標高3～4mで表現されるため、ヤケヤマ北麓の谷部もこの高さを遺跡の東限ラインとした。

さて、最後に今回の調査区の西側の部分であるが、この地区は判断が難しい。なぜならば、大浦浜遺跡は繩文後期と晩期との間で地形が変化したと推定されるからである。4章で報告しているように、浜の中央部に南から北に向って舌状の砂洲が伸びている。この砂洲上からは繩文晩期以降の遺構・遺物が検出された。砂洲の下には繩文後期の包含層が検出された。

縄文晩期以降の遺跡の広がりは、K列付近までということが今回の調査で確認され、調査は完了した。

縄文後期の包含層は、今回の調査区域西端でも確認されたため、さらに西に広がっていると推定できる。しかし、30列、34列の発掘結果からみると、K列以西になると遺物出土量は減少し、38列では層位的には逆転している箇所もあった。このようなことを考えると、縄文中・後期の遺跡の中心は西にあるのではなく、ヤケヤマ東麓付近に求めた方がよく、こう仮定すると、30・34列で検出した包含層はこの時期の遺跡の南端付近であったろうと推察される。

以上のように考え、調査区西限は調査完了し、それ以西は狭義の遺跡範囲外と判断した。

(大山)



第 8 図 調査区画設定状況

4 各調査区の概要

大浦浜遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡で、約30,000m²の広がりをもっている。このうち調査を行ったのは約20,000m²であるが、場所によっては層位・遺構・遺物の状況に大きな違いが認められる。

そのため本章では地点を重視し、600m²～1,000m²の各調査区ごとに土層や重要な遺構、遺構出土遺物について説明を述べることにする。各調査地区の包含層出土の遺物については本章ではありませんふれず、次章の時代ごとの遺物の中で説明している。

(1) 南端地区（第9図）

大浦浜調査区の南端、南北列3～05に位置する区画である。北は山道、西は山の斜面によつて仕切られ、東は海岸線が真近にせまっている。標高2.0～3.0mの位置に500m²ほどの平坦面を有し、西側がやや奥まった地形になっている。この地区は、湧水があるため近現代は畠地として利用されており、当時の井戸跡が西斜面下に見られる。

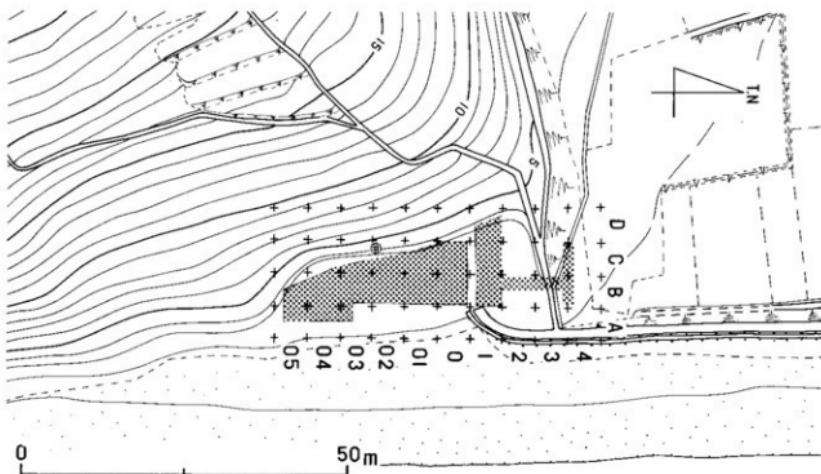
海岸線が真近にせまり平坦面が少ないとはいえ、生活水、日当り、冬期の季節風がさけられる点から見れば、居住区としての条件を十分かね備えた地区といえよう。

尚、南端地区の遺構、包含層より出土した遺物は、中世を代表して第5章で紹介する。

a 土層と遺物出土状態

以上の地区的土層を代表して、第10図にB-3～B-05区画東壁断面、C-0～D-0区画北壁断面を示す。

第1層は腐植土層である。全区画に10cm前後の堆積があり、一部第2層の落ち込みがある所



第9図 南端調査区グリッド配置図

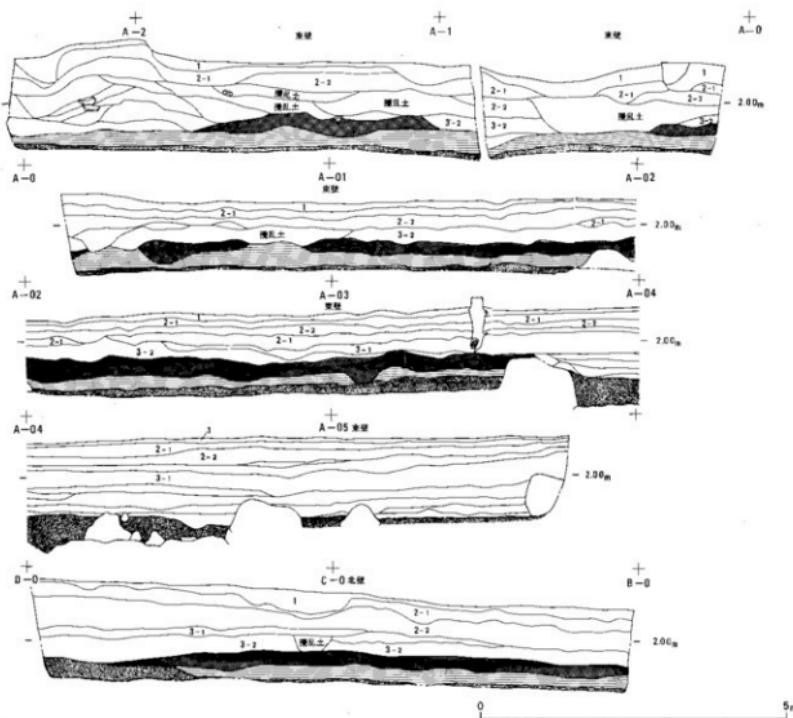
では30cmほどの堆積がある。出土遺物は近現代のものが多い。

第2層は根の進入により軟質になった土層で、花崗岩バイラン土をベースとしている。色調差で2層に細分した。標高2.2m前後の位置に20~80cmの堆積があり、山側に厚く海に向って徐々にうすくなる。出土遺物は近現代のものが多い。

第3層は花崗岩バイラン土をベースとした硬質な層である。硬度差で2層に細分した。標高2.0m前後の位置に20~40cmほどの堆積が見られる。出土遺物は近現代のものを含むが、輸入磁器の出土が目だつ。注目する遺物として円板状土・石製品が多量に出土した

第4層から第5層上面にかけては、遺構群を2面確認し、古代末~中世にかけての良好な包含状態を示した。そこで、第4層以下については、各層、遺構の出土遺物一覧表(第1表)と土層模式図(第11図)を示し、以下説明を加えていく。

第4層は黒灰色と灰白色のまだら模様の土層で、細砂をベースとしている。標高1.5~2.0mの位置に30~40cm前後の堆積があり、B-0~B-3区画の東壁断面に擾乱が見られるが、平面的には広い範囲ではない。B-04~05区画の東壁断面では、集水施設と考えられる遺構に切



第10図 南端調査区土層図

られた形となっており第4層は見られない。

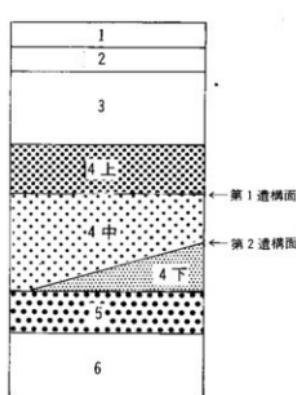
遺物出土状態は、第4層に2面の遺構群が検出された為、細分して行う。

第4層上層から第4層中層にかけては、鎌倉時代初頭を中心とした瓦器、輸入磁器の出土が多い。第4層上層に備前焼スリ鉢など近世陶器が4点出土しているが、B-01, 02区画に限られたものであり、部分的な擾乱と考えられる。第2遺構群から第4層下層にかけては、輸入磁器は出土しなくなり、瓦器も一点出土したにすぎない。この出土状態から見れば第4層は、第1遺構群に代表される時期と第2遺構群に代表される時期に分割される感がある。主な出土遺物として、第4層中層に北宋銭2枚、第4層下層に四耳壺、青銅製刀装具が出土し、その他、小鍛冶に関連した遺物として繩の羽口、鉄製品、漁具関係として土錘、蛤殻など、日常生活の出土が目立つ。その中に、尖底タイプの製塙土器が出土しており、共伴遺物の時代から考えると興味深い。

第5層は灰白色の均一な細砂層で、標高1.6~1.2mの位置に30~40cm前後の堆積があり、山際を除いて全域に堆積している。出土遺物としては、須恵器、土師器の出土が目立ち、注目されるものとして皇朝鏡（長年大宝）が一点出土した。

第6層は黄灰白色の粗砂層で、標高1.2~0.5mの位置に70cmほどの堆積がある。出土遺物は、磨滅した土器片が小量含まれるにすぎず無遺物層とした。尚、第6層の下は岩盤である。

共伴遺物から見れば、第1~3層が近現代の擾乱土、第4層が古代末~中世の包含層、第5層が古代の包含層と考えられる。



第11図 土層模式図

～出土遺物一覧表～

層位 遺物	第4層上層 (上灰, pH 標準水溶)	第1遺構面		第2遺構面 (土灰, pH 標準水溶)		第4層下層 (土灰, pH 標準水溶)	第5層
		第1層中層	第4層中層	第2層中層	第4層下層		
土 灰 面	315	425	280	60	29	173	
標準水溶	23	36	22	2	4	36	
黑色土層	10	5	8	0	1	7	
瓦質土層	2	1	0	0	0	0	
瓦 層	26	19	24	0	1	0	
鐵 制 品	1	8	2	0	0	0	
鐵 制 器	4	0	0	0	1	0	
鐵 制 品	52	48	30	5	1	43	
山芋ご開体	9	10	4	6	1	3	
鐵 制 品	26	9	5	5	4	4	
門掛状物品	117	0	392	0	0	5	
その他の		瓦質土層 標準水溶				圓錐刀札(1.1kg) 四耳壺(1.2kg)	長年大宝 (1.2kg)
鉄 制 品 (重さ, kg)	4.3	24.4	3.7	2.9	1.4	10.2	

第1表 南端出土遺物一覧表

b 第1遺構群

第3層下部から第4層上面で集水施設と考えられる湧水溜遺構、第4層を10cm前後掘り下げた段階で11個のピットと4個の土坑を検出した。湧水溜遺構の上場標高は1.8~2.0m、土坑、ピット群が1.7~1.9mを計り、10~20cmほどの標高差が生じている。この点については、湧水溜遺構にはしっかりした石組が見られ、ほとんど破壊を受けた跡が見られないのに比べ、ピット、土坑は砂層に形成されたものであるため、輪郭が検出された時点では、遺構面自体かなり掘り下げられていた事が考えられる。実際第4層上層と第1遺構群出土の遺物を見ても時期差は認められない。本来の遺構面は、土質変面である第4層上面の位置にあったものであろう。ピットには根石を持ち柱穴と考えられるものも見られるが、建物跡としてのプランは検出できなかった。尚、湧水溜遺構に関しては別項目をもうける事とし、以下主なものについて説明を加えていく。

P 2、埋土は、黒色によごれた砂より成り細かい炭化物を含む。直径62cm、深さ23cmほどのピットである。土師器甕、椀など5点、鉄釘1点、瓦質土器小片1点、大型に属する有溝土鍤（第133図19~21）12点、製塙土器体部、尖底タイプの底部（第138図6）など23点、径20~30cm大の花崗岩礫3個が出土した。花崗岩礫、大型有溝土鍤は、ピット壁面にそって円形にならべられ、上面は火を受けたらしく赤褐色に変色していた。大型土鍤を2次的に利用して炉として活用していたものと考えられる。

P 4、埋土は黒色の砂で、直径36cm、深さ10cmほどのピットである。土師器椀小片2点、瓦器椀（第131図4）2点、製塙土器片15点、径10~15cm大の花崗岩礫3点が出土した。礫は組み合わされており、根石として利用されたものと考えられる。

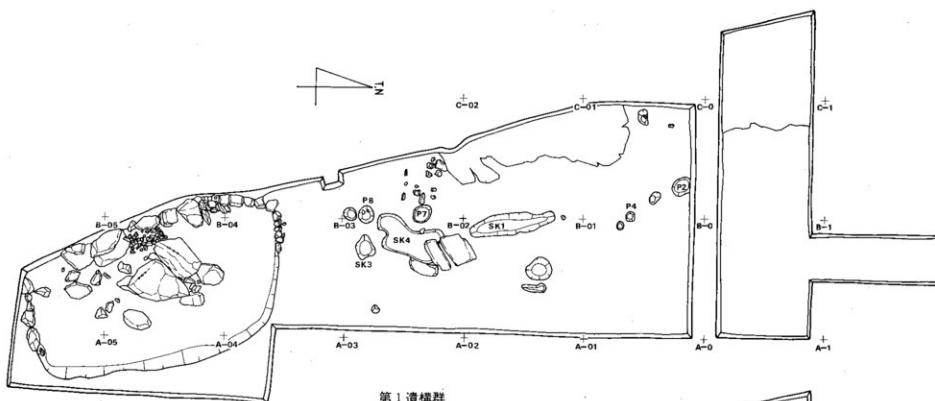
P 7、埋土は黒色の砂層で、直径77cm、深さ15cmほどのピットである。土師器甕（第132図30）、椀、皿など小片14点、内黒の黒色土器椀片1点、管状土鍤2点、須恵器片2点、瓦器片1点、製塙土器2.78kg、花崗岩小礫2個が出土した。製塙土器は、埋土全体に密な状態で含包されており、尖底タイプの底部17点、焼成前に5~7mmほどの穴を開けたもの2点が含まれていた。

P 8、埋土は黒色の砂で細かい炭化物を多量に含む。直径70cm、深さ17cmほどの半球状に近いピットである。土師器皿1点（第132図24）、蘿の羽口2点（第134図25・26）、鉄滓2点、鉄釘1点、製塙土器体部小片8点、人頭大の礫1個が出土した。小鍛冶に関係した施設とも考えられるが、詳細は不明である。

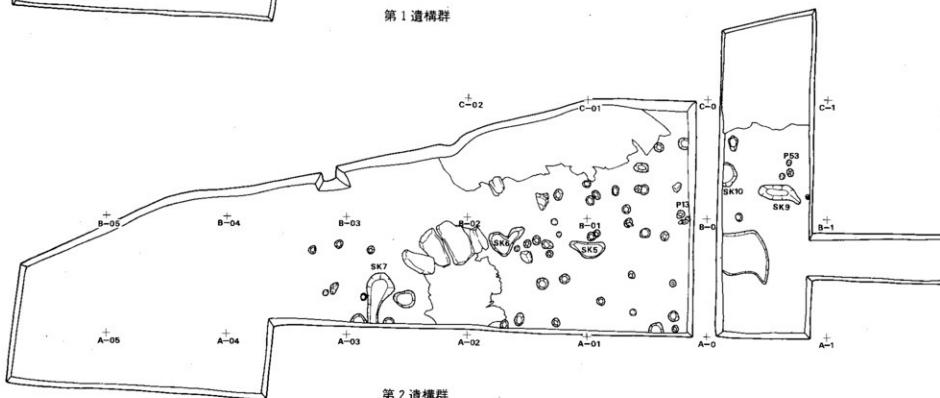
S K 1、埋土は黒褐色の砂で、長径266cm、短径84cm、深さ5cmほどの土坑である。土師器甕（第132図23）、杯（第132図25・26）、甕（第132図27~29）など63点、須恵器高台付杯など8点、内黒の黒色土器片3点、鉄滓3点、製塙土器4.62kg、漁具として蛸壺1点、管状土鍤2点が出土した。製塙土器は、尖底タイプの底部18点、焼成前のせん孔があるもの（第139図3~5・8）4点の出土が見られる。

S K 4、埋土は黒褐色の砂で、製塙土器を多量に出土した土坑である。長径294cm、短径112cm、深さ約30cmを計る。土師器片20点、須恵器片1点、瓦器片2点、蛸壺10点、製塙土器16.76kgが出土した。製塙土器は尖底タイプの底部（第138図3~5・9~15・7）が59点、焼成前のせん孔があるもの（第138図6・7）7点が含まれている。

共伴遺物から見て、第1遺構群は13世紀初頭と考えられる。出土遺物には、椀、皿、漁具、鉄釘など日常生活品の出土が多く、居住区跡としての性格が強い。



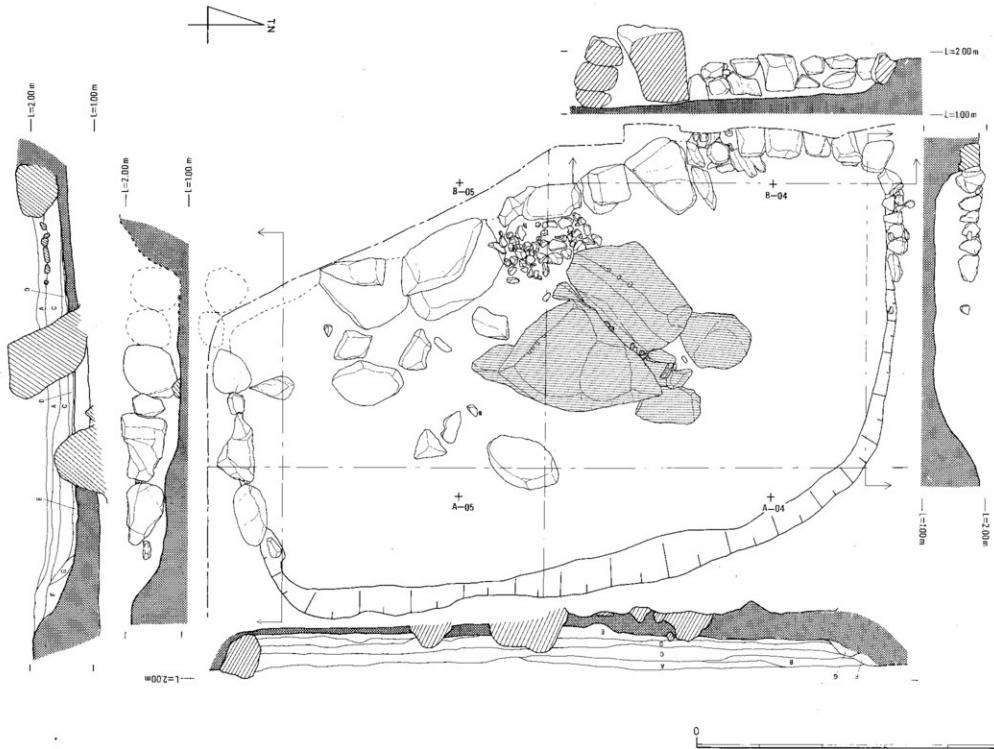
第1遺構群



第2遺構群



第12図 第1・第2遺構平面図



第 13 図 湧水溜平・断面図

c 溢水溜遺構（第13図）

第3層下部から第4層上面にかけて検出したもので、南北方向に長い不規則円形の遺構である。使用目的は、山際の湧水地点に設けられている点、側面に水漏れを防止する為と考えられる粘土が用いられている点、実際に湧水を溜める機能をはたす点から集水施設と考えられ、以後湧水溜遺構と呼ぶ。

規模は、南北方向10.5m、東西方向7.4mを計り、深さは50～70cm前後である。北西部コーナーと南部に護岸状の石組を配し、北部の東半分から東部にかけて配石は見られない。配石は上場標高がほぼ2.0mで水平に並び、利用された石材は花崗岩で、径20～100cmほどのものである。南西部には、人為的な配石は見られず、岩盤より続く礫を利用し仕切られた形となっている。

次に断面図で土層について観察する。層は以下の5層に分けられる。

A層	淡灰色粘質土層	B層	灰褐色バイラン土層
C層	暗灰色粘質土層	D層	淡灰色粘土層
E層	赤褐色硬質土層	F層	黒色粘土層
G層	黒色粘土と花崗岩バイラン土混在層		

A～Dまでの層は遺構内の埋土で、この遺構が機能をはたしていた時期から廃棄されるまでに堆積したものである。

E層は鉄分が酸化集積し層を形成したもので、不透水層となっており底からの水漏れを防止している。ただこの層は自然現象でしか形成されない為、自然の不透水層を二次的に利用したものであろう。

F・G層は共に黒色の緻密な粘土で、側面にはりめぐらされており、水漏れを防止するために施されたものである。バイラン土が混在する点で2層に細分した。

出土遺物としては、土師器291点（第132図31～40）、瓦器13点（第131図5）、青磁5点（第130図21）、鉄釘3点、漁具として大型に属する有溝土錐4点、常滑焼破片5点、製塩土器片55点が出土している。

d 第2遺構群（第12図）

標高1.4～1.6m、第4層下半から第5層上面にかけて検出したもので、遺構には7個の土坑、40個のピットがある。ピット内には根石を含み、柱穴と考えられるものもあるが、建物跡としてのプランは見られなかった。以下主なものについて説明を加える。

P13、第5層上面で検出したもので、直径34cm、深さ26cmほどのピットである。埋土は黒灰色の砂で、土師器椀（第132図57）2点、製塩土器小片5点が出土した。

P53、第5層上面で検出したもので、直径26cm、深さ10cmほどのピットである。土師器椀（第132図56）が1点出土した。

S K 5、第4層下部で検出したもので、長径142cm、短径68cm、深さ10cmほどの土坑である。埋土は黒褐色の砂層で、出土遺物として土師器小片3点、婧壺1点、土錐1点、製塩土器1.2kgが出土した。製塩土器の中には尖底タイプの底部（第138図20～22）8点、焼成前の穿孔があるもの2点が含まれている。

S K 6、埋土は黒褐色の砂で、長径110cm、短径60cm、深さ13cmほどの不定形な土坑である。第4層下部にて検出した。土師器椀片1点、製塩土器1.70kgが出土し、製塩土器の中には尖底タイプの底（第138図16・18）5点、焼成前の穿孔があるもの1点（第138図10）が含まれる。

S K 7, 埋土は黒灰色の砂で、長径210cm, 短径46cm, 深さ15cmほどの不定形な土坑である。第4層下部にて検出した。土師器小片3点、製塙土器片55点が出土し、製塙土器の中に、口縁部下方2.5cmほどの位置に、径8mm前後の穿孔が見られるもの（第139図20）がある。

S K 9, 第5層上面で検出したもので、長径182cm, 短径64cm, 深さ32cmほどの土坑である。埋土は黒灰色の砂で土師器碗（第132図58）、皿（第132図61）など3点、製塙土器8片が出土した。

S K 10, 第5層上面で検出したもので、埋土は黒褐色の砂質である。径100cm, 深さ30cmほど の土坑で半分は壁面にかかっている。土師器は皿（第132図59・60）など12点が出土し、その他に製塙土器小片が25点含まれていた。

今回の概報では第1遺構群に先行する時代として12世紀後半を与えておく。

e 小 結

今回の概報では、出土遺物の変化により第4層以下を3期に分けておく。

I期、第1遺構群に代表される時期で、第4層上層～第4層中層までが該当する。鎌倉時代初頭頃の瓦器、輸入磁器の出土が多い。

II期、第2遺構群に代表される時期で、第4層下層までが該当する。瓦器、輸入磁器がほとんど出土しなくなる。

III期、第5層に代表される時期で須恵器の出土が目だってくる。

I期については、瓦器、輸入磁器より13世紀初頭の時代が与えられ、II期については、土師器碗の形態からすれば、I期より若干先行するものとして12世紀後半という時代を与えておく。III期については幅を持たせ古代としておこう。

出土遺物としては、I期に碗、皿、ふいご口、鉄製品、漁具といった日々の生活用品の出土が多いのに対し、II期、III期には銅製刀道具、四耳壺、皇朝錢、ミニチュア製塙土器といった祭祀に関係した遺物が出土している。これは、III～II期に祭祀に利用されていた場所がI期に居住区となつたためであろうか。この点についてはI期～III期を通じて出土する尖底タイプの製塙土器の使用目的にもかかわってくる問題であり、今後の検討としたい。（白本）

注

(1) 出土遺物一覧表は、B・C・D-1区から南の区画に出土したものを用いた。

(2) B～F-4～8区(第14図)

a 土層(第14図)

この区画は、大浦浜の南東隅に位置する。

基本的な土層序は、B～D列とE・F列でその様相が異なる。B～D列は第14図に示すように、第1層表土層・第2層耕作土層・第3層奈良時代後半～平安時代の遺物包含層・第4層作業面・第5層奈良時代の不良包含層・第6層古墳時代の不良包含層・第7層無遺物層となる。

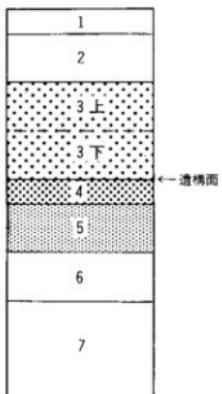
このうち、第5層・第6層は遺物の包含量が微量で時代幅が長く、その多くは磨滅している状況であったので、全区画にわたっては掘り下げず、部分的な土層観察にとどめた。第5・6層の形成については、後述するように調査区南側で検出している自然の溝を利用した水流の溝引きによって堆積一擾乱一再堆積が繰り返されながら形成されたと判断している。

第4層は、厚さ20～30cm程の綺まった土で形成されており、炭酸カルシウム塊の散布が多く認められた。この面で確認した遺構については次項で触れる。

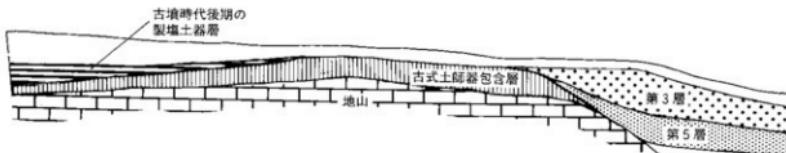
第3層は、調査時点では上層・下層の区分を用いていたが、出土遺物の年代にほとんど差が見られない。ただ上層では12世紀末～13世紀初頭に比定される青磁が数十片検出されているが、平安末に比定される遺物はこれ以外には非常に少なく、平安時代末頃に第3層の上部が擾乱されたことによって分離形成された層と判断した。従って、同一の特徴を有する多量に出土した製塙土器等については、第3層下層の示す年代観を適応した。

次にE・F列であるが、この部分では、第1層表土層・第2層耕作土層・第3層古墳時代後期の製塙土器層・第4層古式土師器包含層・第5層弥生時代後期の包含層・第6層無遺物層(地山)となる。第5層からは、大浦浜I(第6章第1節参照)の時期と考えられる大形の鉢を一点検出したのみである。第4層の古式土師器についてはまだ整理が終了しておらず、確実な年代観を示すことはできないが、大浦浜II～IIIの段階を考えている。この第4層が古墳時代後期の生活面となり、この層を掘り込んだ同期の製塙に伴う炉址が一基検出されている。

以上のことからこの地区的地形を考えると、地山はD・E列の境付近から急激に東側へ傾斜している。古式土師器層も同様の状態で観察されており、古墳時代後期には実質的にE・F列が形成されていたにすぎない。又、南側に向っては4・5列付近から地山が傾斜し、南側の長



第14図 土層模式図



第15図 A-J区8列北壁東西断面模式図

崎通丘陵との間に自然の溝が形成されていたことがわかる。これは5列の古墳時代後期の包含層が、6～8列に比べて厚く堆積して自然溝の大半を埋めてしまつてからのちも、やや凹んだような状況を呈することから、奈良時代頃までは、長崎通とタテワ丘陵によって形成されている谷筋の水の通路となっていたことがわかる。

ようやく現在の地形に近い状況が形成されたのは奈良時代に入ってからであり、B～D列が安定した段階でようやく製塩活動に利用され始めたものと考えている。

古墳時代後期・奈良時代～平安時代の製塩活動が、波打ち際で行なわれていることは興味深い。

なお、第4層は、B列の一部とC・D列に限って確認されている。

b 第4層上面の遺構配置について

第17図は、第4層上面で検出された遺構を中心に、第3層下層及び第5層面で確認された遺構の一部も同図に記入している。

B列は、その大半で第4層が検出されておらず、第4層上面を生活面としていた当時はB列では第5層上面が同一面となりうる。こうした状況から、B列については第5層上面で検出された遺構についても検討を要する。又、SM01については、第3層下層の掘り込み遺構であるが、後述するように製塩土器の年代観に重要な一石を投じることになった為記入した。

さて、第4層は土層の項でも若干の説明を加えたように、炭酸カルシウム・土器片などの人為的な廃棄物の堆積により形成された層であると考えているので、第4層中の遺物については、その形成期間を示す遺物の年代幅がある。しかし、第4層が互層的に把握できている訳ではない。

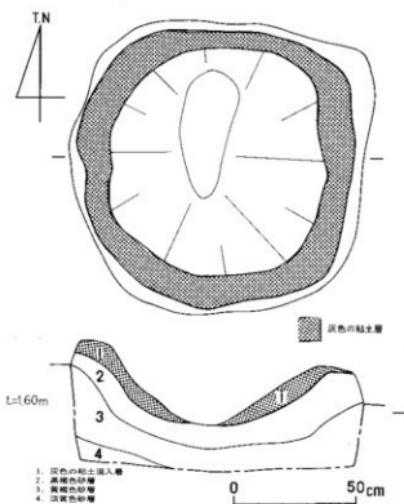
この面での遺構のあり方として、土坑の埋土が製塩土器+炭酸カルシウムで形成されているものか、炭酸カルシウム塊のみで成り立っており、例外的に貝殻を廃棄した土坑もある。

こうした土坑の他に、粘土張りの土坑が3ヶ所で確認されている。これらは、他の土坑に比べてやや深く、逆円錐台形を呈するのが一つの特徴である。

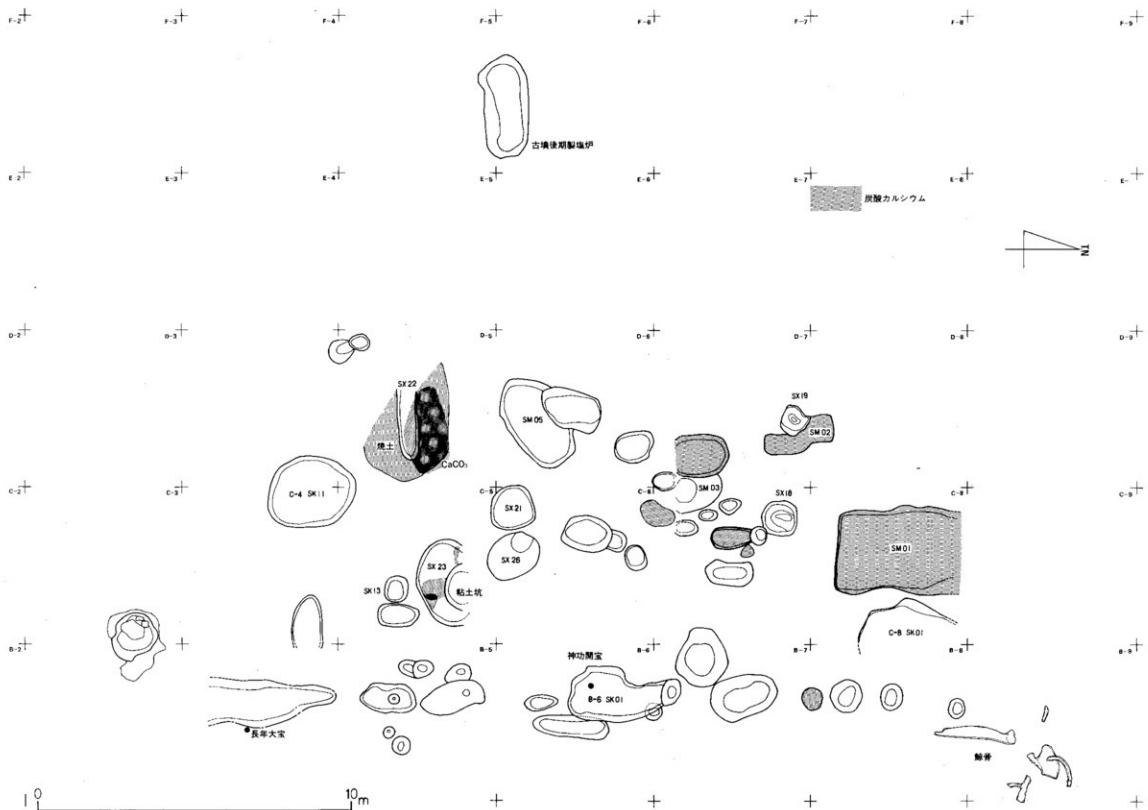
現時点では、数多くの土坑の内容を十分に検討していない為、その利用方法については判断できないが、検出した状況から推測すると、粘土張り土坑+土坑+焼土面が製塩作業の一工程を示しているものと考えられる。

c C-7区 S X 18 (第16図)

S X 18はC-7区で検出した粘土混じりの(灰白色の凝結物質)を壁面から床面にかけ敷いている土坑である。予備調査で上



第16図 C-7区 S X 18実測図



第 17 図 A～F—3—9 区第 4 層上面造構配置図

面構造を調査している。本調査でも同様に調査を行なった。上面において(灰白色の凝結物質)が約15~20cmの幅で帯状に円形を形ずくっており、その周囲にも薄く10cmほど広がっている。中央部は少し凹んでおり、この部分には(灰白色の凝結物質)はみられなかった。埋土は予備調査の際抜いているので不明であるが、周囲の土層からみて、第3層が埋まっていたと思われる。平面観察においては、径約1.2cmの円形状の土坑となった。断面を観察すると、深さ約20~30cmを計り、第4層を掘り込んでいる。上面の(灰白色の凝結物質)には淡い灰緑色の粘土がブロック状に混入している。その物質は土坑の壁面から中央部に向かって堆積しており、厚さは約5~10cmを計る。中央部の凹みでは、平面観察同様(灰白色の凝結物質)の堆積はみられない。

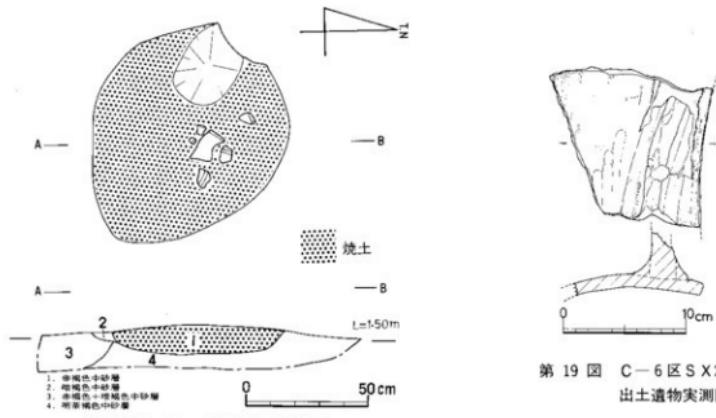
次にこの土坑形成の時期であるが、第4層を掘り込んでつくられていることから、7世紀代にまで溯ることはないとと思われる。下限については部分的に第3層が残っており、9世紀に入ることはないとと思われるが、確定はできない。

この土坑の性格は不明である。覆屋などの上部施設に伴うピットも検出されなかった。また、本年度の報告で扱う中世の粘土土坑とは時期差が異なり、焼けた石をもっていない点など構造上にも差異があり、同じ性格とは言えないと思われる。ただ第4層が製塩活動に伴う作業面を形成していると考えるならば、この遺構も製塩作業の一工程に伴う施設として何らかの機能を果たしていたと推定できる。あるいはC-6区S X21と対になって使用された可能性がある。

遺物は、小片が多く、さらに検討の必要があろう。

d C-6区 S X26 (第18・19図)

C-6区南端の第5層上面で確認された焼土面である。西端部分を後世のピットによって切られているが、長軸は1m、短軸が0.7mのほぼ楕円状の平面を形成する。焼土面は第5層の砂が赤褐色に変わっている、約10~12cmほど下まで同色になっている。焼土上面で竈の破片(第19図)が出土した。このため、焼土は竈の使用により形成されたものと思われる。竈は半截砲



第18図 C-6区 S X26実測図

第19図 C-6区 S X26
出土遺物実測図

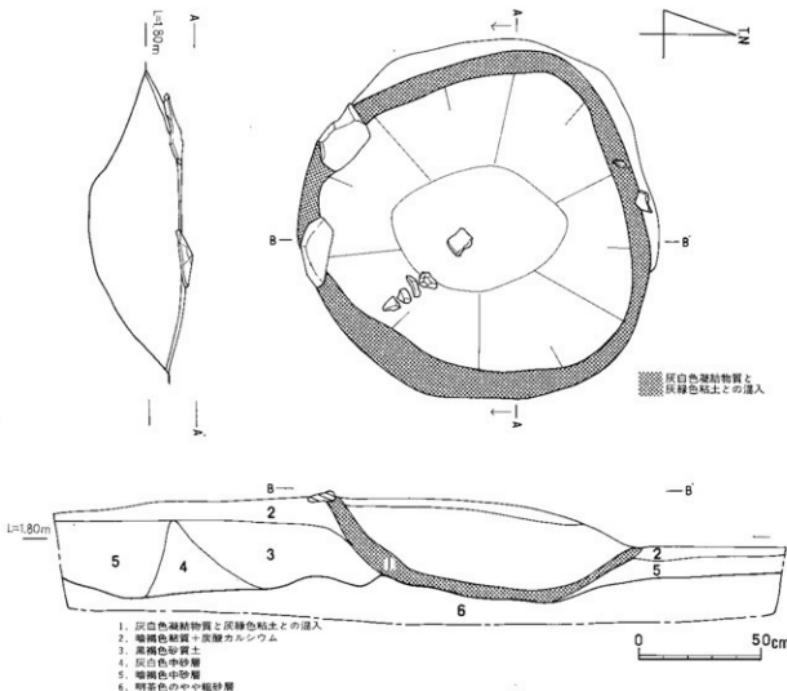
弾型の円筒の焚口の周囲に廻を付けている。破片のため底径・器高は不明である。内外面ともにタテ方向のハケ目を施す。廻の剥落部分の接合面にもハケ目がある。焚口付近はナデ調整を内外面とともに施している。

この遺構の時期は不明である。また焼土以外に灰・炭類も検出されなかったので、長時間にわたっての使用ではないと思われる。

e C-6区 SX21 (第20図)

SX21は、C-6区西南端に位置し、SX18と似かよった構造をもつ。SX21は径1.5m・深さ約30~40cmほどである。ただ中央部の凹みの部分にも(灰白色の凝結物質)があり、壁に花崗岩が乗っている点が違っているが、大差ない。断面観察では第4層を掘り込んでおり、C-7区SX18と同様、(灰白色の凝結物質)に粘土が混入している。時期はSX18とほぼ同時期に形成されたと思われ、性格も同じものと推定できる。

遺物は小破片が多い。



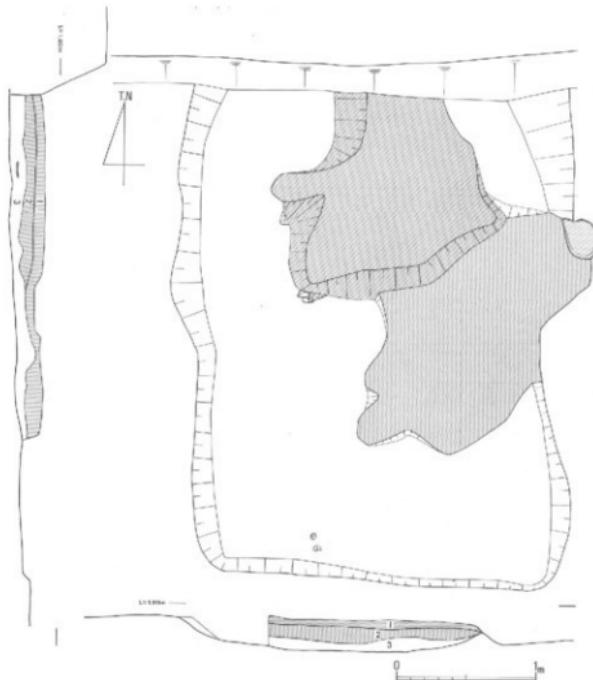
第20図 C-6区 SX21実測図

f C-8区 SM01 (第21図)

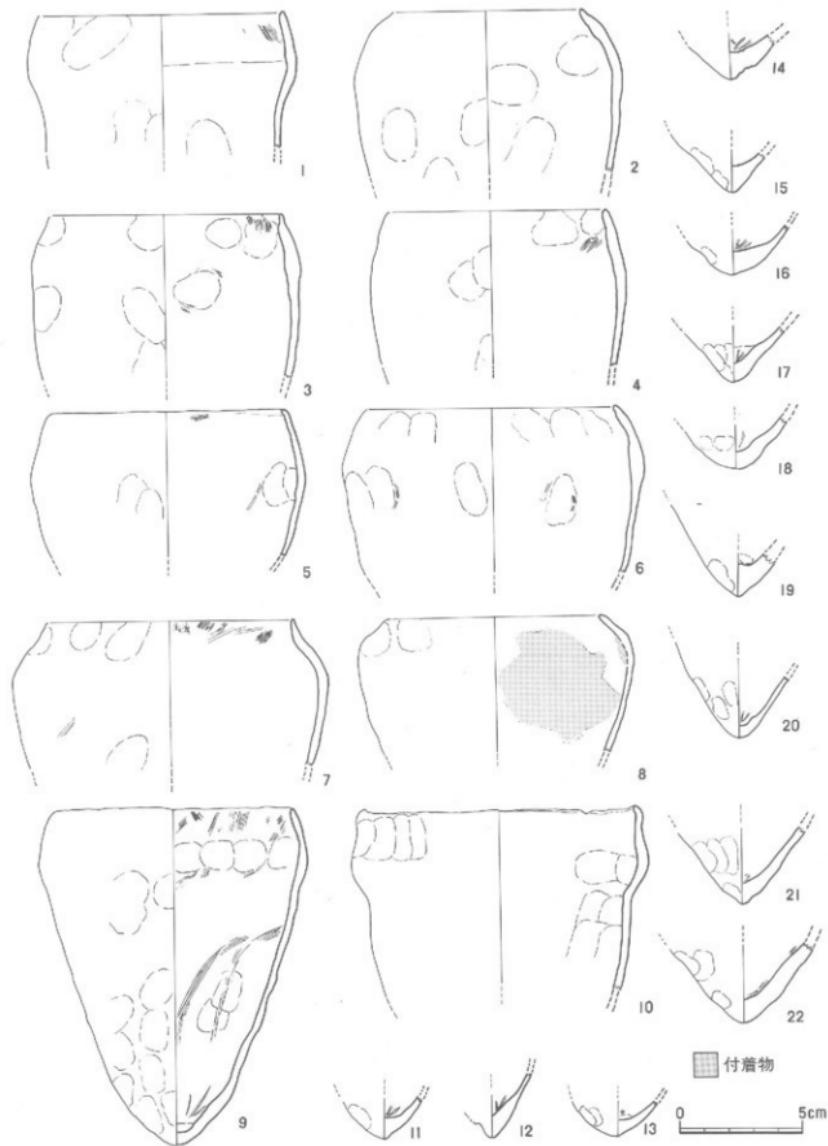
C-8区の北端で畦畔に掛かって検出された土坑である。南北3.7~4.2m・東西2.8~3.0m、上部は若干削平されていたが、現状で深さ20~30cmを計る。この土坑は、第3層下層を掘り込んでいる。出土遺物に時期差はないため、一時期に埋められたものであろう。ただ第4層が混入しているため、製塩土器に関しては時期幅がある。

埋土は3層に分かれる。上層及び中層は(灰白色の凝結物質)が固くなつて層を成しており、最下層は(灰白色物質)と砂層が混じっている。いずれの層からも製塩土器の破片が多量に出土している。そして中層より炭が、最下層より9世紀前半代と推定される須恵器坏身・大甕片(第24図一1~2、第25図)ほぼ完形に復元可能な尖底をもつ製塩土器(第22図一(9))が共伴して出土した。

この土坑は、9世紀前半を下る遺物はなく時期としては、奈良時代最終末~平安時代初頭と考えられる。性格としては製塩活動に伴う製塩土器の廃棄坑か、あるいは最下層の遺物出土状況からみて祭祀関係の土坑とも考えられる。



第21図 C-8区SM01実測図



第 22 図 C-8 区 SM01 出土遺物（製塩土器）実測図

この土坑より奈良時代～平安初頭の製塩土器が出土した。製塩土器の時期は、第4層の混入があるため一時期に限定できない。器形は薄手の丸底で口縁が内湾するタイプと、尖底で口縁が内湾するものとの二種類が想定される。出土した製塩土器の全重量は、約30kgであり、出土した尖底の個数は67個となる。

1～10は口縁部である。いずれも内湾している。表面は茶褐色、内面は赤茶褐色を呈するのが一般的であり、器表面は色褪せてピンク色や赤紫色などに部分的に変色し、肌荒れや表面剝離を示している。白い吹きこぼれと思われる物質が内外面に付着している破片が多い。胎土は1～2mm前後の砂粒を含み、同じ尖底の器形ながら時期が異なると思われる南端調査区の製塩土器よりも粒は細かく、また金雲母の含有も目立たない。成形は粘土帯の輪積みと思われ、器表面に指頭圧痕が残っているので、接合は指で行なったのであろう。外面の調整は整形後、ナデ上げたと思える。内湾は手によって無難作に行なわれている。内面にも指頭圧痕が残り、ナデも施されているが、端部のナデ方向は一定でない。口縁部の口径は10～11cm、口縁部の湾曲点の器厚は3～4mm前後である。口縁端部の形態は肥厚するもの4、9、そのまま終結するもの7、あるいは若干内に折れ曲がるもの5、10など多様である。

11～22は尖底部である。色調は口縁部とほぼ同じであり、色褪せている。二次焼成を受けているのか器壁は脆い。外面に指頭圧痕が残っている。内面の調整は指の圧痕とヘラ状工具の圧痕が残っている。両者の調整を受けている9もあり、この差は明確ではない。尖底の立ち上りは残存状態が悪いので緩急などは分類できない。

9は、最下層より9世紀前半代の須恵器坏身と共に出土したものである。完形に復元した法量は口径約10cm・器厚3～4mm・器高約14cm・重量約180g・容量約530ccとなる。胎土は1～2mmの砂粒を含み、外面は茶褐色である。表面は指頭圧痕が底部まで残り、内面は底部から口縁に至るまでナデ上げ、その後に内湾させている。また口縁部を指で整形し、形態はやや端部が肥厚して終り、波打っているのは他の土器に比べ少ない。底部内面はヘラ圧痕と指頭圧痕が残っている。

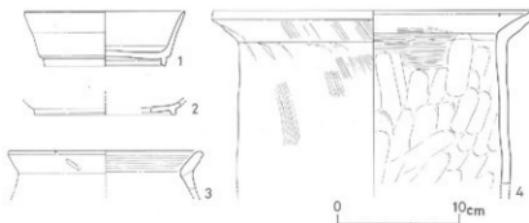
製塩土器の廃棄は破片がほとんどで、完形に近い製塩土器の出土はほとんどない。ゆえにこの土器は通常の製塩活動により廃棄されたという点で疑問が生じる。また肌荒れが少なく、この土坑の出土遺物に付着している物質もない。さらに部分的な変色なども見当らない。以上のことにより、この土器は通常の製塩活動に使用されたものでなく、特別な目的（祭祀）に用いられた可能性が出てくる。



第23図 S M01遺物出土状況写真

S M01からは、須恵器・土師器ともに出土しているが、ここでは年代を比定しやすい須恵器についてのみ述べてみたい。

第24図-1は、S M01の床面上で、完形に近い製塙土器と共に検出された坏身である。体部は直線的に外反し、端部は丸く終わる。高台はやや内湾し、内傾する端部を有する。高台から体部にかけてやや丸味を持ちながら続く。

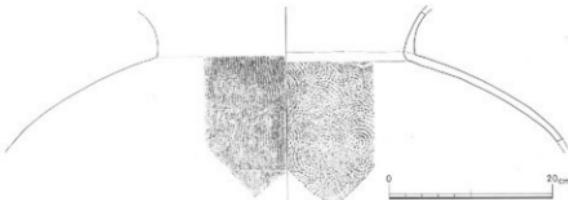


第24図 C-8区 S M01出土遺物実測図(2)

第25図は、須恵器大壺である。口縁部が欠損しているが、体部・頸部は鋭い稜を持ち「く」の字に外反する。体部内・外面ともに叩き目が見られ、炭酸カルシウムの付着が著しい。

壺身の特徴として、高台の形態がまずあげられる。類似した資料としては、平城VIに比定される長岡京出土土器と求めることができ、実年代は800年前後（8世紀末～9世紀初頭）とされる。

(注) 『平城宮発掘調査報告VII』奈良国立文化財研究所

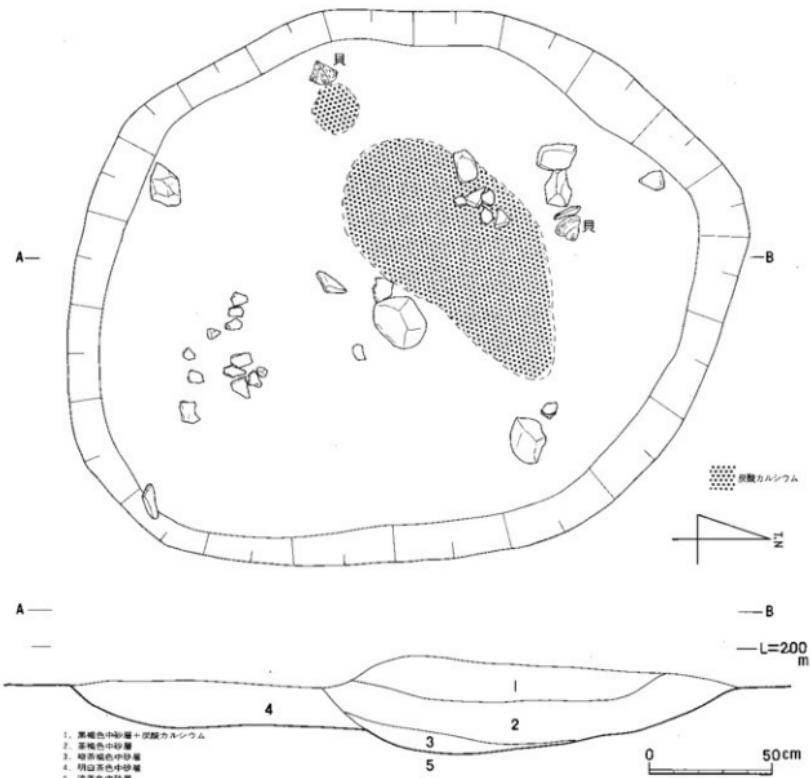


第25図 C-8区 S M01出土遺物実測図(3)

g C-4区 SK11 (第26図)

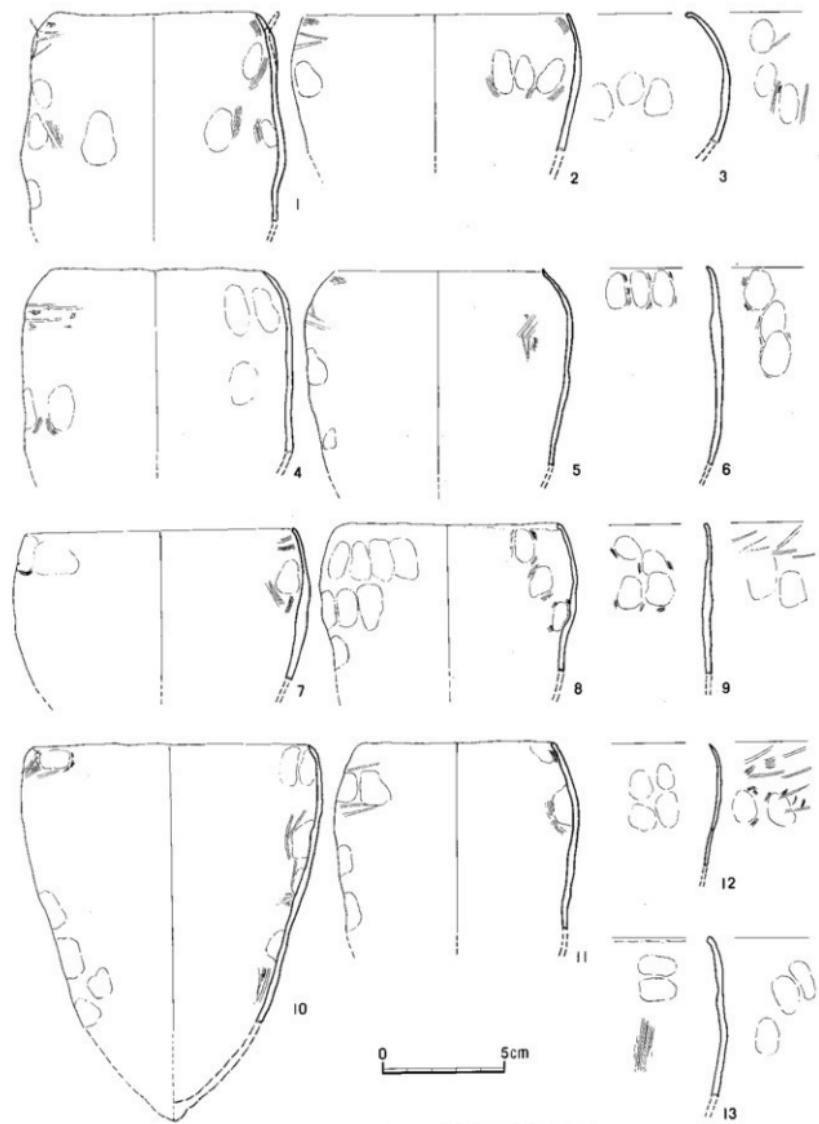
C-4区の西南で検出され、第3層最下層除去後確認された。南北2.7m・東西2.3m・深さ20～30cmの楕円状の土坑である。この遺構の上面は周囲の第4層と同様な状況で、見過せば同層として除去する恐れがあり、断面観察により掘り込みを確認し、土坑とした。埋土は4層に分かれる。第1層は（灰白色の凝結物質）を含む黒褐色の砂土層で、尖底をもつ製塙土器の大好きな破片を含む。第2層は黒褐色砂質で、破片は細かくなっている。第3・4層は色調は異なるが、上層の浸透層と思われ、第5層のベースと基本的に同じ層と考えられる。

出土遺物は尖底で口縁が内湾する製塙土器・土師器坏身・椀・甕片などで、時期は共伴遺物が小片のため不明である。製塙土器の廃棄坑の可能性が強い。



第26図 C-4区SK11実測図

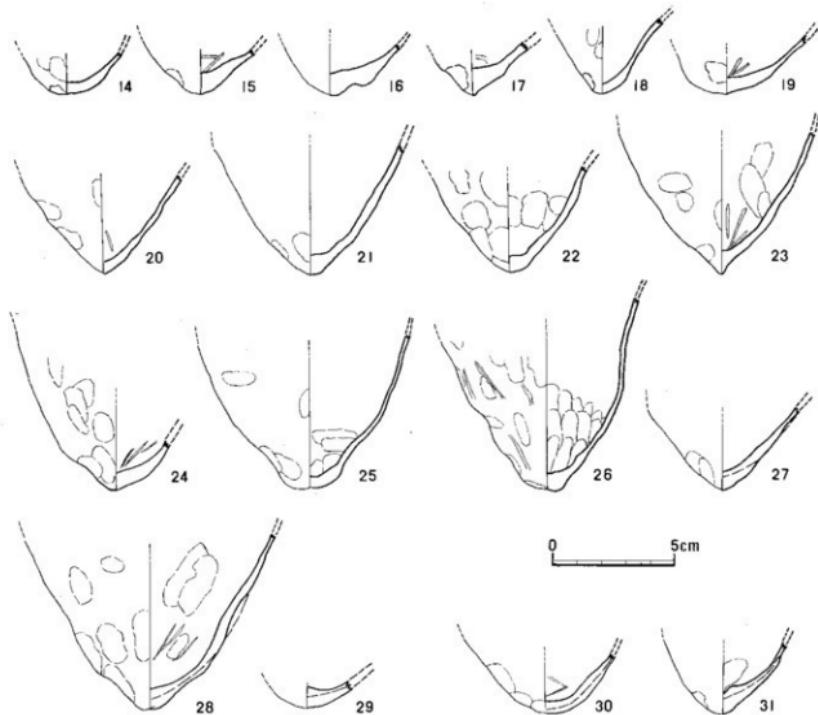
この土坑から出土した製塙土器の全重量は9,255g、尖底の出土個数は約40個を数える。第27図1~13は口縁部である。口径は10~11cm前後を計る。器厚は薄いが、第5層出土の3類の製塙土器に比べ、湾曲点がやや厚くなり、4mm前後になる。胎土は1~2mmの砂粒より成り、焼成の具合は他の土坑と同じである。外面は茶褐色、内面は赤茶褐色を示しているのが一般的である。器壁は脆く剥落している。吹きこぼれの付着している破片もあるが、C-8区SM01ほど数はない。成形は指で粘土帯を接合して行ない、表面に指頭圧痕がみられる。内面は口縁端部までナデ上げ、その後に内に折り曲げを行なっている。端部のナデ方向は一定でない。端部の形態はC-8区SM01と同様であり、一定の分類の指標にならない。また湾曲点から端部にかけて器壁が薄くなる破片が目立つが、10・11・13の様にむしろ肥厚しているものもあり、共通の要素とは言えない。3を第5層の出土製塙土器と比較してみると、湾曲点の薄さ・端部の形態からみて第5層出土の3類に相当するもので混入したものと考えられる。C-8区SM



第 27 図 C-4 区 SK 11 出土製塙器実測図(1)

01の出土遺物に比べ口縁の内湾している比率は、この土坑では少ない。3だけが例外的と思える。

第28図14~31は底部である。14~26は尖底部分まで指により成形したと思われる。27~31は底部と先端部分を別々に作り、さらに指で接合したものであろう。後者の成形技法は底部が半截しているものに限られ、半截観察すればこのタイプは増加する可能性が高い。内外面ともに指頭圧痕が顕著である。内面調整・底部立ち上りの緩急は、C-8区SM01と同じ傾向と思える。



第28図 C-4区SK11出土製塙土器実測図(2)

h C-4区SK11出土の土師器（第29図）

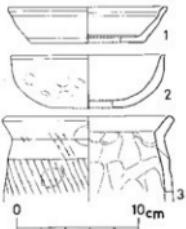
1は土師椀で、底部から内湾しながら上方に伸び平坦な端部を持つ。内外面とも指ナデによる調整を施す。

2は土師器坏身である。平底を有し、体部はやや内湾しながら伸び端部で外反する。端部は肥厚して終わる。内外面ともナデ調整である。

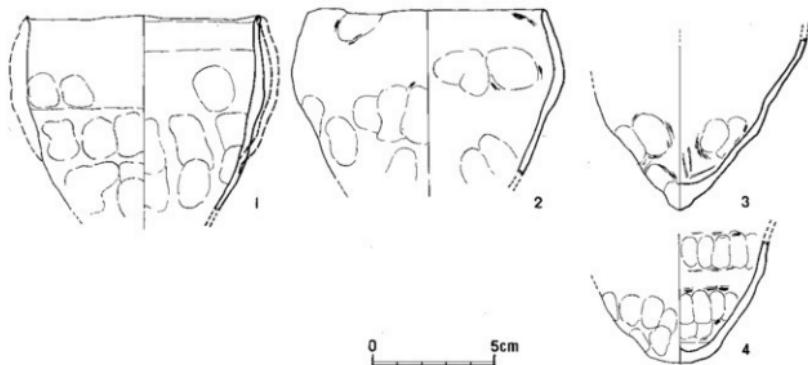
i C-5区 SK13 (第30図)

南北70cm・東西90cm・深さ10cmの楕円状の浅い土坑で、第4層上面で検出された。埋土は第3層と同層である。出土遺物は口縁が内湾し尖底をもつ製塙土器である。

1~4までが比較的大きな破片である。復元口径は10cmを計り、湾曲点の器厚は4~5mmで、ややC-5区SK11出土遺物よりも厚い印象を受ける。成形・調整などは他の土坑の資料と同じである。



第29図 C-4区 SK11
出土遺物実測図(3)



第30図 C-5区 SK13出土製塙土器実測図

j C-8区 SK01 (第31図)

SK01は、C-8区とB-8区にかかって検出したが、B-8区側では明確な肩を検出することができなかった。

長径3.15m、短径3.0mを計る土坑で、現状では深さ0.5mのほぼ円形の土坑である。土坑底には、土師器碗の他、土師器片と多数の貝殻及び炭酸カルシウム塊が検出されている。

土師器碗は口径12.6cm、器高6.3cmを計り、淡い赤褐色を呈す。焼成は良好で内外面ともナデ調整を施し、端部はやや鋭くなっている。

土坑内の遺物の在り方からすれば、一時期のゴミ穴とも考えられるが、やや内容物の量が少ないのが難点である。



第31図 C-8区SK01平面及遺物出土状況図

k B-6区SK01の遺物（第32図）

SK01はやや長い楕円形を呈する土坑で、神功開宝を1点出土している。

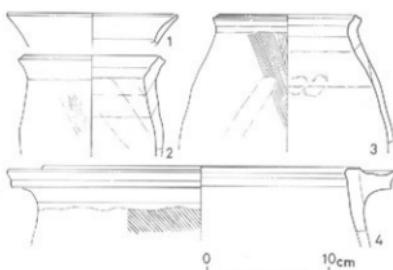
SK01から出土した遺物で図化できるのは次の4点のみである。

1は土師器の杯で、平底であろう。底部から外反して内面が若干肥厚する口縁端部を持つ。淡い茶褐色を呈し、焼成は良好である。

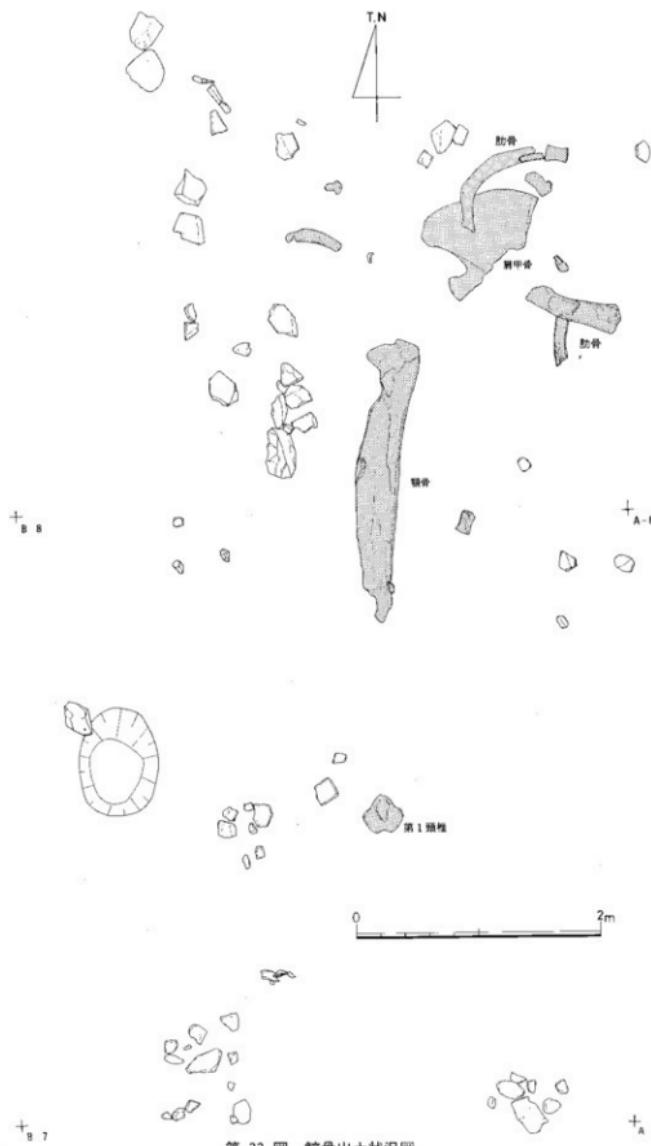
2は土師器の壺で、やや長胴の体部に「く」の字に外反する口縁部を持つ。口唇部はやや凹んでいる。

3も土師器の壺で、2に比べてやや大きく、下ぶくれの体部を持つものと思われる。口縁部はやや外反するが短い。

4は土師器の羽釜である。ツバは水平方向に伸び、端部上方が斜め方向に拡張する。口縁部はほとんど上方には伸びない。体部は荒い刷毛目調整を施す。



第32図 B-6区SK01出土遺物実測図



第33図 鯨骨出土状況図

I SM05出土の土師器（第34図）
1・2は壺形土器で、ほぼ同一形態である。

口縁部は「く」の字に外反し、端部は1は平坦で、2は丸く終わる。

3は須恵器杯蓋の宝珠つまみの破片である。形態はほぼ円柱状に直立し上面は丸く終わる。

m 鯨骨出土状況（第33図）

鯨骨は、B-8・9区第5層上面で検出した。鯨骨は完全な形を成しておらず、下顎1・第1頸椎1・肩甲骨1・肋骨2が散在的に出土している。この他、骨片を多数得た。

下顎は、長2.36m、幅0.36mを計り、歯はなく、ヒゲ鯨類に属するものと思われる。

第1頸椎は、幅0.32m、最大高0.23m、を計る。

肩甲骨は長1.04m、幅0.68mを計り、幅の広い感じを与える。これは、ヒゲ鯨類の特徴となっている。

肋骨は各々、長0.68m、幅0.12m、長0.80m、幅0.24mを計る。

以上のことからすると、この鯨骨はヒゲ鯨類に属するものと考えられる。

次に、出土状況であるが、第5層上面に散在的に分布し、特に第1頸椎は若干離れて単独で検出されている。又、これ以外の骨格は見あたらず、人為的な解体を推定している。

これは、同一面で楔状鉄器が出土していることからもうかがわれる。

又、B-9区西側では、人頭大の石が一部列をなして検出されていることから、このラインが当時の海岸線を示すものではないかと考えられる。

廃棄の年代は、土層の項でも説明を加えたように、第5層は良好な状態ではなく、凡そ7世紀代を推定しており、鯨骨の上に堆積している第3層が800年前後以前という年代観から、奈良時代に属するものとできる。しかし、これ以上の細かな年代は現時点では示すことができない。

（真鍋・安田）

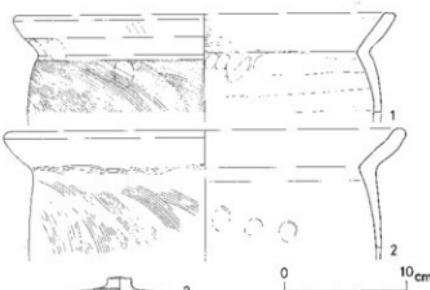
注

○鯨骨については、正式な鑑定をへていないので、本報告の段階で修正を加えることがある。
主として次の文献を参考とした。

藤井直正ほか「東大阪市布市町出土鯨骨調査報告」『東大阪の歴史3』1976

東大阪市遺跡保護調査会

○灰白色凝結物質と炭酸カルシウムは同一物質を意味している。
これについても本報告の段階で正式鑑定を行う予定である。

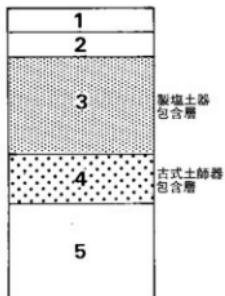


第34図 SM05出土遺物実測図

(3) F～J－8～4区

a 土層 (第35図)

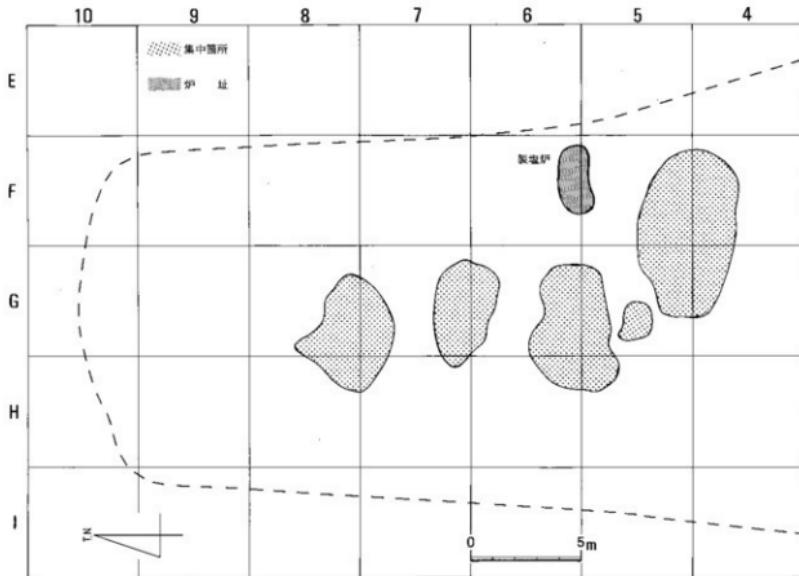
大浦浜の南西端部に位置する本調査区は、出土遺物から古代末以前まで東西に傾斜していた西侧部分である。状況は、1・2層表土、耕作土層に中世、古代末の遺物を多く含み西、南に移る程厚くなる。そして、3層は古墳時代後期の製塩土器が多く検出された。3層を除去した4層上面で量的には少ないと古墳時代前半の土器が出土した。この最下面では、中央部から2つに破れた状態で上層より技法的に古い要素をもつ鉢形土器が確認された。



第35図 G～I－3～8区
土層模式図

b 製塩土器の包含層 (第36図)

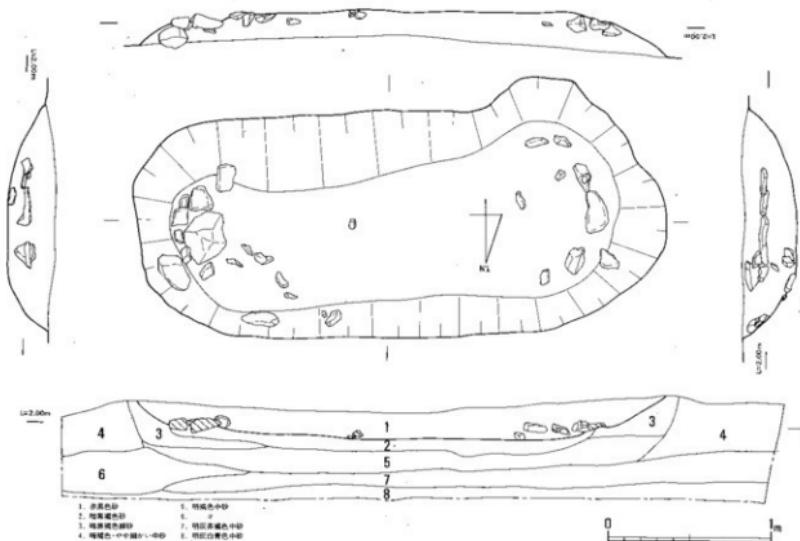
製塩土器の包含層は、G-10区付近から山裾に向かってU字状に広がる。その中に特に、出土量が多い集中する箇所がみられ叩きの同一傾向の存否を今後検討したい。製塩土器の取り上げ方法については、平面的な広がりと上下関係を把握するために $5 \times 5\text{ m}$ 区画の中でさらに、 $1 \times 1\text{ m}$ を25区画設定し約5cmを取り上げの単位とした。多い区画では5回、少ない区画では2～3回で終了した。その結果、コンテナ数約400箱の出土をみた。



第36図 古墳後期製塩土器出土範囲図

c 製塩炉（第37図）

F-5・6区の境界付近で検出された土坑である。この周辺の古墳時代後期の製塩土器包含層を除去した後、赤黒い微粒子の土を検出した。これを除去していくと長軸3.2m・短軸1.5m・深さ20~30cmほどの椭円状の土坑となった。土坑の周囲は5cmほどの高さを持つ堤状に盛り上



第37図 F-5~6 製塩炉

がっている。土坑内の埋土は1層のみで、赤黒く焼けた有機物質が堆積し、土のようになっていた。この土を指で押すと黒い灰のようなものが付いた。埋土の遺物は古墳時代後期の製塩土器の破片が90%以上を占め、他の遺物はほとんどなかった。また土坑の長軸の両端には石が敷かれていた。石の形は平らなものから丸石までと一定ではない。また大きさは拳大から20~30cmほどのものまで様々であるが、赤く変色し、平らな石の表面には灰褐色の膜状付着物が付いていた。

土坑の断面観察によれば、古式土師器の包含層を切り込んで床面をつくり、壁の傾斜部分に石を敷いている。床面はほぼフラットで、黒く粘質性を帯びた細砂が乗っている。この細砂も埋土と同様に指で押すと黒っぽい灰のようなものが付いた。

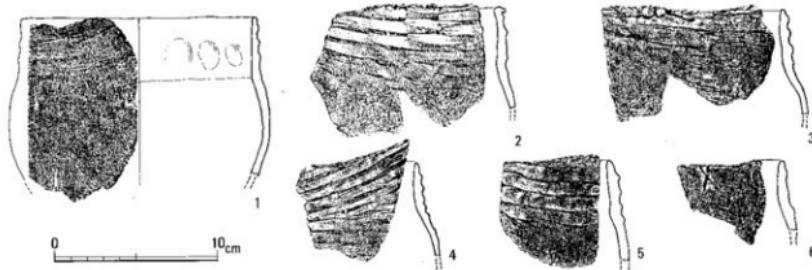
さてこの土坑の時期であるが、古墳時代後期より降る資料は製塩土器については存在せず、土師器も破片ばかりで断定はできないが、埋土の遺物に関しては7世紀には入らないと思われる。したがって、古墳時代後期の遺構と認定できる。

次に土坑の性格を考えてみたい。埋土・床面の状況からみて、灰のような物質が存在する。赤変した石は、花崗岩がほとんどで、センリョク岩・ギョウカイ岩・石英ハン岩が僅かながら

存在する。これらの石は櫛石島から採掘できる種類なので、他島からわざわざ赤くしてから持ち込まれる必要はない。また長時間空気に触れると酸化し赤変する可能性もあるので、石を割って断面を観察すると、幅1cmにわたって赤変している。その結果土坑内の石は火を受けていることが明確になり、一方向もしくは二方向より火を受けて赤く変色していることがわかった。以上のことよりこの土坑は炉跡と推定される。

またこの炉が何の目的で使用されたかであるが、石に灰褐色の膜状付着物が認められ、炉跡周辺から須恵器・土師器などの生活用品がほとんど出土していないこと、そして遺構の西側には古墳時代の包含層が広がっていることを考え合わせると、製塩炉と推定される。

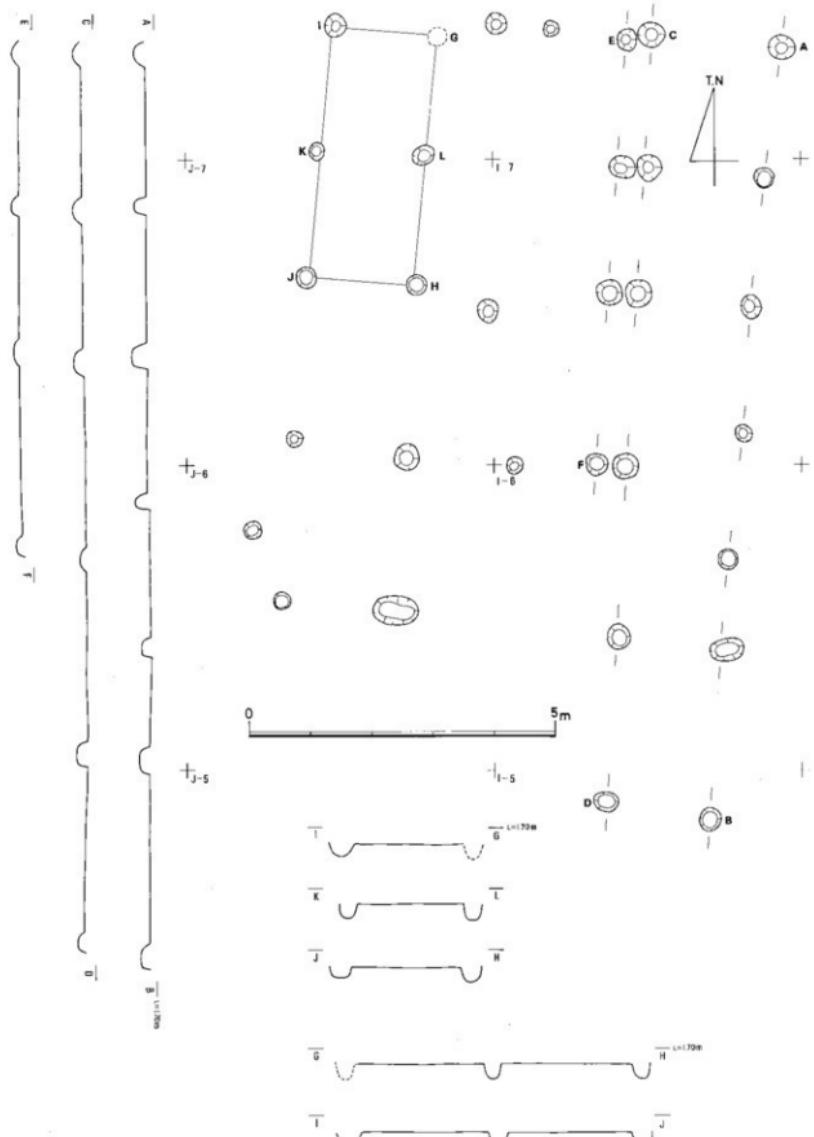
この遺構からの出土製塩土器（第38図1～4）は古墳時代後期の形態を示すものばかりである。タタキ目は平行タタキが90%を占め、他に斜格子をめぐらしたものも数点ある。どの破片も赤やピンク色に変色しており、表面は肌荒れ・剥落がみられ、白い吹きこぼれと思われる付着物もある。胎土は後世の製塩土器に比べて荒い。口径は（1）を基準としてみると、約15cm前後であり器厚は端部5mm前後、湾曲点7～8mmである。



第38図 F-5・6 製塩炉内出土製塩土器実測図

この製塩炉の問題点を述べて今後の課題としたい。

- (1) 各地の調査例で見られる作業面がこの炉周辺では見つからなかった。
- (2) 石敷き炉としては喜兵衛島南東浜などがある。古墳時代後期の丸底製塩土器の構造としては床面に石を敷きつめたタイプがあるが、この炉は床面全体に石を敷きつめていないで長軸の両端のみである。類例としては山口県波羅が浜・岡山県大飛島にあるが、いずれも尖底もしくは変型台脚を伴う時期とされている。この時期の主流の炉が喜兵衛島のタイプか、あるいは地域により画一化はなかったとするかについては、他の報告を待ちたい。
- (3) この炉が焼き塩用の炉か、煎熬用の炉かについては不明である。
- (4) この炉に何個ぐらいの土器を入れて操作したかという問題は、炉を一回操作させて得た塩の量と、背後の包含層の製塩土器との量的関係と絡めて考える必要があろう。また大浦浜で何年ほど製塩活動を行なっていたかを分析する1つの指標となり得るだろう。



第39図 H～J—5～8区柱穴群実測図

d 柱穴群（第39図）

遺構については、製塩土器除去後の面より検出された柱穴群がある。埋土中の遺物と土層時期に差異があることから、上層からの掘り込みと判明した。黒色の包含層中に埋土が黒色であるため検出は不可能に近い状態であった。全体の状況は、一部分を除いて径約40cm前後・柱間約2mと2.8mを計る。出土状態から理解されることは、東側の南北3列が直線上に並びその内2列は近接している。また、相対的に南と北では柱間が異なる。この状況から、規模と向きが異なる建物か、東側に壠列的な施設をもつものが考えられる。しかし、掘り方の径に差がみられないことから欠けている柱穴を補えば全域建物跡と思われる。ここでは唯一想定される北西隅の1×2間を図示する。

（町川・安田）

注

- (1) 集中箇所と言ふ表現をしているが、製塩土器の出土状態を含め製塩過程の一つの動きとして他に適確な表現を考えている。

(参考文献)

- 近藤義郎 「謎の節業式」歴史評論72（1956）
- 近藤義郎 「節業式遺跡における塩生産の立証」歴史学研究223（1958）
- 近藤義郎 「製塩」日本の考古学V（1968）
- 近藤義郎 「土器製塩の話」(1)(2)(3)(4) 考古学研究103・104・105・106号（1979～1980）
- 近藤義郎 「日本塩業大系 史料編 考古」日本専売公社（1978）
- 広瀬和雄 「小島東遺跡」「印町遺跡群発掘調査概要」大阪府教育委員会（1978）
- 大森宏・森川昌和「岡津製塩遺跡」小浜市教育委員会（1980）
- (注) 本稿作成にあたっては、香川県自然科学館地学担当古市光信・上原直行両氏の御教示に負うところが大きい。記して謝意を表したい。



第40図 柱穴群撮影前撒水風景

(4) G～J-11～14区

a 土層 (第41図)

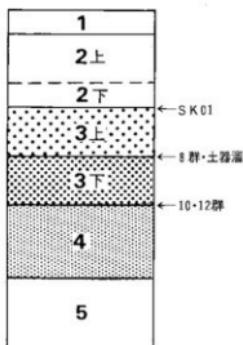
G～J-11～14区は、大浦浜の南西部に位置し、西側にはタテワ丘陵がある。

この地区の基本的な土層はG・H列とI・J列で異なる。

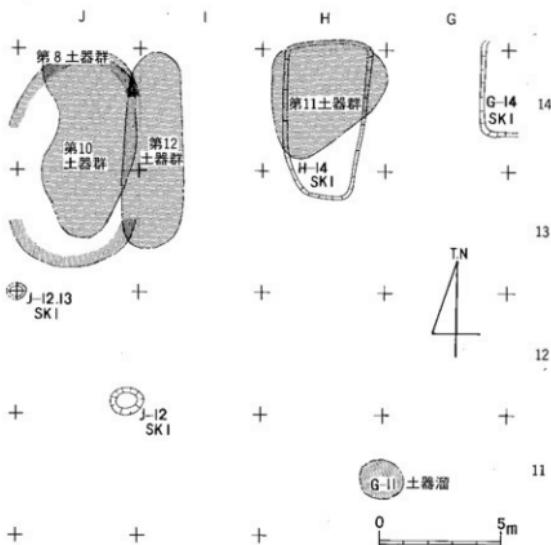
I・J列では、第1層表土層・第2層上層耕作土層・第2層下層古墳時代後期の包含層・第3層上層・下層古式土師器の包含層・第4層弥生時代の包含層・第5層無遺物層である。この土層はH・I列の境付近から西側に傾斜して形成されており、G・H列では第3層古式土師器の包含層・第4層無遺物層となる。

第42図に示した主要遺構は、それぞれH-14SK1が第3層上面、第11土器群・G-11土器溜が第4層上面での検出、第8土器群は第3層下層上面、第10土器群は第4層上面、第12土器群は第4層上面での検出である。

土層及び遺物の出土状況から見た地形は、G・H列が安定した砂洲であり、西側のタテワ丘陵との間が自然の溝になっており、第2層下層の堆積でほぼ平坦な現在の地形に近くなってくることがわかった。先のB～F-4～8区の土層でも述べたが、長崎通丘陵とタテワ丘陵によって形成された谷筋から、一方は東方向 (4列付近)



第41図 G～J-9～14区
土層模式図

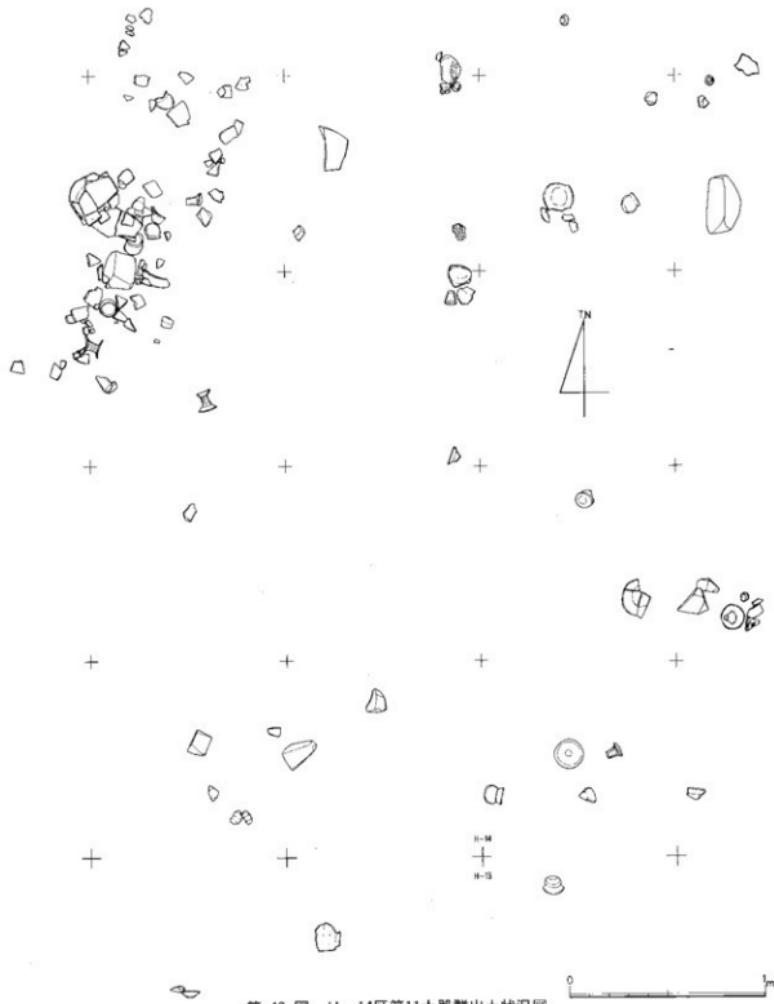


第42図 G～J-11～14区遺構配図略図

へ、もう一方は北方向（K・L列付近）とに分流していたことが推定できた。

b 第11土器群（第43図）

第11土器群は、H-14区を中心として、一部を除いて散在的な状況で検出された。これは、第11土器群の上部にSK1（古墳時代後期の製塙土器を多量に包含した土坑一遺物は昨年度



第43図 H-14区第11土器群出土状況図

概報で報告)があり、全体的に重複していたため、土坑形成時に土器群の一部が破壊されたと考えられる。なお第11土器群は、第44図に示す一群が比較的集中して出土しており、残りのグループとの間に時間差があると考えられた。これは、層位的な分離ではなく、遺物出土レベルの差と土器の様相の違いによって判断している。

又、昨年度報告した第1～第10土器群にも見られたように、第11土器群にも製塙土器の伴出が認められ、土器群の性格を考えるうえで、重要なポイントであると考えている。

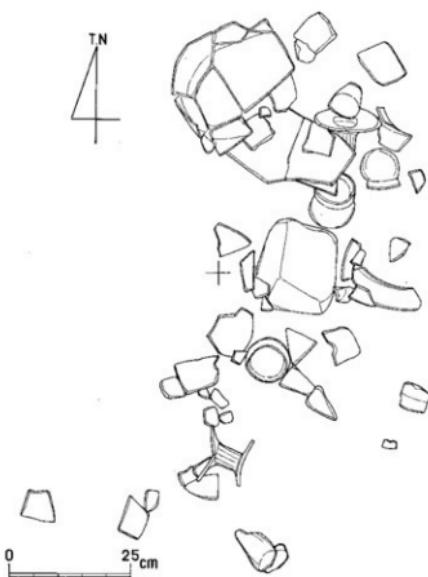
第11土器群中の土器は、先述したように二つのグループの集合と考えている。ただ完全な分離には成功しておらず、帰属不明のものもある。一応分離可能なものについて(古)・(新)として説明する。第11土器群(古)の土器には、壺B₃①・小形丸底壺B₁₀・同C₁₂⑫がある。壺②は肩の張りが顕著であり、この段階もしくは先行する可能性もある。高杯⑩は帰属不明で、類例を見ない。別の器種を想定すべきかもしれない。残りは第11土器群(新)と考えている。

製塙土器は、第148図1～3の倒壠形脚台のものと、第45図22～24の薄手コップ状を呈するものとが出土しており、それぞれ(古)・(新)に対応するものと考えられる。

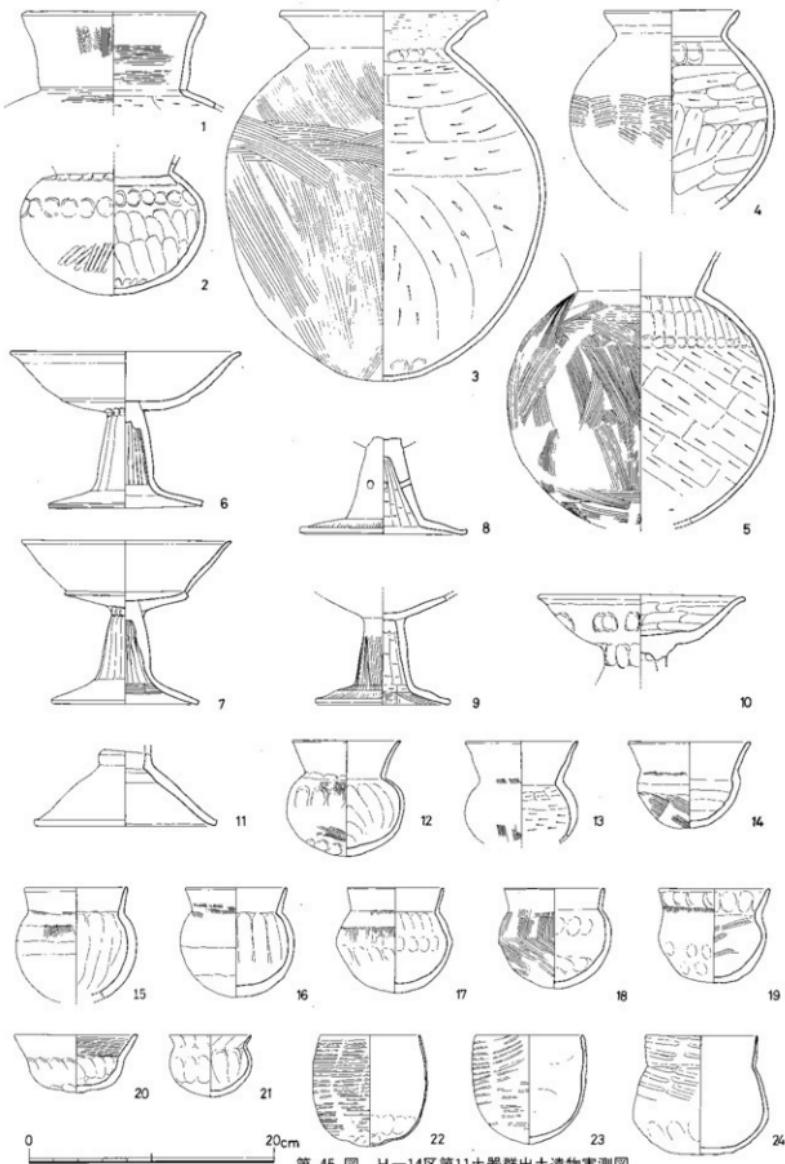
c G-11区土器窓(第46図)

土器窓は、土坑を確認することができなかったものの、一定範囲内に集中して検出されたので、一括して廃棄されたと考えている。範囲は長径2.10m、短径1.20mを計り、ほとんどの土器が破片化していたものの、ある程度原形を推定しうる状況であった。なお、復原・図化することはできなかったが、細片化した薄手コップ状製塙土器の破片を多数得ている。このことから、この土器窓の性格は他の土器群と基本的には変わらないと考えられる。これについては、今後他地域での類例をまって検討していきたい。

土器窓の土器については、先述したような状況から、一括遺物と考えている。壺B₁①・B₂②・E③、甕A④・甕D⑤・高杯A⑥⑦・高杯B⑧・高杯C⑨・小型丸底壺C₁₀・D⑪⑫が出土している。壺・甕類は体部が球形を呈し、口縁部が「く」の字に外反するのが一つの特徴であり、口縁端部内面が肥厚するものは見られない。又、②・⑤に見られる外面の叩き目、①・②・④・⑤に見られるヘラ削りもほとんど前段階からの変化は見られない。



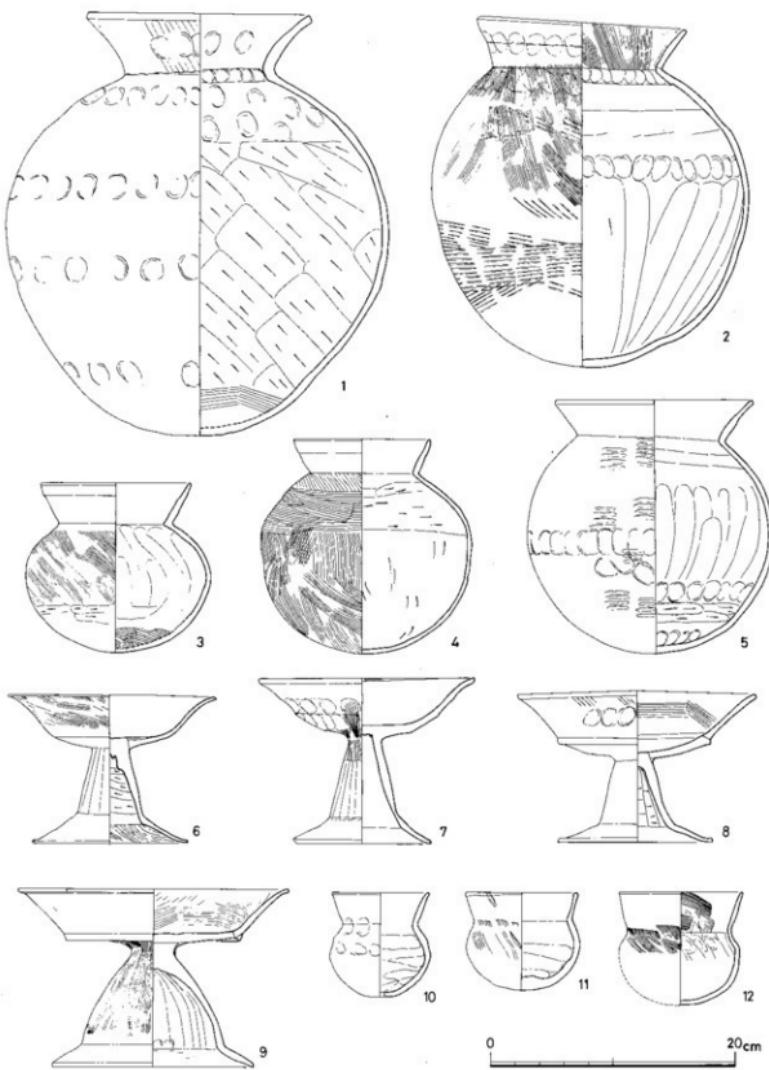
第44図 H-14区第11土器群部分図



第45図 H-14区第11土器群出土遺物実測図



第 46 図 G-11区土器溜出土状況図



第47図 G-11区土器溜出土遺物実測図

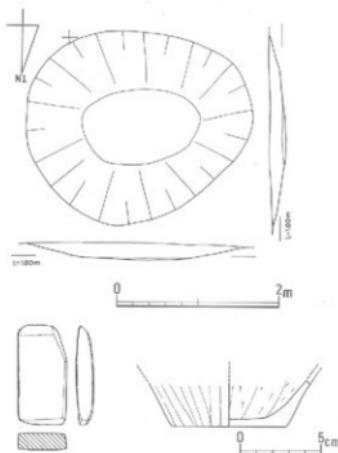
d J-11区SK1 (第48図)

第5層上面で検出した土坑である。長径1.4m, 短径1.2m, 深さ0.3mを計り楕円形を呈する。土坑内の埋土は一層で、黒灰色のやや粘質の砂である。埋土中から土器片十数片と扁平片刃石斧が一点出土している。

十数片の土器は、体部の破片がほとんどで、底部片が一片検出されたにとどまる。底部片は、完全な平底で、体部外面にはヘラミガキ、内面にはヘラ削りが施されている。体部は底部から外反する状態で開く。扁平片刃石斧は、幅3.0cm, 長6.45cm, 厚1.05cmを計り、材質は不明である。刃部の一部は欠損したあとで再び研磨している。

年代は、土器の特徴と扁平片刃石斧の出土からして、弥生時代中期後半前後と考えている。

(真鍋)



第48図 J-11区SK1平面図及び
出土遺物実測図



第49図 H-14区第11土器群出土状況近景

(5) C～F-9～14区

この地区は浜の南東部の一画で平均標高2mの砂地である。ここでは中世の粘土遺構が多数検出されたり、前期弥生土器を層別に取り上げることができた地区である。

a 土 層 (第50図)

この地区的地表は西のF列ではやや高く標高2.4m、東の海岸線に最も近いB区で標高1.9mで海側に傾斜している。

第1層は厚さ5cmで耕作土の一部であるが、遺物表採の意味をかねて任意に設けた層である。第2層は耕作土の残りの部分で、第1・2層とも弥生～現代までの遺物を包含している。

第3層はE・F区とC・D区とでは大きく異なっている。E・F区の第3層は黒茶色砂層で約20cmの厚さをもつ。弥生～中世の遺物を包含する攢乱土である。一方C・D区の第3層は黒色有機質砂質土で、厚さは10～25cmある。奈良～平安時代の製塙土器を主体にした包含層であるが、この層を切り込んで中世の粘土遺構群がつくられていたため、攢乱をうけている場所も多い。この層はC列を中心に東西幅約10m程度で南北に広がっている。

C・D区の8区以南では第3層の下に炭酸カルシウムの固化した第4層が広がっていたが、この地区ではこの層に該当するものではなく、第3層の下にはすぐ第5層が続く。第5層は黄かっ色砂層で、7世紀代の製塙土器が多く含まれている。色調から第3層と第5層に明確に区分できる。この層も第3層と同様にC列を中心に東西幅約10mで南北に広がっており、E・F区には及んでいない。

E・F区の第3層の下の層は淡茶色砂層で40cmの厚さがあり、量は少ないが、弥生～古式土師器が含まれている。この下はちゃ灰色砂層で地山となる。

C・D区の第6層は白黄色の砂層で、厚さは40cmある。E列から東に斜方向に堆積しており、無遺物である。

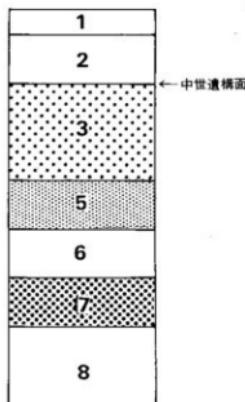
第7層は弥生前期の単純包含層である。場所により、3層に区分できた。上層は淡黄ちゃ色、中層は暗黄ちゃ色、下層はちゃかっ色で部分的に赤かっ色の硬質の砂を含んでいる。この第7層はD区以東で層として確認できたが、E・F区では把握できなかった。第8層は粗砂の地山となる。

b 中世遺構

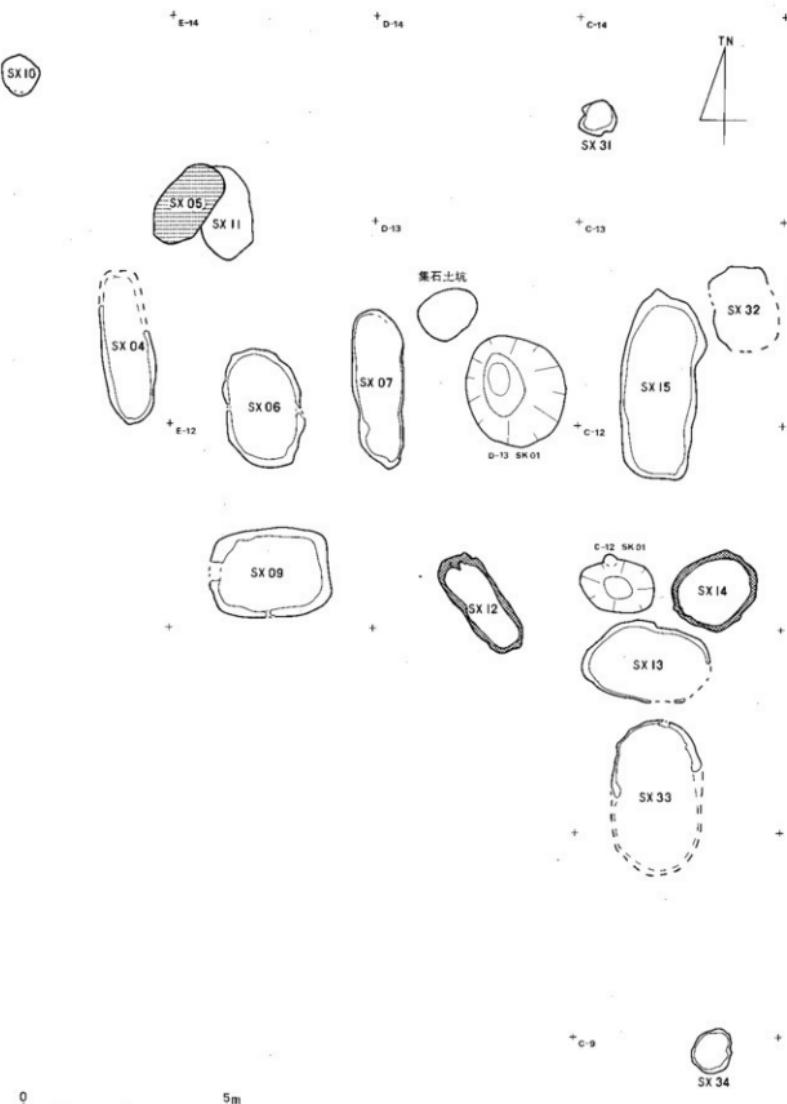
この地区で検出された遺構は、古墳時代の土坑、奈良～平安時代の土坑、ピット、中世の粘土遺構、土坑、ピットなどである。ここでは中世の遺構の一部を報告することにする。

まず中世の遺構の広がりであるが、この地区的北側は、砂取りで破壊されていたため状況は不明である。西・南側では、ピットや柱穴が検出されたが、土坑や粘土遺構は検出されていない。つまり、北側は不明であるが、この地区に大きな遺構は集中していたことになる。

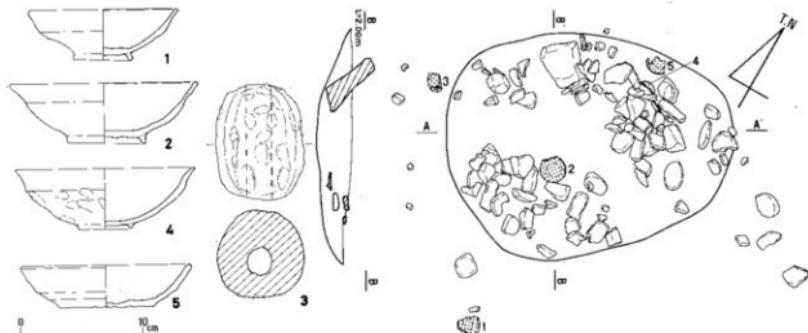
粘土を使わない土坑は3つ検出された。第52図はD-13区の集石土坑である。長軸1.4m、短



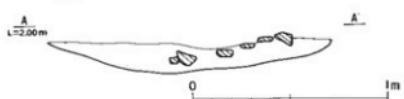
第 50 図 土層模式図



第 51 図 遺構配置図



第 53 図 集石土坑出土遺物実測図



第 52 図 集石土坑実測図

軸1.1mの梢円の範囲に石が約100個集まっていた。人頭大の花崗岩が数個あるが、ほとんどは拳大の砂岩質の川原石である。石はほとんど赤変している。石の下は黒色砂質土で、この土を除去すると深さ15cmの浅い土坑になった。石に混った状態で、ほぼ完形の土師質碗2点、瓦器碗・土錐が出土した。

第53図の1は土師質碗でほぼ完形である。灰黄色を呈し、外面に粘土紐のつぎ目を残す。高台は断面矩形の貼り付け高台で、高さは5mmある。2も土師質碗でほぼ完形である。1より大きく口径15cmを計る。断面矩形の貼り付け高台で高さは5mmである。3は大形の管状土錐で、中心に径2cmの孔が通る。表面は指頭痕がたくさん残っている。重量は500gである。4は瓦器碗で半分ほど残っていた。外面に暗文は認められず、体部下半に指頭痕が明瞭に残る。内面は肌荒れがひどく暗文は観察できない。断面三角形の高台が貼りつけられている。5は土師質壺で1/4ぐらいの破片であった。復原口径13.8cmで、白黄色を呈し底部はへら切りである。

粘土構造は15基検出された。それぞれの計測値・粘土色調・出土遺物等は一覧表にまとめておく。形・大きさ・粘土色調・底構造はそれぞれ違いを示しているが、出土遺物は皆ほぼ似かよっており、各基から特徴を見い出すことはできない。15基中13基は標高2m前後のほぼ同一平面上に築かれているが、S X32とS X34は約20cm低い位置に築かれている。

S X04は底の構造に特徴がある。厚さ20cmの黄色粘土の下に、厚さ約10cmのこげちゃ色砂層がある。この層は古墳後期の製塙土器を多く含み、人為的な層で、底は二重にしている。

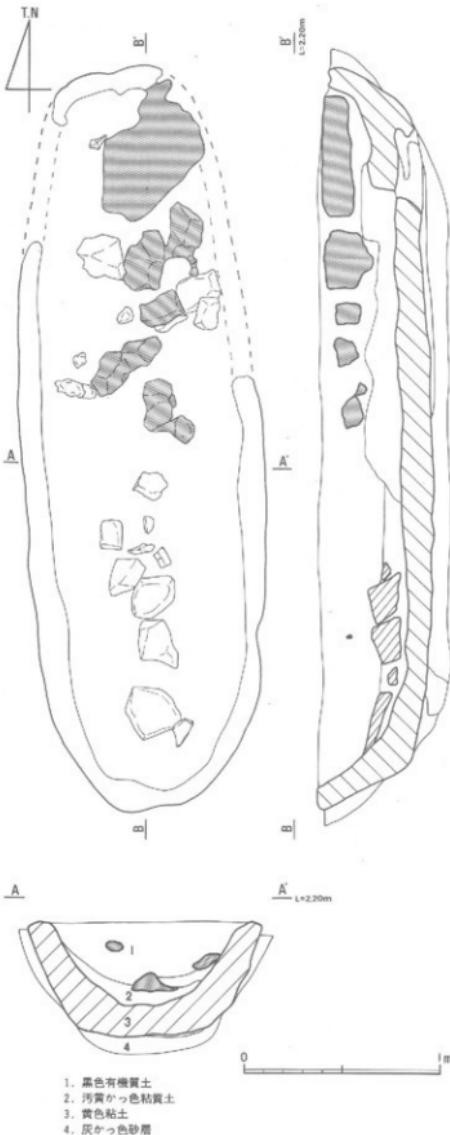
次の特徴は埋土の状況である。北半分には汚黄かっ色質土が堆積しており、これは使用されている粘土とよく似ており、砂や土器細片を含んでいる。壁粘土が流れ、砂や土器細片と混り堆積したと推定される。この土は南半分ではなく、灰黒色砂質土が堆積している。この砂質土がある程度堆積した後、人頭大の花崗岩が入っている。この堆積の違いから、中央付近に仕切りがあったのではないかと推察される。

S X05は灰青色の粘土を使用しており、この色の粘土はS X34の底の一部に使用されていた

以外、他のものにはみられない。深さは15cmと浅い皿状の土坑である。底に接して、人頭大から拳大の石が10個ほどあった。人頭大の割石はすべて花崗岩である。この土坑は次に述べるSX11の放棄後築かれている。

SX11は元来深さ20cmの土坑である。約50個の石が出土した。花崗岩と川原石の比率はほぼ半数づつである。これらの石は底に接したものではなく、汚おうど色土がある程度堆積した後石が入ったと推定される。汚おうど色土は黄色粘土と砂が混合したようで、遺物は古墳後期製塩土器、奈良～平安時代の須恵器・土錘などが出土した。50個の石は土坑を埋めるため投げこまれたと思われるが、南に集中しており、これはSX04と共通する現象で、注意を払う必要があるかもしれない。暗ちやかっ色土が土坑全体をおおって約10cmの厚さに堆積していた。SX05・11は長軸方向が東西に約30°ふれてい。

SX06は04と同様に底が二重になっているのが特徴である。側壁の粘土の厚さは10cmであるが、底は5cmしかなく、粘土層の下に、古墳後期の製塩土器が多く含む、厚さ20cmの灰黒色土があり、意図的に製塩土器を入れ底を二重構造にしたのである。ここで興味深い点は、SX06の北東端にあるSK1の存在である。径70cmの範囲に古墳後期の製塩土器片が密集していた。発掘当初、古墳時代の土器廃棄坑と考えたが、このような廃棄方法は、浜を全面発掘したにもかかわらず、G-18区SK01しか検出できなかった。G-18区SK01には完形の須恵器壺身・蓋、高壺がセットになり、製塩土器は破片も多かったが完形品も數点含まれていた。SX06北東端のSK1は破片ばかり

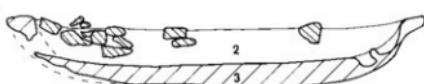
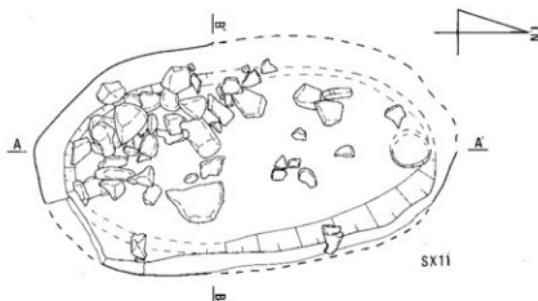
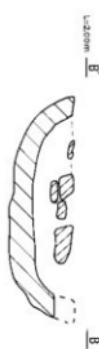


第54図 SX04実測図

1. 黒色(少し緑味を帯びる)粘土

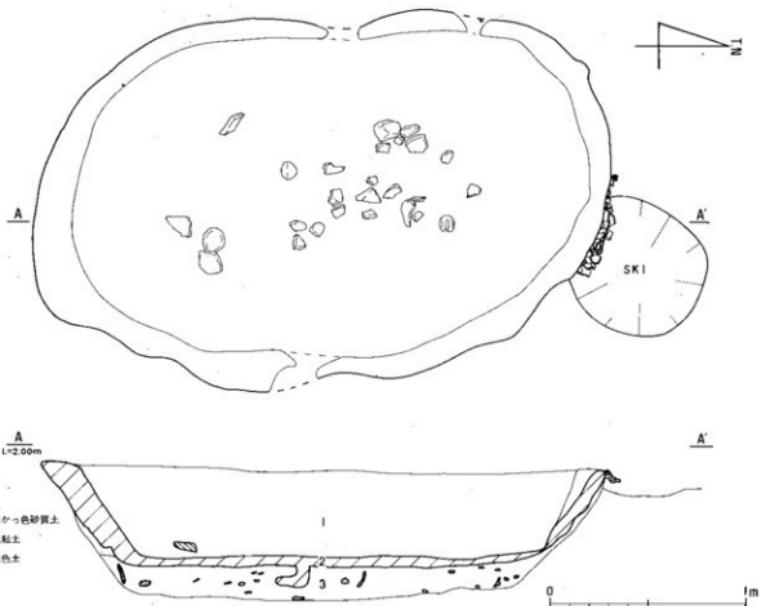


0 1m

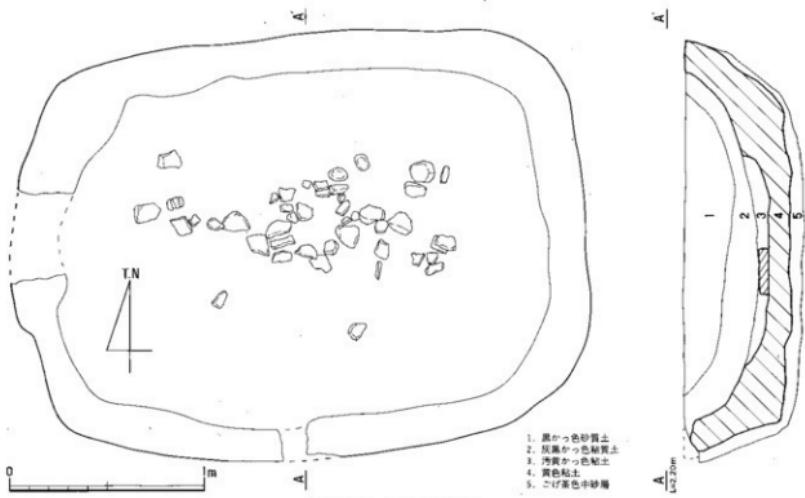


2. 汚黄土色土層
3. 黄色粘土

第 55 図 SX05, 11実測図



第 56 図 S X 06 実測図



第 57 図 S X 09 実測図

りで規模も小さく、製塩土器以外のものは含まれていない。S X06の底構造を確認したため、この底下部をつくるために集められた土器の残りと解釈するのが妥当であろう。

このように推察すると、この程度の土器のかたまりがあっても S X06の機能には影響を及ぼさなかったものと推測される。

また、製塩遺跡は多くの場合複合遺跡となっているが、一時期の遺物が一ヶ所に集中していた場合、その土器の時期の廃棄方法だと早断してはならず、周囲の状況を考慮すべきだという教訓にもなる。

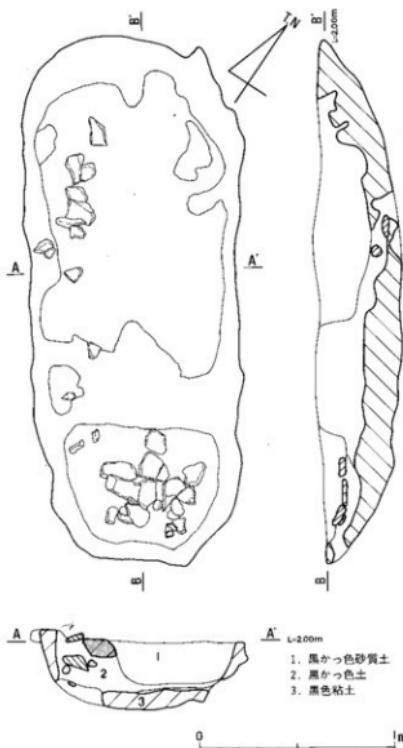
S X09は S X06と同じ形態を示すが、底は厚さ20cmの粘土のみの、単一構造である。埋土の遺物は細片が多く量も多い。周辺の遺物が少しづつ入りながら徐々に埋没したものと思われる。S X06にも同じ状況が観察された。

S X12は、長軸方向が他の土器の主軸方向から30°ほど振れているのが特徴である。形は細長い橢円形であるが S X04・07ほど深くはなく25cmと浅い。粘土は20~25cmと最も厚くしているが一定の厚みを保っている部分は少なく凸凹している。断面を観察すると、卵

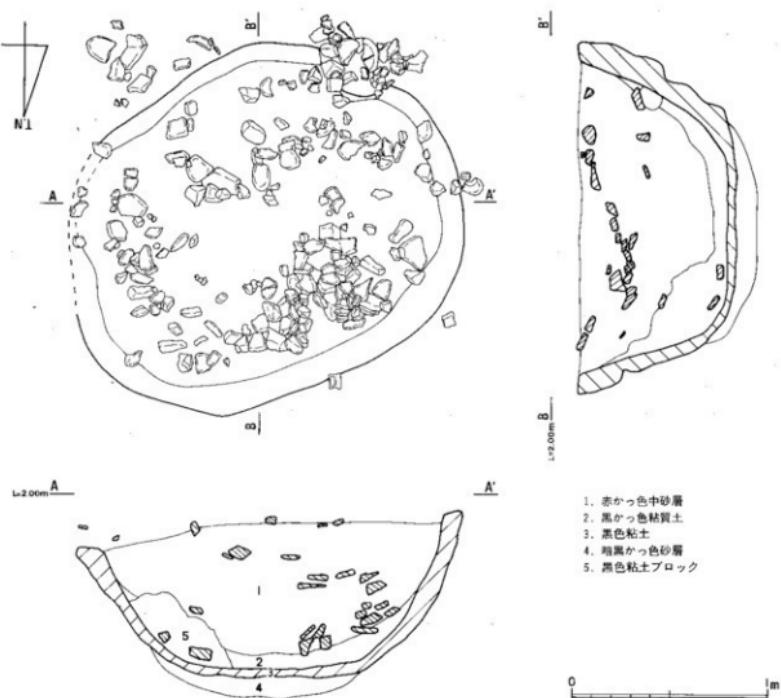
大の小塊が集まつたようになっており、乾燥するとさらにブロックが目立つ。後述するように火を受けたためこのように変化したと思われる。南隅に赤変した石が10数個密集していた。

S X14は特徴がいくつかある。まず深さ15基中最も深く75cmある。次に赤変した石が多量に出土したことである。約250個の石が出土したが、半数は土坑上面に密集しており、残り半分は土坑中で特定の位置や深さに集中することなく埋土中にまんべんなく散っていた。石の内訳は、川原石が約110個、花崗岩が約110個、残りは緑泥変岩、安山岩その他である。石の数が多いという点は S X13も同様で約200個出土した。やはり土坑上面に半数近くが密集し、残りは埋土下層にまんべんなく包含されていた。川原石と花崗岩の比率は同じである。S X13の深さは70cmあり、深いものには石が多いという関連性が認められる。

S X14の埋土は黒色有機質土であるが、これを除去すると、壁面にそって黒かっ色粘質土が堆積していた。この粘質土は側壁付近では固まり、ブロック状になっていた。底は厚さ5cmの粘土の下に10cmの厚さの黒かっ色砂層があった。この層中には土器片が含まれていた。土器片



第58図 S X12実測図

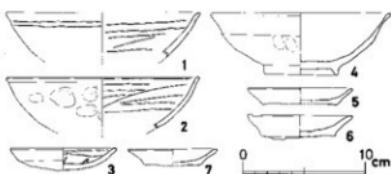


第59図 S X 14実測図

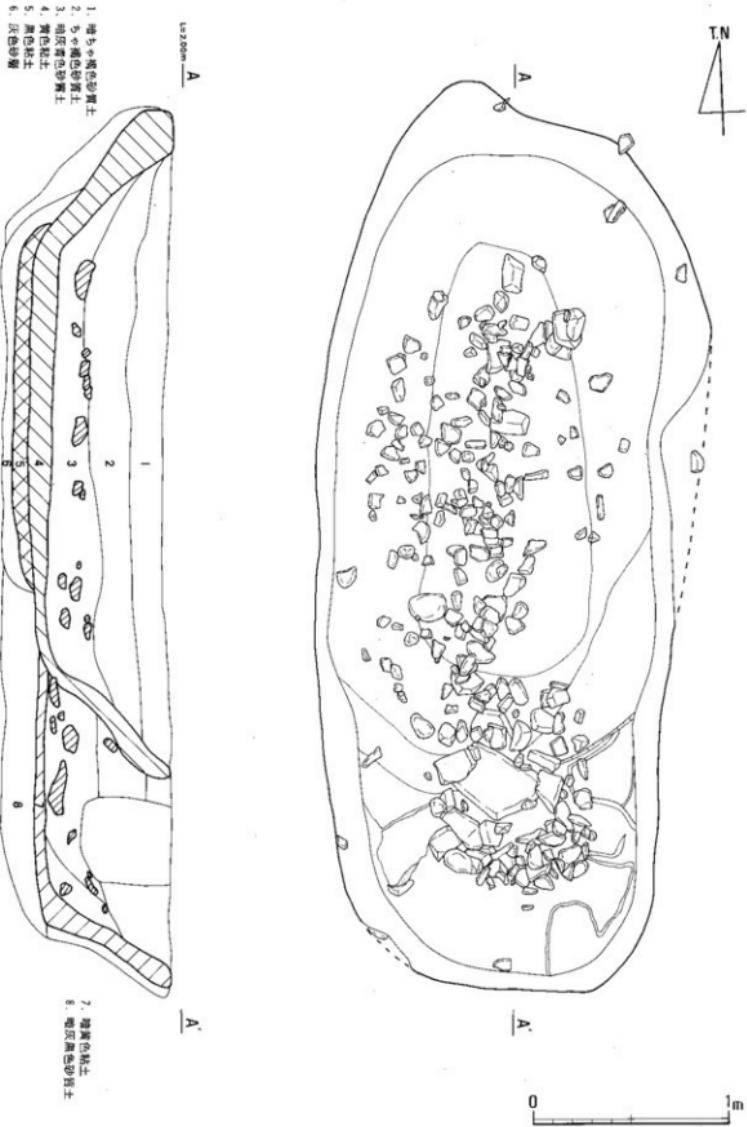
の大きさ、量はS X 04・06におとるが、同様の構造のものである。遺物は比較的破片の大きいものが出土したため、7点図化した。

第60図の1・2は瓦器焼で底部を欠損している破片である。口縁端部は丸くおさまり、内面には荒い暗文がある。1は外面にも2本暗文があるが、2にはなく指頭痕が残る。3は瓦器の小皿で、内面に数本の暗文がある。外面体部下半に指頭痕が残る。4は土師質椀で、口縁は少し外反しながら端部は丸くおさまる。高台は三角形貼り付けで高さは7mmあ

る。内外面とも風化がひどく調整は観察できない。5～7は土師質小皿で、口縁は外反ぎみに開く。7の底部はヘラ切りの後、板目である。これらの他白磁（大宰府編年IV・VII類）の破片



第60図 S X 14出土遺物実測図



第 61 図 S X15実測図

なども出土している。

S X15は平面プランが他のものと著しく違っている。長軸455cmの大きな楕円形の土坑であるが、南3分の1のところにもう1つ粘土壁がめぐり、この壁で土坑が2つに仕切られているようみえる。縦断面から壁粘土の切り合い関係をみてみると、南の土坑を破壊して北側に新たに長軸343cmの土坑を築いているようみえるが、北側に掘り方はあるが南ではなく、南土坑の底粘土下の砂層が新しい土坑の下まで広がっており、不自然さが残る。新旧の切り合いでなく、北を広く、南を狭く築き分けたと考えておきたい。南の土坑は暗黄色の粘土を使っており、底粘土下には厚さ15cmの暗灰色砂層があり、奈良時代の製塙土器が少し含まれていた。埋土は上下に区分でき、いずれも土で上層は灰色を呈し、きわめて硬くなっていた。上層から石は散在した状況で約50個出土した。大半が川原石である。下層からは75個の石が出土した。川原石は30個で、残りは花崗岩である。一方北の土坑は明るい黄色粘土が使われており、底は黄色粘土の下に黒色粘土を張り、さらにその下は灰色砂層があった。埋土は3層に区分でき、いずれも砂質土である。上・中2層から約100個の石が出土した。花崗岩と川原石の比率は半々であった。下層からも50個の石が出土したが、比率は同じく半々であった。

S X04は楕円形を呈し南と北と埋土状況が違う、S X33は南側上半が破壊されていた。偶然の一一致とも考えられるが、南北の違いは注意を要するだろう。

さて以上、図化した8基の遺構を中心に、その構造、石のあり方、埋土の状況などで特徴的な点について述べてきたが、次にこの遺構の性格について考えてみたい。

まず、形、大きさ、深さから6類に区分した。

類	特徴	遺構
A	径1m前後で小さいもの、深さ10~25cm	10, 31, 34
B	幅の狭い楕円形、深さ40cm前後	04, 07
C	隅丸方形に近い、深さ40cm前後	06, 09
D	幅の広い楕円形、深さ60cm前後	15, 33
E	整円に近い楕円形、深さ70~75cm	13, 14
F	楕円形、深さ0~25cm	05, 11, 12, 32

F類は大きさや深さがまちまちなので一括せず個別に扱った方がよいかもしれないが、後述するように炉の可能性がそれもあるためまとめておいた。

各類はそれぞれ違った機能があったと思われるが、位置関係をみてみよう。

A類は外周に位置している。B類とC類は近接して北東部に位置している。D類とE類は東側に南北に並んでいる。E類の南北にD類が位置している。F類に位置関係での特徴は見出しえないが、F類のS X05・11はB・C類に近く、S X12・32はD・E類に近い位置にある。位置関係からみると、B・C類とD・E類との2つにグループ分けることができるようだ。海に近いのはD・E類で、現在の満潮時の汀線まで10mである。

さて次に、前述した底の構造、石のあり方、粘土の色調などの条件を加味して、2グループ内での組み合せを考えてみよう。

B・C類のグループで底が二重構造になっているものは、S X04とS X06である。残りのS X07とS X09は単一構造である。S X04とS X06、S X07とS X09がそれぞれセットになる可能性がある。次にD・E類グループでは、S X15とS X13が黄色粘土、S X14とS X33は黒色

第2表 粘土遺構一覧表

番号	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	色	粘土量 %	底厚 cm	底質 高さ cm	出土遺物	標高 m
04	380	120	40	黄	12	16	2重	製塙土器(古、奈)須恵器、土師質土器、瓦器、土鍋、骨	2.1
05	215	120	15	灰青	7	7		製塙土器(組少々)	2.1
06	290	175	43	黄	10	5	2重	製塙土器(古、奈)須恵器、土師器、土師質碗・土鍋、土器、輸入磁器、石器	2.1
07	360	(125)	37	■	7~10	5		製塙土器(古、奈)土師質碗、瓦器、須恵器(甕形)、土師器、土鍋、焼壺	2.0
09	288	215	37	■	20	16		製塙土器(古、奈)須恵器(甕)、土師器、瓦器、貝、土師質土鍋・碗、輸入磁器(甕)、土鍋、焼壺	2.1
10	80		13	■		7~10		製塙土器(古)	2.0
11	215	105	20	■	12	10		製塙土器(古、奈)須恵器、土師器、土鍤	2.0
12	270	105	25	黒	7	20		製塙土器(古)須恵器、土師質碗、瓦器、土鍋、焼壺、貝、円筒状土製品	2.1
13	315	195	70	青	6	7		製塙土器(古)須恵器、土師器、焼壺、土鍤、貝、土師質土鍋・碗、輸入磁器、鉢形、珠多、瓦器、獸骨鏡	2.0
14	215	170	75	黒	14	5	2重	製塙土器(古)須恵器(甕形)、土師器、黑色土器、瓦器、土師質土鍋・碗、輸入磁器(甕)、綠釉陶器、土鍋、焼壺	1.9
15	(455) 343	180	58	黄、褐	10~20	20	3重	製塙土器(古)須恵器、土師質土器。土鍤、焼壺、瓦器	1.9
31	86	84	20	■	4		粘土なし	製塙土器(奈)、土師質碗	1.9
32	120	110	平坦	黒		10~15		製塙土器(奈)、土師質碗	1.7
33	(380) 270	220	65	黑褐	10	15~20	3重	製塙土器(奈)須恵器、土師質碗・土鍋、瓦器、輸入磁器、土鍋	1.9
34	110	100	25	黄(灰青)		7~10		製塙土器(奈、少々) 烧壺、貝	1.7

粘土が使われているため、それぞれがセットになるかとも考えられるが、S X15では黄色粘土の下に一部黒色粘土が使われており、逆にS X33では黒色粘土の上に黄色粘土が貼られており、表面にみえている色だけでセットを決めるのは無理かもしれない。そのため、現段階ではB・C類グループとD・E類グループに分け、B・C類グループ内ではS X04とS X06、S X07とS X09のセットが考えられるという点にとどめておきたい。

さて次に視点を変え、粘土の質についてみてみよう。香川大学教育学部坂東裕司教授に粘土の分析を依頼した。試料はS X09・12・13・14の側壁上部の粘土塊である。分析方法と結果は別載の報告文とのおりであるが、結果だけをここで引用させていただくと、粘土成分はほぼ同じ真砂土で、S X12・13・14は熱による風化が認められるが、S X09は熱風化は認められないというものである。

熱風化が認められたS X12・13・14の共通項は、土坑上部に赤変した石が存在するという点である。つまり火を焚く際石がある役割を果たしていたことになる。粘土中の鉱物は溶変していなかったので、熱は数百度にとどまっていたのであろう。土坑上部に石があったものは、F類のS X05・11・32である。S X32周辺が黒く汚れていた以外火を焚いたと推定される痕跡は残っていないかった。S X05はS X12を小型化した形状で、S X11は赤変した石が多く、南側に集中していることはS X12に類似している。F類すべてを炉とするには無理があるため、ここでは可能性を指摘するにとどめておく。

さて、以上の推察と次のような点から、これらの遺構は製塙に使われたものと考えてよからう。

①海岸部に位置している。

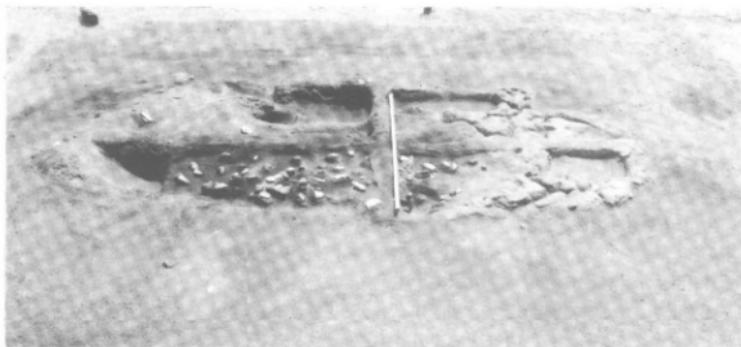
②火を使用している。

- ③平安時代まで製塩が行なわれていたところである。
 - ④江戸時代、大浦浜を塩田にするようにという内容の古文書が残っている。
 - ⑤江戸元禄年間にはすでに完成した形をもっていた煎熬用石釜に類似した点が多い。
 - ⑥中世の文献史料で「土舟」と表現されるものをこれにあてはめても不自然さがない。
- 次にこれらの遺構の年代であるが、S X14の出土遺物や輸入磁器からみて12世紀末～13世紀初め頃とみてよかろう。それぞれの遺構に大きな時間差は見出しえないが、同時使用を厳密に考えなければ製塩工程の復原は無意味になるため、今後より詳細に検討を進めたい。

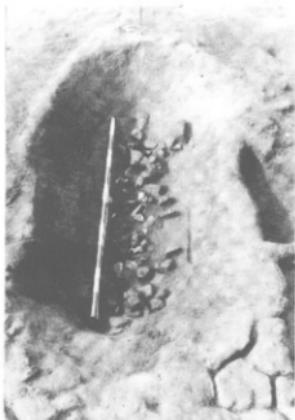
(大山)

注

- (1) 広山亮道「煎熬石釜」『日本塩業の研究』第14集



第62図 S X05検出状況



第63図 底石検出状況



第64図 精査風景

(6) D～R-27～40区

本調査区は、大浦浜遺跡の中央部にある。南端は昭和55年度調査区、北端は、現代用水路に隣接し、西端は、海岸線から約100m離れている。標高2mの等高線が東部で東南端を基部とする、舌状ラインを描く。古墳時代に形成された砂州状地形の痕跡であろう。最高標高値2.20m、最低標高値を示す西端でも1.8mであるから、本調査区は、全般的に平坦地であるといえる。調査前の土地利用であるが一部荒地以外は畑地であった。

昨年度の調査、予備調査の結果を踏まえ区画設定を行った。即ち、D～L-27～40区では、遺構検出を主眼に調査区を設定、全面掘りを行い、西部の低湿部では、地形形成の復原を主目的として30列、34列に2本のトレンチを設定した。調査は層序掘りを基本とし本調査区南端から北進する作業工程を計画、実施した。

a 土層と遺物出土状況（第65図）

D～R-27区～40区調査区の旧地形・土層については、E～Q-30区の北壁土層断面図（第66図）で、東西63mの調査区の土層序について説明する。現地形はE・F区標高2.1m前後の微高地で、東西に緩く傾斜し、西側のL・M区が最も低地の1.6m前後で、N・Q区は1.8m前後でほぼ平坦な地形である。

第1層は10cm前後の厚さの層である。

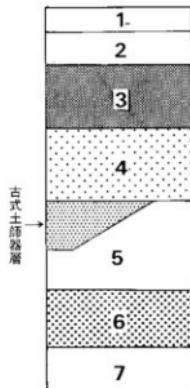
第2層は10～20cmの厚さで、第1・2層とも現代の耕作土で、古墳時代から現代の遺物を包含している。G～J区は第3層の影響を大きく受けしており、磨滅した遺物が多い。K～Q区では極端に遺物量が少なくなっている。E・F区では第2層を除去すると、淡黄灰色砂層で、縄文時代後期以後に堆積したと考えられる1.3m前後の無遺物層の砂州を形成している。この面に古墳時代の遺構（SK04、SK05など）があり、当時の生活面であった。その砂州は標高約2.0mの等高線と同じ北方向へ舌状に伸びる。東側は海へ、西側はG区中央よりH区に向って傾斜している。この斜面上に第3層・4層・古式土師器層が形成されている。

第3層はG～J区中央までの幅18m、厚さ20～30cmの黒褐色中砂層で、古墳時代後期の製塙土器包含層で多量に出土したが、すべて小破片で磨滅した遺物が多く、中世の土師器、瓦器、輸入陶磁器などの破片も出土し、古墳時代後期の生活面と中世の生活面との複合した生活面と考えられる。K～Q区までは灰色砂層であり、古墳時代後期の製塙土器は極端に少くなり、中世の遺物が多く見られ中世の生活面と考える。

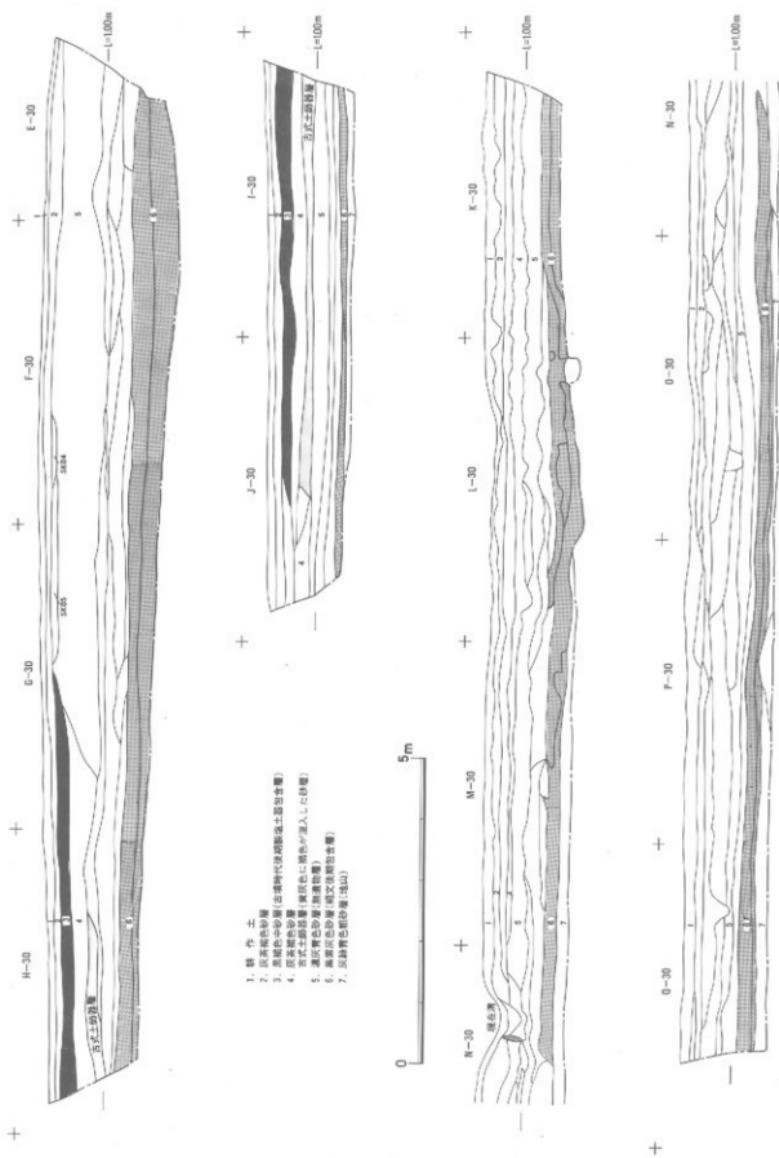
第4層は20～30cmの厚さで、G～J区は第3層の製塙土器包含層の影響も見られるが、古墳時代後期の須恵器を含む層である。量的には少ない。K～30区で环身の完形が出土し、G・H～34区では集中していた。標高1.2m前後の平坦な灰茶褐色砂層である。

古式土師器層はH区中央よりJ区中央までの幅12m、厚さ10～20cmで、黄灰色に褐色が混入した砂層である。量的には少ないが単純包含層である。I～28区で集中が見られる。

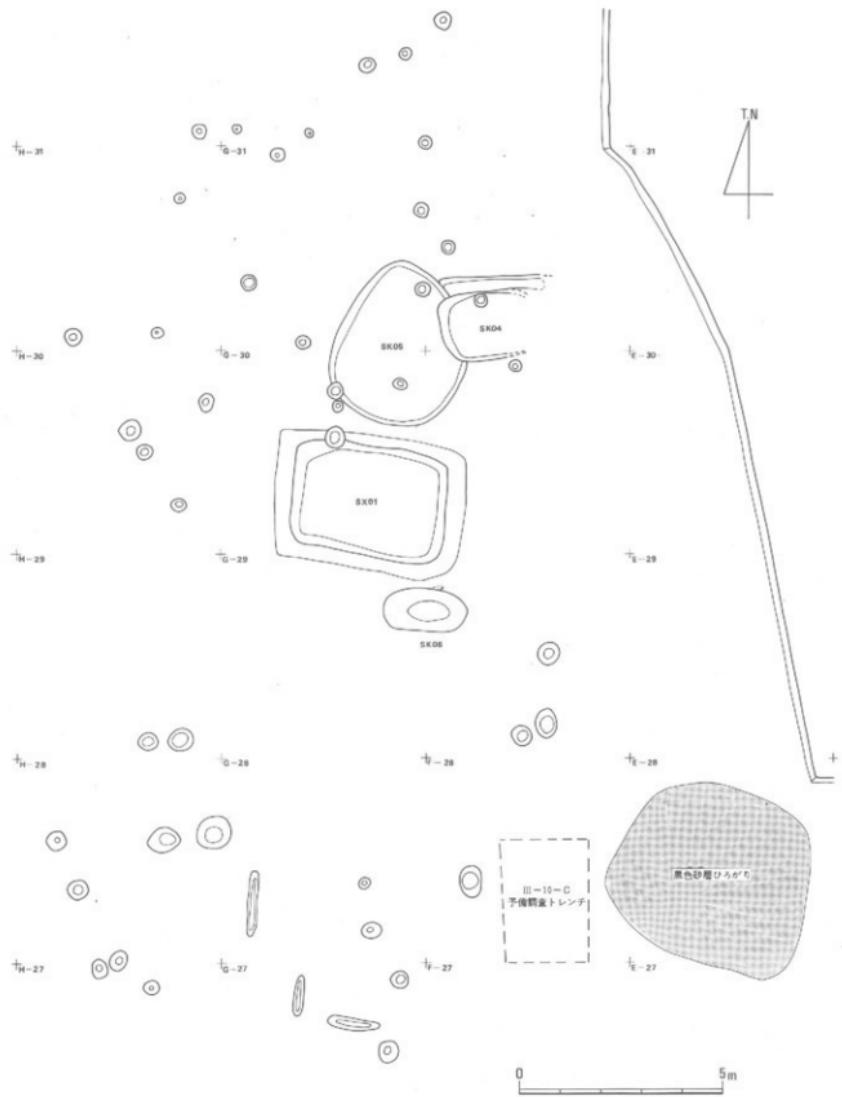
第5層はE～H区が最も厚く、I～Q区は40～60cmの厚さで平坦である。標高1.0m前後で、



第65図 土層模式図



第66図 30列土層図



第 67 図 E～H-27～31区遺構配置図(1)

全区ともほとんどと言ってよいぐらい遺物は出土しない無遺物層である。全区とも色調・砂質は若干異なるが、基本的には同一層と思われる濃灰青色砂層である。標高80cm~1.0mは地下水の湧水点と考えられる。

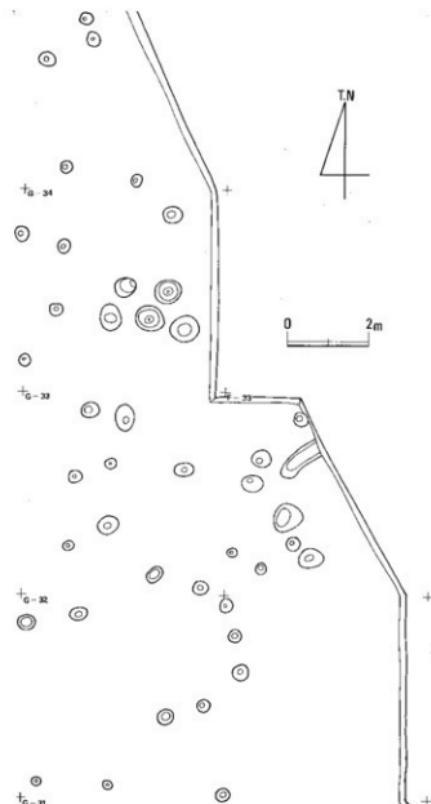
第6層は縄文時代後期の包含層である。E・Fは50~80cmで最も厚く東側に向って傾斜している。G・H区は30~50cm, I・J区は10cmと薄くなっている。K~Q区は30cm前後の厚さである。標高60~80cmで全区ともほぼ平坦であり、黒紫灰色砂層である。包含層より土器、石器、サヌカイト片が少量あるが出土し、土器片は磨滅し、脆くなっている。他の時代の遺物は含まれず純粋な包含層で、本調査区広範囲に広がっているようである。下層では炭化木の樹木が確認された。

第7層は地山と思われ灰緑青色粗砂層である。H~Qは標高60cmの平坦な地形であるが、G区より東側は海に向って急傾している。

以上のことから、本調査区の旧地形を復原すると、縄文時代後期の地形はそう大きな地形変化は見られず平坦な生活面であったが、その後、E・F区に堆積が進み、その舌状の微高地の最も高い所に弥生時代前期~古墳時代後期にかけての生活面がある。又、舌状地形の西側斜面に古式土師器層や第3層包含層が北側に延びているが、西側平坦部は湿地部であったためか、生活面は認められなかった。古代・中世も第3層が生活面であったと思われ、古墳時代後期以後は堆積が停止したと考えられ、中世及び現在の地形が形成されたと推定される。以上のことを推定し、F-30区において土層の花粉分析を香川大学の坂東裕司先生にお願いした。

b 遺構について (第67・68図)

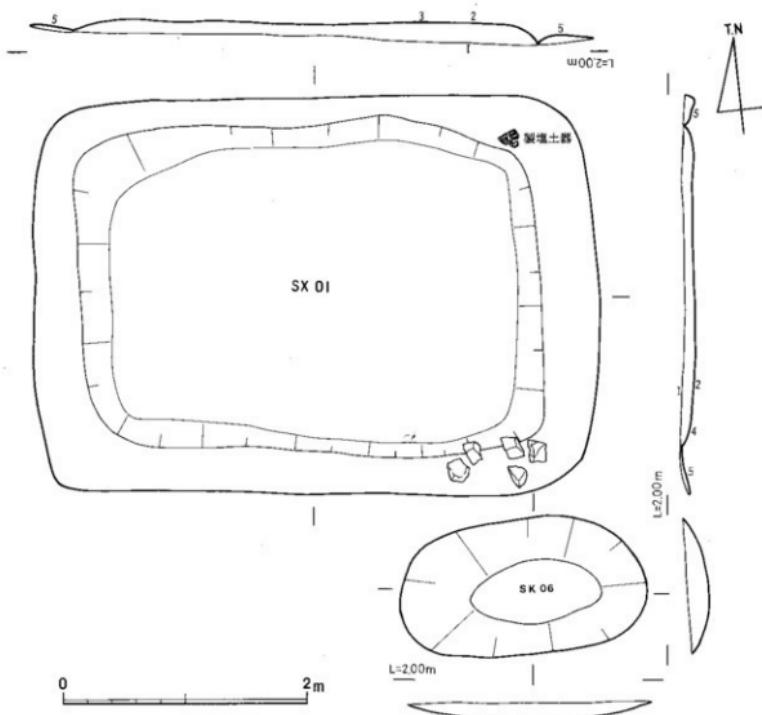
主な遺構としては、S X01, S K06, 第14土器群, G・H-34区土器集中箇所、曲物で詳細は、後述する。その他、D-28区の古式土師器集中箇所、S X01北側の性格不明土坑(S K04, 05)、不明ピット群などを検出した。



第68図 F・G31~34区遺構配置図(2)

c SX01 (第69図)

隅丸長方形を呈したSX01は、G-30区において、耕作土除去直後に検出された。その周囲を幅20~30cm、厚さ2~5cmの淡黄褐色土が縁どりしているのが特徴である。その囲み枠には、北東隅で製塙土器片、また南東隅で赤変した花崗岩5個がはりついていた。また東部の埋土上部には、淡レンガ色で拳大の粘土塊数個が混入されていた。



第69図 G-29・30区 SX01・SK06実測図

深さ10~15cm、黄灰褐色細砂の埋土中からは、脚台付製塙土器の脚部46片、厚手丸底の製塙土器170片、土師器42片、須恵器8片、巻貝43個、砥石2個を出土した。3は砥石である。黄白色に、淡茶褐色の縞が入り、小さな気泡状の孔を有する。長辺の三面には研ぎ跡が認められるが、残り一面については、欠損のため不明である。研ぎ面のうち、実測図中央の面が最も凹んでいる。4も同材質の砥石で、四面全てが研ぎ面である。3と比較すると極めて小さい。5は、

土師器の甕（口縁部）である。端部が面取りされ、布留最終期の様相を呈している。

6は、須恵器の高杯（脚）である。脚端部に断面三角形のシャープな段をもつ。中村編年I型式でも古いタイプであろう。

外枠からは、厚手丸底の製塙土器73片、土師器24片、須恵器6片、巻貝42個、獸骨13片を出土した。1～2は土師器の杯である。口縁が外反し、端部を丸くおさめている形態は布留式土器編年でいう布留3式（新）に該当する。

製塙土器は6点を掲載した。

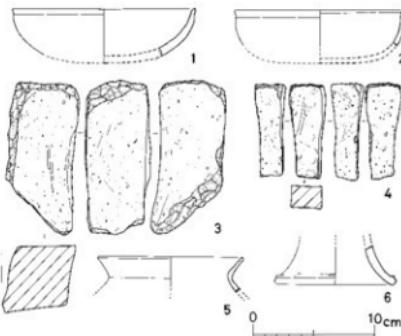
遺物から遭構の時期を推察するならば5世紀末～6世紀後半になろう。

焼石の存在、砥石、巻貝など出土遺物の組み合せ、外枠の必要性など、不明な点ばかりである。性格の解明は今後の研究、分析に委ねたい。

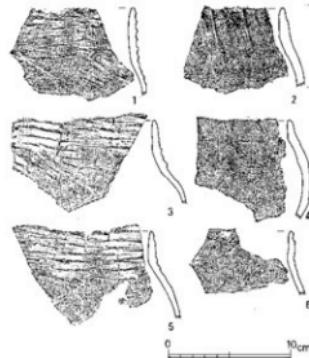
d SK06 (第69図)

SK06は、SX01の東南隅より20cm南側で、耕作土除去直後に検出された土坑である。長軸2.0m、短軸1.1mの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。黒褐色細砂の埋土中には、脚台付製塙土器の破片が多数含有されていた。全て、脚断面が八字形に大きく開き、その器厚の薄いタイプである。大浦浜遺跡では、このタイプの製塙土器出土量は少ない。集中して出土したこの土坑の意義は大きい。

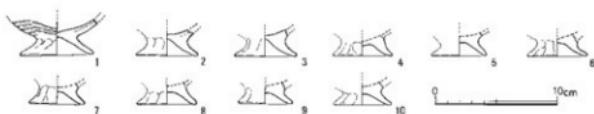
実測図には全て脚部の10点を掲載した。これらは、底部内部の剥落状態、脚部天井



第70図 G-30区 SX01出土遺物実測図(1)



第71図 G-30区 SX01出土遺物実測図



第72図 G-29区 SK06出土製塙土器実測図

部などから判断すると、はりつけによる脚部成形後、指ナデと指おさえによる整形調整を施し、製作されている。1は体部が若干、残存しているもので、外面には、ヨコ方向の叩き痕、内面には、ナデ調整が確認できる。

これらは、厚手丸底の製塙土器以前のタイプで、古墳時代前期～中期に比定できるのではないかと思われる。S X01との関係は不明である。

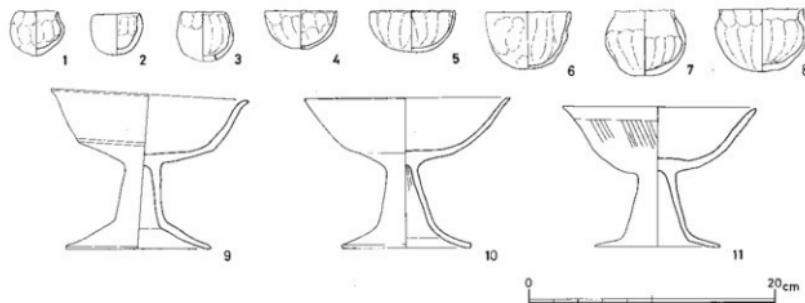
e 第14土器群（第74図）

I-28区において、古式土師器が集中して出土した。標高1.1～1.3mの淡褐色砂層（鉄分沈着）で高杯、ミニチュアの壺・椀、小型丸底壺、などが重なり合う状況であった。そのため、遺構実測図（74図）は、同一位置を二面（A、B）に表現している。Aの遺物直下にBの遺物が出土したことを意味する。

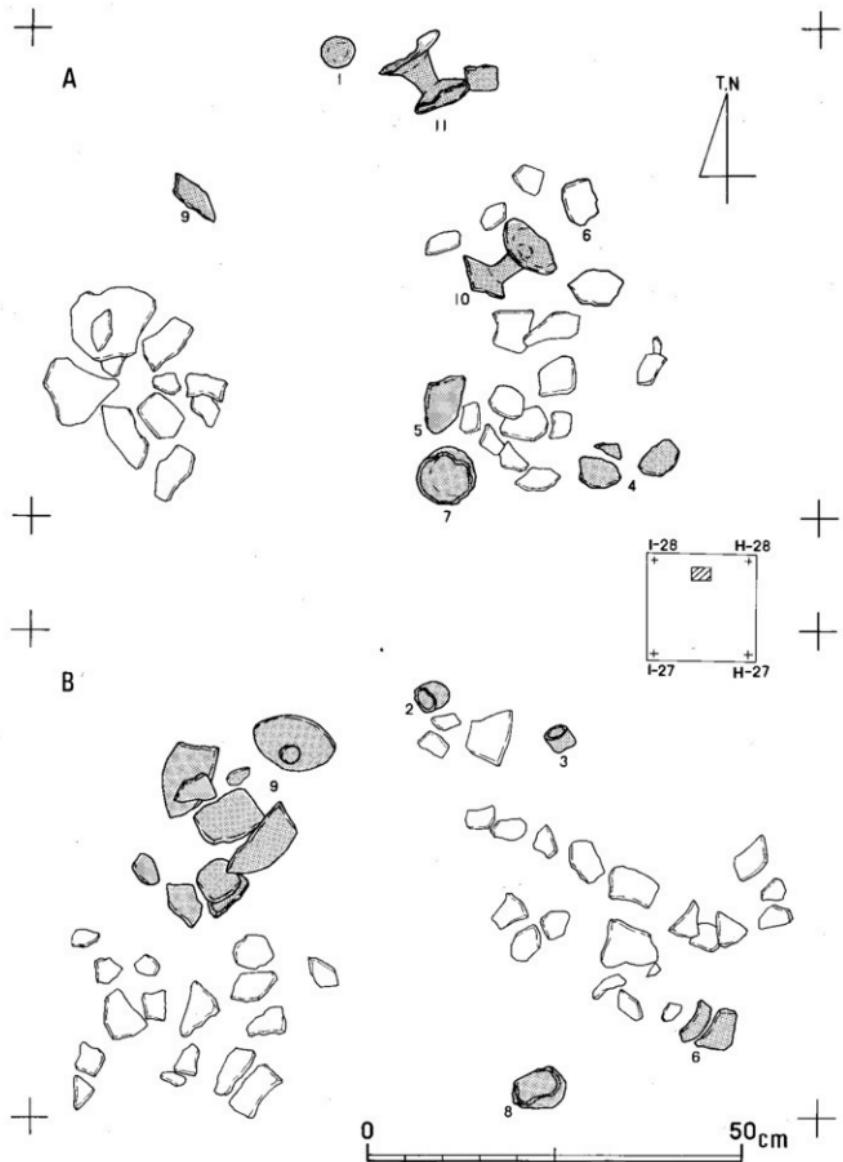
1～11は出土遺物実測図で、実測番号は73図番号に対応する。1～3、7～8はミニチュアの壺である。1は外反する口縁端部を有し、胴上部を張り出す。2は、口縁部がほぼ垂直にたちあがり、端部を内傾する。3は、胴から口縁部にかけて、ゆるやかに内彎する。内面は、底部から口縁部までナデ上げられた指頭圧痕が顕著である。7、8は、小型丸底壺としては口縁部の形状が異質であるため、ミニチュアという呼称は不適当かもしれないが、ここでは一応、ミニチュアの壺としておく。7は口縁端部が欠損していると思われる。8は口縁端部を1同様外反させる。7、8とも胴部より口縁部の器厚が厚い。4～6はミニチュアの椀である。4、5は相似形で、製作が類似している。6は、4、5と比較すれば器高値が大きく、深みを感じさせる。外面は、指おさえで成形調整しているため凹凸がある。以上は全て手捏ねである。

9～11は高杯である。9の杯部は稜を有し、内彎しながらたちあがるが、口縁端部で外反する。10の杯部は底部からゆるやかに内彎し、そのまま口縁に至る。脚柱は中空で、内面に絞り痕が残る。11の杯部は、ややふくらみぎみにたちあがり、口縁部に不明瞭な段を有する。外面には刷毛目調整がわずかに認められる。

第14土器群は、昨年度の概報で報告したJ列土器群と、出土状況、性格など様相が類似している。J列土器群とはJ-13～21区の帶状に断続する古式土師器群で祭祀的性格をもつものである。第14土器群はその延長上の北限に位置するものと考えられる。



第73図 第14土器群出土土師器実測図



第74図 第14土器群（I-28区）出土状態図

f G・H-34区土器集中箇所 (第76図).

G・H-34区において、須恵器、土師器が集中して出土した。古墳時代には、砂州状地形の尖端付近があつただろうと思われる位置で、標高は1.4~1.6mである。土器は一部、完形もあるが、大部分破片であり、東西3.5m、南北4mの範囲に散在する。その場で破棄された痕跡をとどめるのは、南西部に多く、何個体か復原可能である。それに対して、北部のものは破棄後、若干移動しているよう、須恵器、土師器の小片が密に混在している。

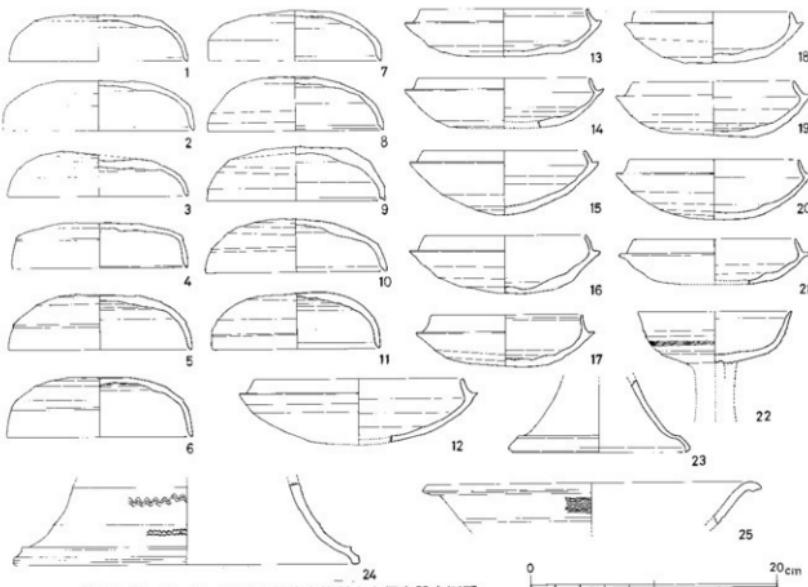
この土器集中箇所は、第3層、即ち製塙土器包含層直下に検出されたもので中央西部がやや厚いほかは一面だけで、土坑に伴わない極めて、平面的な遺構といえる。

須恵器、土師器の比率は、6:4で、器種は須恵器では蓋杯、高杯、器台、土師器では、製塙土器、鉢、椀、高杯、瓶などである。量的には蓋杯が最も多い。完形及び復原済の遺物を中心実測図を掲載した。なお遺構図中の番号と遺物実測図の番号は対応する。

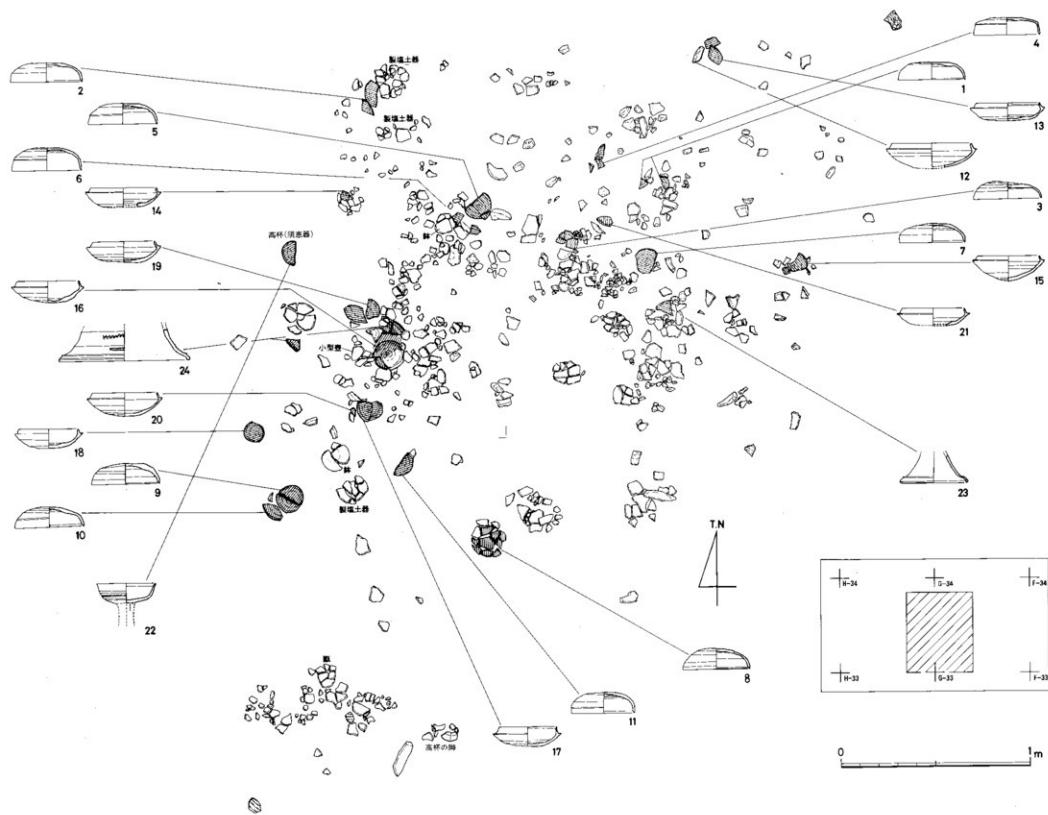
須恵器 (第75図)

1~11は蓋杯(蓋)である。最大口径は2の15.6cm、最小は11の13.7cm、平均口径14.6cmで、口径の数値にばらつきがない。形状においても、4の天井部端部で著しく屈曲し、口縁部が垂直にさかのぼるほかは、ほぼ同一である。ただ5、6、10、11は一条の沈線を天井部端部に巡らし、稜を相対的に浮かびあがらせていること、また、2、4、7~11には、口縁端部に内傾する段があるなど細部には、若干の差異がある。

12~21は蓋杯(身)である。大型の12を除き、他はほぼ同じ大きさで、平均口径13.2cmを測る。13、17は、たちあがり端部に、内傾する段がある。22はスカシ窓を有する無蓋長脚高杯



第75図 G-H-34区土器集中箇所出土須恵器実測図



第 76 図 G—H—34 区土器集中箇所実測図

であろう。23は高杯。24は器台の脚部であろう。25は、24からやや離れた地点で、出土したが、同一個体の口縁部と思われる。

以上、特に蓋杯の特徴から中村編年のII型式2～4段階に比定できる。

製塩土器（第77図）

77図1は復元口径値(20cm)が器高値を上回り安定感がある。2は1と比較するとスマートで製塩土器の代表的な器形をしている。3は、やや小型である。外反する口縁は1、2の内彎型とは異質である。これら3点を無文の製塩土器であると認定したのは、次の製塩土器たる諸条件を具備していたからである。

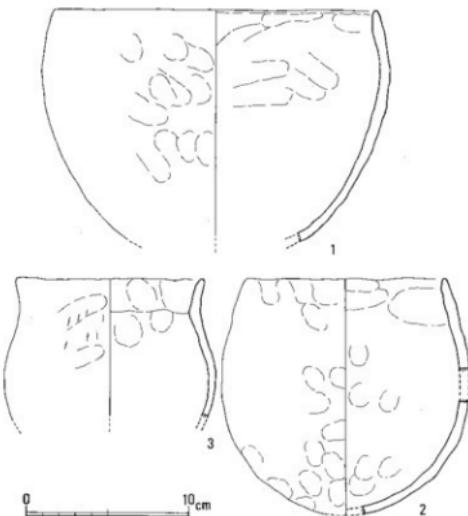
①内外面ともに、製塩土器特有の茶褐色、②胎土に1mm大の砂粒をやや多く含有し、外見が粗雑、③二次的の焼成のためひび割れ、黒色変化がみとめられる外面。④指おさえ指ナデによる調整。

なお1は広江・浜遺跡の報告である類製塩土器の可能性もある。

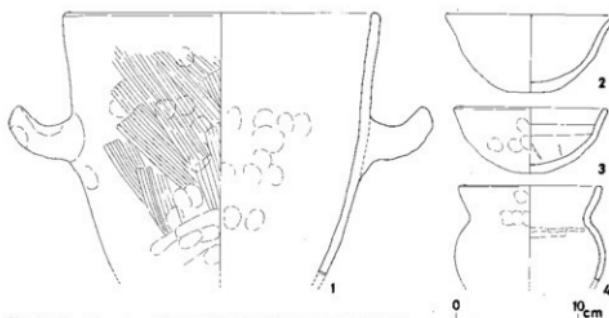
土師器（第78図）

1は瓶である。復元口径26cmで色調は、内面が黄茶色、外面が暗茶褐色である。内外面ともに、指頭圧痕が顕著であり、外面にはその上から、粗い刷毛目(3～4本/cm)を斜方向に施している。

2、3は鉢である。2の口縁は外反ぎみにたちあがり、端部を丸くおさめているのに対し、3の口縁端部は平坦に面取りされている。2がやや大きく深みを感じる。



第77図 G・H-34区土器集中箇所出土製塩土器実測図



第78図 G・H-34区土器集中箇所出土土師器実測図

4は復原口径12cmの小さな壺である。色調は茶褐色である。内面は横ナデで丁寧に調整されている。

さて、この遺構の性格について推測をまじえながら、考察してみることにする。

古墳時代には大浦浜では、既に製塩生産を行なっている。経済理論では、資本、自然、労働が生産の三要素としてあげられる。そのことは、昨今を問わず普遍的であるように思われる。ただ三要素の比重は変動的で、古墳時代においては自然が大であつただろうと推察できる。製塩生産には、原料の海水、日照時間など自然界の恩恵に負うものが大だからである。また生産活動は、一定の社会組織を前提として行われる。そこに支配者の存在が浮び上がってくる。

島内に当時築造されたと思える古墳が数基、存在するのも何か関連があるかもしれない。その副葬品の中に製塩土器或は、それに関係する遺物が副葬されていたとすれば、生産活動における支配者の存在を確定的にする。彼は、便宜をはかってもらうため、中央または地方の豪族に生産物を貢納しなくてはならず、そのため絶えず製塩の増産を目指したはずである。従って頻繁に祭祀を催し、神に祈願したことであろう。

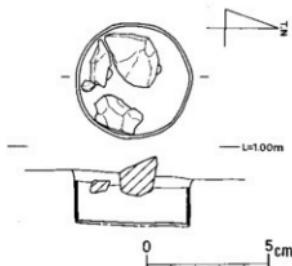
亀井正道氏は「祭祀遺跡一製塩に関連して」(『新版考古学講座』)の中で海浜における祭祀遺跡の特徴について、次の5項目を例示している。①小さな入江に面していること、②標高1~2mの低地、③製塩土器の多量出土、④土師器、須恵器を伴出し、集落の存在、⑤石製模造品・手捏土器など祭祀遺物の出土。

この観点から再び大浦浜遺跡に目を転じよう。①、②は前述、③、⑤は本概報で報告の通りであり、④を満たせば全てを網羅することになる。残念ながら現在のところ集落の存在が未確認である。しかしこの遺構で土師器・須恵品の多量出土を確認したことの意義は大きい。さらに、出土遺物に器台、無蓋長脚高杯などの特殊な器種が存在することから推察すれば、この遺構の性格を大浦浜における古墳時代中葉～後期にかけての祭祀として把握してもよいのではないかと思われる。

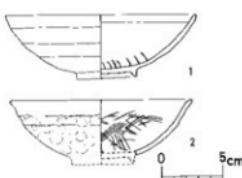
g 曲物遺構(第79図)

第79図はK-28区南端中央で、周辺には遺構はなく単独で検出した曲物遺構である。掘方は50cm前後の円形プランで、湧水層と考える灰青色砂層及び暗灰青色粗砂層まで達している。上部は削平されて不明であるが、下部の曲物は非常に薄く腐朽がかなり進んでいる。現存内径45cm、高さ17cmを測る。埋土は灰白青褐色砂で、内部より大小3個の角礫(花崗岩)、自然木片、松球、瓦器碗2点などが出土した。井戸の可能性は大である。

第80図の1は、曲物より上で出土した瓦器碗で、口径15.6cm、器高5.3cmで4分の1ほど欠損している。体部は口縁部に向って丸味を帯び内湾している。底部は貼り付け高台で、断面は三角形である。内外面共に磨滅が著しく、外表面は黄灰色で調整は観察できない。内面は灰色を呈し、体部から内底面にかけて、荒い



第79図 曲物遺構実測図



第80図 曲物遺構出土遺物実測図

暗文が見られ、焼成は不良である。

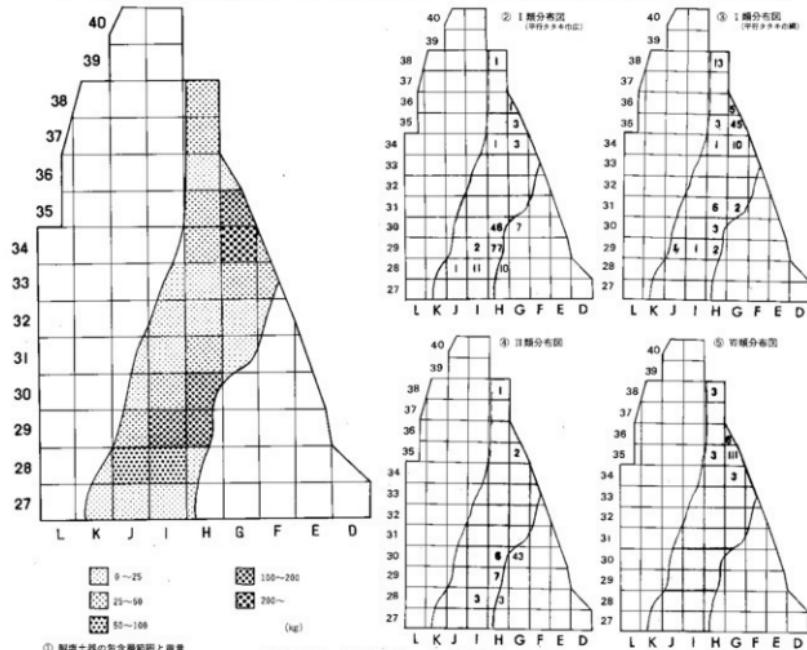
第80図の2は、曲物内より出土した瓦器碗で、体部は丸味を帯び口縁部でやや外反する。内外面共に全面を焼している。口縁端部は丸く丁寧な調整で、外面体部は指頭痕が明瞭に残り、口縁部はナデ調整でその後、暗文が施されている。焼成は精良である。

以上の2点の瓦器碗は、各調査区出土瓦器(第131図)と同一時期であり、鎌倉時代初頭と考えられる。

h 製塙土器 (第81図)

製塙土器は包含層として取り上げ、第3層出土遺物とした。ここでいう製塙土器とは、古墳時代後期に比定できる厚手丸底型を意味する。包含層の広がりは図示(81—①図)した通りで、層の厚さが南部G—6区付近と比較すると、薄いのが特徴である。大多数は転磨した小片であるが、ブロック的に2箇所、例外的な出土をみる。81—①図は区画別に重量を計測し、その数値を図化したものである。最も多量に出土した区画は、G—34区で216.9kg、ちなみに、総重量は、1,310kgであるから約 $\frac{1}{6}$ がこの区画に集中していることになる。このG—34区とI—29区を核とするブロックは他地域に比較して集中度が高く、かつ転磨せず、やや大きい破片が多い。

製塙土器集中箇所の観点から大浦浜を巨視的にみてみよう。現時点での集中箇所は、H—I—24~26区、G—18区 S K01・H—18区 S K01・H—14区 S K01の3土坑、さらに南部の、



第81図 製塙土器の包含層範囲と重量

G-8区、G-4~6区の計6ヶ所をあげることができる。これらの位置について注目すべき点は、それぞれが20~30mの間隔を保持し、全てが当時の砂州状地形の最も高い位置に存在することである。また叩き目の種類からみると、H-I-24~26区は未整理のため不明である以外、それぞれ固有の叩き目を有する。即ちG-18区SK01はI類、H-18区SK01はV類、H-14区SK01はI類がそれぞれ80%以上、G-8区ではIV類だけ、G-4~6区ではI類・II類で $\frac{2}{3}$ 、というように、各集中箇所とも、特定の叩き目を有することが調査結果からでている。

さて本調査区ではどうか。②~⑤図は主な叩きを種類別に図示したものである。抽出資料が主観的で問題もあるがG-35~36区では、I類とVII類、G-30、H-29~30区ではI類とII類が主流であることを示している。同じI類でも、前者がやや密、後者が粗の平行叩き目で微妙な差異がある。

以上のことから、同時期の活動であることを前提とし、集団と製塩土器に密接な関係があると仮定するならば製塩活動に伴う一集団の活動空間が算出されるであろう。それに反し時間的推移の中で一連の集中箇所を覚えるのであれば、生産活動場の移動を考慮する必要があろう。しかしその場合、土器にみられる叩き目の変化をどう理解したらよいのだろうか。製塩活動と集団の規模、集落と社会などの関係を明確にすることが、今後の課題である。

I まとめ

出土遺物総量は、莫大でそのうち約90%を製塩土器片が占めた。製塩土器は、古墳時代後期に比定できるものが、大多数を占めるが脚台付（大・小）も若干数、出土した。製塩土器包含層は、平面的には標高2m等高線のやや西側に沿い存在した。G-H-34区土器集中箇所では、無文製塩土器とII-2~4の須恵器共伴事実を把握し、また、第14土器群では、J列古式土器群の北限を確認した。

ミニチュアの船形土製品、甌など祭祀遺物は微高地であるF列に集中出土した。縄文土器は、調査後半に至り調査区北部で多数出土した。結局深掘りした標高0.6~0.8mの全域で縄文包含層が確認された。そのことは大浦浜中央部の地形形成変遷上に大きな波紋を投げかけた。なお、縄文土器の大半は、条痕、磨消縄文で後期前半のものである。今後、遺物の再検討、科学分析結果などから、大浦浜遺跡に占める中央部の位置付けをより一層浮きぼりにしていきたい。

(東原・田村)

〈参考文献〉

- 「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』(IV) 1981年 香川県教育委員会本州四国連絡橋公団
- 『陶邑』大阪府文化財調査報告第30輯, 1978年 大阪府教育委員会
- 『広江・浜遺跡』『倉敷考古館研究集報』第14号 1979年 倉敷考古館
- 喜兵衛島発掘調査団「説の節楽式」『歴史評論』72号 1956年 河出書房
- 亀井正道「祭祀遺跡—製塩に關連して—」『新版考古学講座』8 1971年 雄山閣
- 亀井正道「海路の祭り」『講座日本の古代信仰』3 1980年

(7) K～S-38～48区（第82図）

浜中央部を東西に走る水路より北側に位置する。当区の予備調査では、縄文後期前半の土器とそれ以外の遺物（古式土師器・須恵器・古墳後期の製塩土器・青・白磁・瓦器・土師質小皿・土鍤等）が、磨滅した細片で出土しているため主に地形復元に努めた。

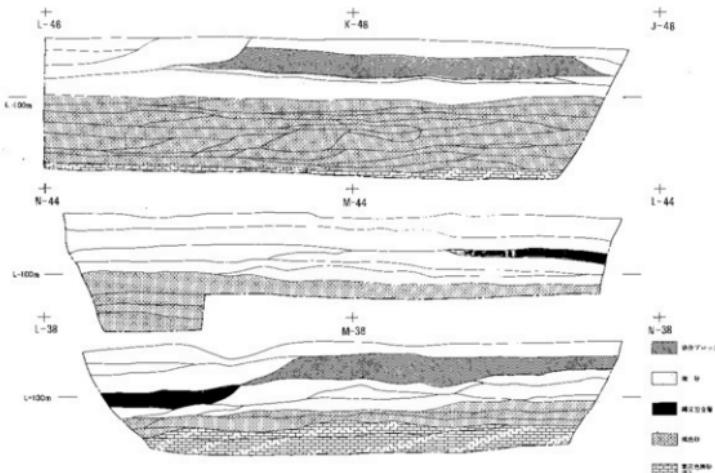
数ヶ所に設定したトレーナーの状況からN列付近をピークとして、西は緩やかに東はそれよりも傾斜をもって各層の堆積がみられた。特に、東側の動きは傾斜が始まる上層に全て鉄分ブロックが認められ、その下層は北側（K48）と南側（M39）で微砂層が確認された。さらに、下層標高1m前後で流水の痕跡と考えられる粗砂層があり、この層からは湧き水が著しく調査に影響を及ぼした。以下、褐色をベースとした粗・細・微砂が帶状に走る層が続き、下方になるにつれて色調が薄くなる。

そして、壁崩壊のためやむなく断念した限界の上面では、青灰色に見える微砂混入砂層が検出された。この層から2片の縄文前期の爪形文土器が出土した。

当区からは、意外と縄文土器が出土し、その状況は地区（点）によって時期差が認められる現象がみられた。それは、巨視的に南側では前期末中期初、北側では後期前半の土器がやや多く出土した。また、中央部に散在的に出土する包含層がある。

この状況から理解して、前期末頃には既に北から延びる砂州状の高まりが形成されていた。その後、谷筋の流出水の方向変化が潮流による作用で途切れた。それは、後期前半にはまだ中州状であり、縄文土器の包含層が広がる後期前半以降に再びつながり、砂州状の高まりが形成されたと考える。しかし、西側は堆積状況からまだ湿地帯であった。

また、水路は谷筋から海へ抜ける流水の痕跡であり、その屈曲する状況は、土器の出土から



第82図 K～S-38～48区土層図

弥生前期には既に形成されていたと考えられる南側の砂州状の高まりと北から延びる砂州状の高まりによって挟まれた後、南側の発達により北に向きを変えたのであろう。 (町川)

(8) A～H-50・51区 (第83図)

調査区北東端地区に位置する本調査区は、数年前の海岸線までの堆積状態を確認する唯一の地区である。

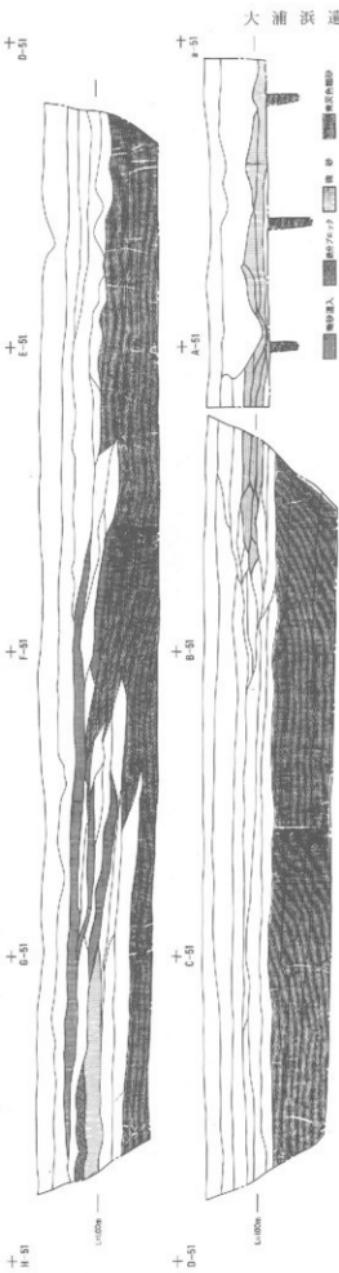
遺物の出土は、1・2層から古墳時代後期の製塙土器と青・白磁、瓦器、土師質土器の古代末の時期が主体を占める。それを除去するとB-51で微砂層の高まりが確認された。この上・下層から比較的多くの古式土師器(布留式以前)が南北帶状に検出された。この層は古式土師器の単純層と理解する。また、すぐ西側の堆積層では如実に土質が灰色に変化し、そこからは須恵器、土師質土器、竈など奈良～平安の遺物が出土した。この状況は、古墳時代前期には高まりが存在したことになる。さらに道を挟んで海側へ拡張したトレンチからは、縄文晩期に比定できる突堤を有する土器を出土している。

一方、西端部では水路より北区で説明した鉄分ブロック層を僅かに確認した。その下層は同じように微砂がみられた。その層が消える箇所から海側に向かって極端に砂粒が変化する。その状況は、相対的に上層が2m前後の大きさの砂粒であり下層はそれよりも粗砂粒になる。ここからは縄文時代後期前半と中期前半の土器が出土した。遺物が標高0m近くでも検出されたため掘り下げを継続したがトレンチ壁に亀裂が生じたため身の危険を感じ大変残念であるが中途にて終了した。

以上の状況から周辺を把握すれば、縄文時代には西側に海岸線があり、東端には南から弥生前期には形成されていた砂州状の高まりがさらに北へ延び、その先端は現在水路で切断されているけれども調査区東端を南北に横切る状態で広がる地形であったと考える。したがって水の流れはもっと北側である。しかし、西側のヤケヤマからの堆積作用も十分理解されるために山裾から海岸に向かって広がる海岸線の部分を検出したことも考えられる。当区域は谷筋を伝つて流れ出る真水と海水が合流する河口的地形であるために砂州状の高まりは、潮流変化とか谷筋からの水量が増えれば不規則に移動する状況が推測されることから地形復元については慎重でなくてはならない。

(町川)

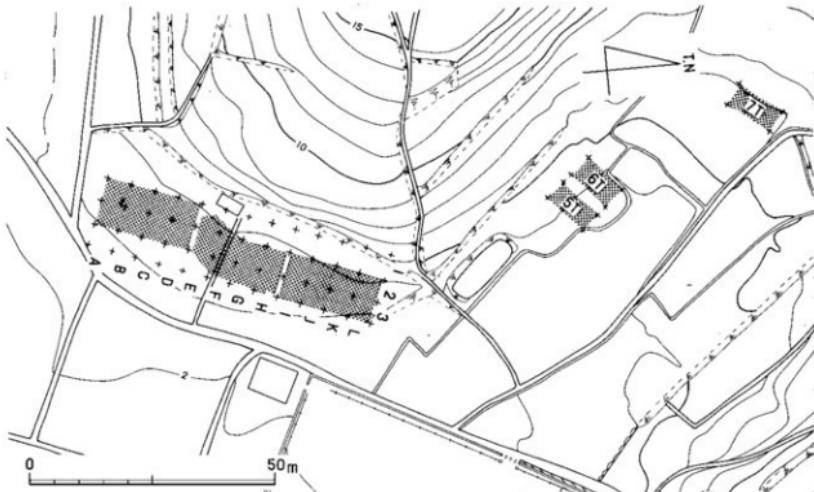
第 83 図 a・A～H-51 区工圖



(9) ヤケヤマ東麓地区 (第84図)

大浦浜発掘地区北端の区画で、北より続く低丘陵の山裾に位置する。

中世～縄文時代にかけての遺物が出土し、遺構では、土坑、ピット、柱穴、焼土面、集石群が検出されている。調査は1月末に終了したばかりで、現段階ではほとんどの遺物、遺構が未整理である。そこで本稿では、主な出土遺物として祭祀関係品と輸入陶磁器等を取り上げ、遺構については、古代末～中世にかけてのものを紹介するにとどめる事とし、詳細は次の報告にゆだねたい。



第84図 ヤケヤマ東麓地区調査区グリッド配置図

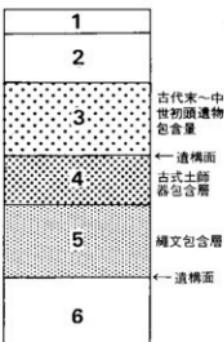
a 土層

ヤケヤマ東麓地区は第85図のように大きく6層に分層した。

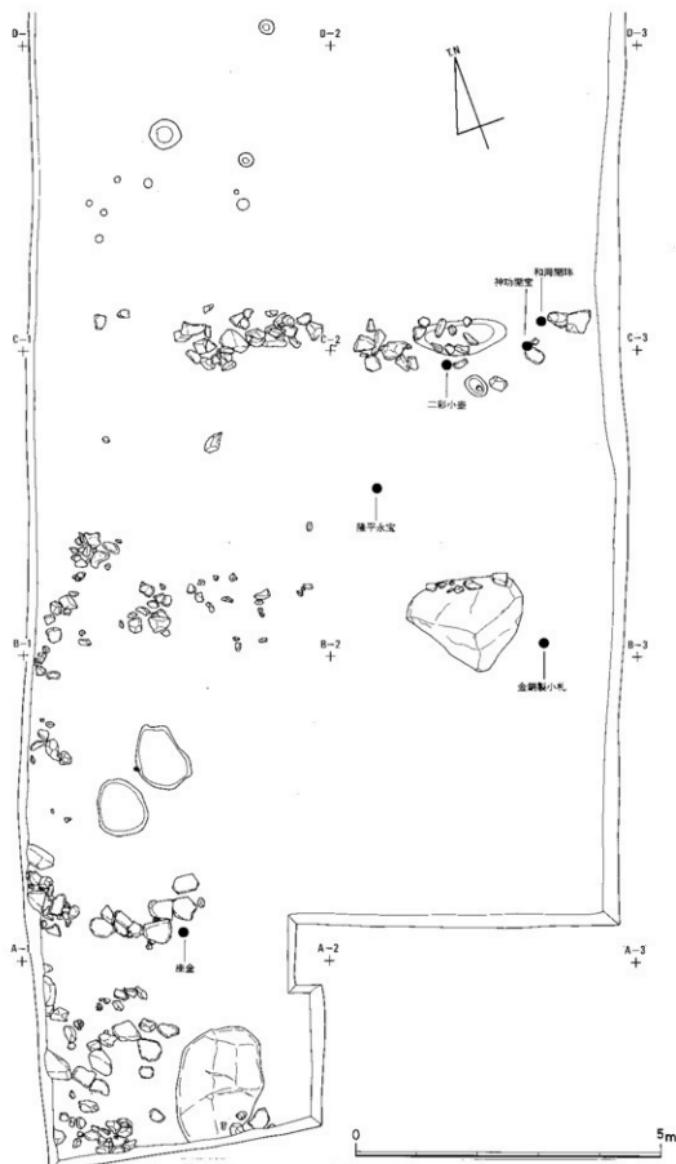
- 第1層 表土層・耕作土層
- 第2層 黄灰色バイラン土層
- 第3層 灰黒色バイラン土層（古代末～中世初頭の遺物包含層）
- 第4層 青灰色（一部黒色）の古式土師器包含層
- 第5層 縄文時代の包含層
- 第6層 無遺物層

全区画共に同一様相を示し、ヤケヤマに近い西側では古式土師器包含層が欠落する。第4層上面が古代末～中世初頭の遺構面で短期間での廃絶が推定される。

第2区・第3区では、第5層縄文包含層を除去後、第6層上面において、集石遺構・貝殻廃



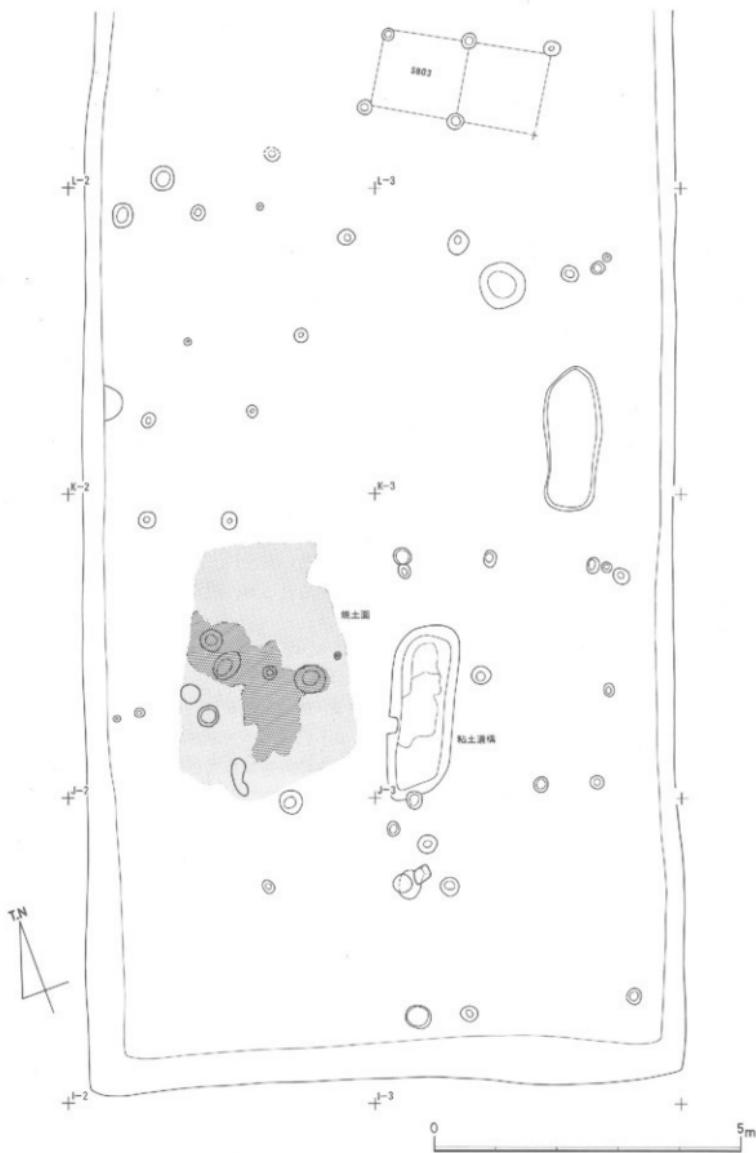
第85図 ヤケヤマ東麓土層模式図



第 86 図 ヤケヤマ東麓地区第Ⅰ区遺構配置図



第 87 図 ヤケヤマ東麓地区第 II 区造構配置図



第 88 図 ヤケヤマ東麓地区第III区遺構配置図

棄土坑4箇所が検出されている。これらの遺構と第5層との間には年代差が今のところ認められず、後期初頭～前半に比定される。

b 第I区遺構配置図（第86図）

第I区より検出した遺構は、土坑、ピット、集石である。集石はI区の南西側と、B列C列の境に見られ径10～60cmほどのものが多い。性格づけについては、遺物の詳細な分析を待って行ないたい。

I区だけに見られる特徴として祭祀遺物の出土があげられる。出土したものは、二彩小壺、皇朝鏡(和同開珎、神功開宝、隆平永宝)、金銅製小札、座金であり、これらの出土は、新たな祭祀場を示すものであろう。

c 第II区遺構配置図（第87図）

第87図に示すように、ピットが多く検出され、居住区の一端を検出するにとどまった。明確な遺構配置は今後の周辺部の調査に待ちたい。

検出建物は1間×2間の建物を2棟と柵列である。

S B01梁行2.1m、桁行2.1mを計る。根石の一部が検出されており、主軸はN-19°-Eを向く。

S B02梁行2.0m、桁行2.8mを計る。主軸はN-19°-Eである。

S A01柵列柱間0.8～0.96mを計り、列方向はS B01・02の主軸方向に直交する。

この他に、土器片の集中箇所が三ヶ所、上部に礫を置いた土坑、完形の椀を埋置した土坑などが検出されている。遺物から見ると、一時期と考えられるが、ピットの重複などがあり、小規模な建替えをへているが、ごく短期間の居住だろう。

d 第III区遺構配置図（第88図）

第III区より検出した遺構は、J-2区では長軸4m・短軸2.6mの長方形プランを持つ焼土面、J-3区より粘土遺構、またK-3区より長軸2m・短軸1m・深さ50cmの楕円状土坑、更にL-3区より柱穴群と思われるピットである。これらの遺構は全て古代末より中世初頭とされるが、整理の終了してない現時点においては連断はできない。このうちL-3区において検出したS B03について若干触れたい。

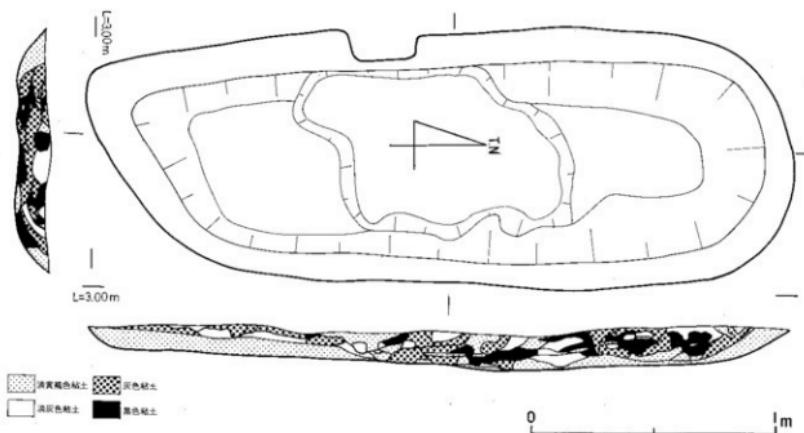
S B03は、梁行1.4m・桁行1.3mを測る。主軸は北西方向である。調査区北端より検出されたので北に広がる可能性がある。

なお、J-3区の粘土遺構については別の項に譲りたい。

e 粘土遺構（第89図）

ヤケヤマ東麓J-3区において、第3層（古代末～中世の花崗岩バイラン土）除去終了直前に拳大の粘土ブロックが数個出現した。精査の結果、楕円の粘土枠が検出された。長軸290cm、短軸100cmを測る。

埋土は全て4色の粘土で、それらを無秩序、無造作に投げ込み、上から叩きしめた感じである。従って、断面を見ると、モザイク的な模様を呈している。淡黄褐色、淡灰色、灰色、黒色である4色の粘土を除去した結果、淡黄褐色粘土による底面の存在を確認した。但し、全面ではなく中央部では掘り込まれた層（第4層で古墳時代前期）が露呈した。深さ15cmの埋土中に



第89図 ヤケヤマ東麓J-3区粘土遺構実測図

は遺物は皆無であった。

ところで粘土遺構については昨年度来、大浦浜調査区南部で十数基検出されている。そのうち何基かは、埋土の薄い土坑で粘土の焼けた痕跡から炉跡であろうと推定されている。この粘土遺構は形状がそれらに類似しているが、必ずしも同様の性格を有しているとは言い難い。上部構造の存在など不明な点も多く、今後の調査、研究で解明していきたい。

f 遺物（第90図）

ヤケヤマ東麓地区には、中世～縄文にかけての遺物が多量に出土した。しかし現段階では、ほとんどのものが未整理である。そこで本稿では、輸入陶磁器を中心として中世の遺物を取り上げる事とした。以下遺物について説明を加えていく。尚、輸入磁器の分類は太宰府の編年案に従った。

1はJ-3区第3層下層で出土した須恵器の捏鉢である。東播磨系のものと考えられ、復原口径30cmを計る。色調は青灰色で、口縁部外面に灰緑色の自然釉が付着している。胎土は1mm程度の砂粒を非常に多く含み、焼成は良好なものである。内外面とも指ナデが施され、口縁端部内面にヘラ状工具でおさえた跡が残っている。

2、3は滑石製の石鍋である。2はJ-3区粘土遺構上面から出土し、復原口径25cmを計る。外面には煤が付着し、銚は台形状のものである。口縁部内面にノミ跡が残る。3はA-1区第3層下層から出土し、復原口径29.15cmを計る。銚の下にノミ跡が残り、銚は三角形状のものである。

4～8は、白磁碗・皿で、4はB-1区第3層で出土し、口径15cmを計る。胎土は灰白色、釉は乳濁色である。口縁部を玉縁にし、施釉は内外面に見られる。（太宰府編年VII類）

5はA-1区第2層で出土し、復原口径16cmを計る。胎土は灰白色で黒色の微粒子を若干含み、釉は灰緑色ぎみの淡い飴色である。施釉は内外面に見られ、口縁部を大きな玉縁にしてい

る。(太宰府編年VII類)

6はG—2区第4層で出土し、復原口径16cmを計る。胎土は淡灰色、釉は乳濁色で、施釉は内外面に見られる。口縁部を外反させ、端部を水平にし、体部内面上位に細い沈線がある。(太宰府編年V類orVI類)

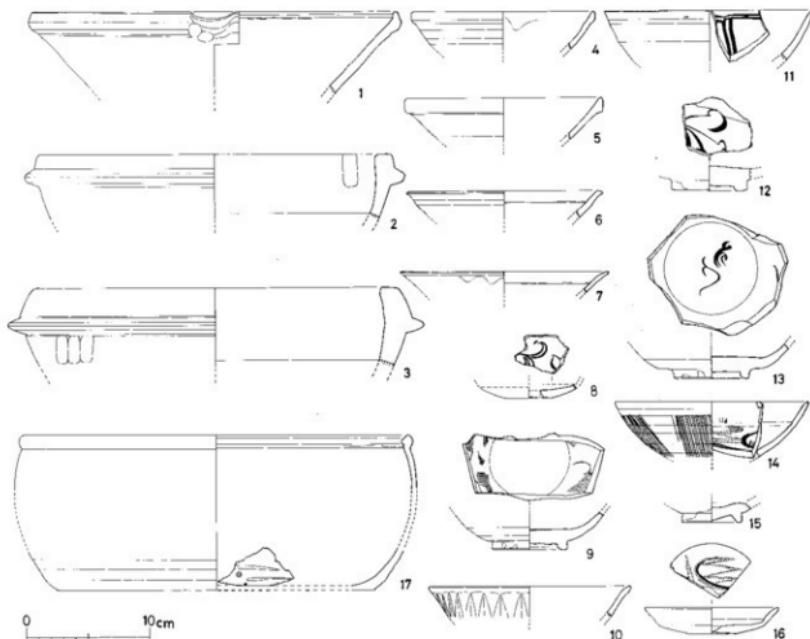
7はG—2区第4層で出土し、復原口径17cmを計る。胎土は灰白色、釉は乳濁色である。施釉は内外面にあり、外面口縁部下に釉だまりがある。口縁部は外反し、体部内面上位に細い沈線が見られる。(太宰府編年V—2・a)

8は表採の資料で皿の底部である。胎土は灰白色、釉はわずかに灰緑色を含んだ乳濁色で、釉は全面にかけられた後底部だけ削り取っている。(太宰府編年III・VII-I)

9~13は龍泉窯系青磁碗で、9は表採の資料である。胎土は淡灰色、釉は不透明に近い灰緑色で、施釉は内外面全体に見られるが、高台部疊付及びその内面は露胎である。高台は断面四角で、内面にヘラおよびクシ状工具で花文様が施されている。(太宰府編年I—3)

10はH—3区第4層で出土し、復原口径16cmを計る。胎土は灰白色、釉は透明度の低いわずかに青味を含んだ灰緑色で、施釉は内外面に見られる。体部外面には錦蓮弁の文様が施されている。(太宰府編年I—5・a)

11はA—1・2区第1~3層で出土し、復原口径17cmを計る。胎土は淡灰色、釉は透明度の



第90図 ヤケヤマ東麓地区出土遺物実測図

高い灰緑色で内外面に施されている。内面に片切り彫りによる文様が見られ、外表面はヘラケズリが行なわれている。(太宰府編年I-4類)

12はK-2区第2~3層で出土したものである。胎土は淡灰色、釉は不透明に近い灰緑色で、施釉は内外面に見られ、高台部疊付に一部釉が付着しているが内面は露胎である。高台は台形状のもので、底部内面に文様が見られる。(太宰府編年I-4類)

13はA-2区第3層で出土したものである。胎土は淡灰色、釉は半透明の灰緑色で、施釉は内外面に見られ、高台部疊付から内面にも部分的にかかっている。底部内面に片彫りによる文様があり、底部外面上には焼成時の付着物が付いている。

14~16は同安窯系青磁、碗、皿で、14はK-2区第2~3層で出土し、復原口径15.5cmを計る。胎土は淡灰色、釉は淡灰緑色で内外面に施されている。内面にクシ及びヘラ状工具で文様が施され、外面には細かいクシ目が見られる。(太宰府編年I-1-b)

15はF-2区第4層で出土したもので、胎土は灰色、釉は淡灰緑色である。施釉は内面に見られ、一部外面上の高台部にまで流れている。

16はF-3区第4層で出土した皿で、復原口径11cm、底径4cm、器高2.1cmを計る。胎土は淡灰色で、釉は風化の為か表面が霜降り状となっており不透明な灰緑色になっている。施釉は内外面に見られるが、底部は施釉後にかき取られている。底部内面にヘラ及びクシ状工具でジグザグ文様が施されている。(太宰府編年I-2)

17は黄釉褐彩絵洗である。今まで13片の出土を確認しているが、今後の整理でもっと増えるものと思われる。比較的大きい2片を組み合わせて実測した。口縁部の破片には、外面にナデ調整の上に化粧土がかけられ、内面には化粧土の上に紫色がかった灰色の釉がかけられている。底部の破片には、外面には化粧土はかけずに荒い横方向のナデが施され、内面には、紫色がかった灰色の釉がかけられ、黄緑色の文様が描かれている。胎土には1mm大の砂粒を多く含み、焼成も良好である。

最後に本地区で出土した輸入磁器について、太宰府の編年を用い時代を与えておく。分類した点数は83片である。

まず白磁は碗だけが出土し、VII類4点、V類2点、VIII類1点、不明6点である。

龍泉窯系青磁は碗だけの出土で、I-2が2点、I-3が4点、I-4が9点、I-5が1点、I-2~4が20点、不明5点である。同安窯系青磁は碗と皿が出土し、碗はI-1 bが16点、皿はI-2が6点、不明2点の出土であった。これらの結果から見れば、III期の1小期(12世紀中葉から13世紀初頭)に概当する。

本地区では、二彩小壺、皇朝銭をはじめ、中世~繩文にかけての多量の遺物が出土し、今後の整理結果がたのしみである。

尚、祭祀関係遺物実測図、拓影図は第5章4、第128図に紹介する。

(白本・真鍋・安田・東原)

注

(1) 横田賢次郎、森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』

(10) たては北麓調査区

本調査区は、大浦浜遺跡の西側に続く奥地部分にあたり、南北より迫る二つの山塊に挟まれた谷筋に位置する。谷状地形に特有の湧水によって、一面葦や萱の群生する低湿地となっている。

a 土層（第91図）

山裾部は若干段差をもちながら緩やかな傾斜をして北に落ち、湿地部はほぼ平坦に整然とした堆積を示す。双方の土層そのものは、置かれた自然条件の差異を如実に反映している。

山側の土層は、明暗や濃淡の微妙に異なるやや砂質がかった褐色土層を基調としている。処々に木柵や杭を埋設した痕跡が窺え、畑地化に伴う人為的な攪乱を相当受けているものと思われる。また、第1トレンチ山裾斜面から湿部平坦地に移る境目辺りに風化した花崗岩塊が数個確認され、土砂の移動を思わせる。

湿地帯の土層は、たいへん静かな堆積状況を示している。土質は、粘質と砂質の二種の組み合わせにより形成されている。砂質土層も、自然の風化作用を受けたり長期間湿润な状態を保持しているせいか、全体的に粘性を帯びている。第4層～第7層は褐色系及び灰青色の砂質土層である。第8層～第11層は縄文土器の包含層であり、第9層を除いて粘質土層となっている。標高は0～1mの間にある。第12層以下地山までは分厚い砂質土層が層序をなしている。

この奥地も、かつては海水を自由に呐吐していたようである。縄文海進頃より浜部において砂州形成が始まるが、歳月の経過とともに南北方向からの砂州状の高まりが次第に発達し、湾口が狭められつつ、徐々に現在のような後背湿地の状態を呈してきたものと思われる。

b 遺物の出土状況

全体として遺物の出土量はたいへん少なく、遺構も検出されなかった。そんな状況の中で前期縄文土器片がまとまりをもって出土したことは注目に値する。

山裾部は、同一層内に新旧雑多な遺物が混在する不規則な状況を呈している。従って、包含遺物による土層の時代把握には至らなかった。遺物を概観すると、各トレンチにわたり瓦器片が広範に出土したことが注意を惹く。他に、須恵器杯蓋・白磁・土釜脚・土錘・石鍬などが出土したが、少量である。また、輸入銭の「常平通宝」が1枚出土している。

湿地部では、土層は極めて落ちていた堆積状況を示しているものの、かつての一時期に水田耕作が行われていたこともあり、攪乱の名残りか上層部では時代の異なる遺物が混在している。下層部に行くにつれて、包含遺物の共伴関係に大した乱れは生じない。第1トレンチ第7・8層からは自然木が多量に検出され、かつての植生を想像させる。とくに注意すべきは、第1トレンチ及び第6トレンチの第9・10層より縄文前期のものと思われる爪形文土器が出土したことである。大小の破片が粘性を帯びた土層より集中して確認されている。この前期縄文土器は、櫃石島における一連の歴史・文化を解明する上で重要な資料である。層を同じくして、サヌカイト製ラウンド・スクレイバーや植物の種子なども検出されている。(森本)

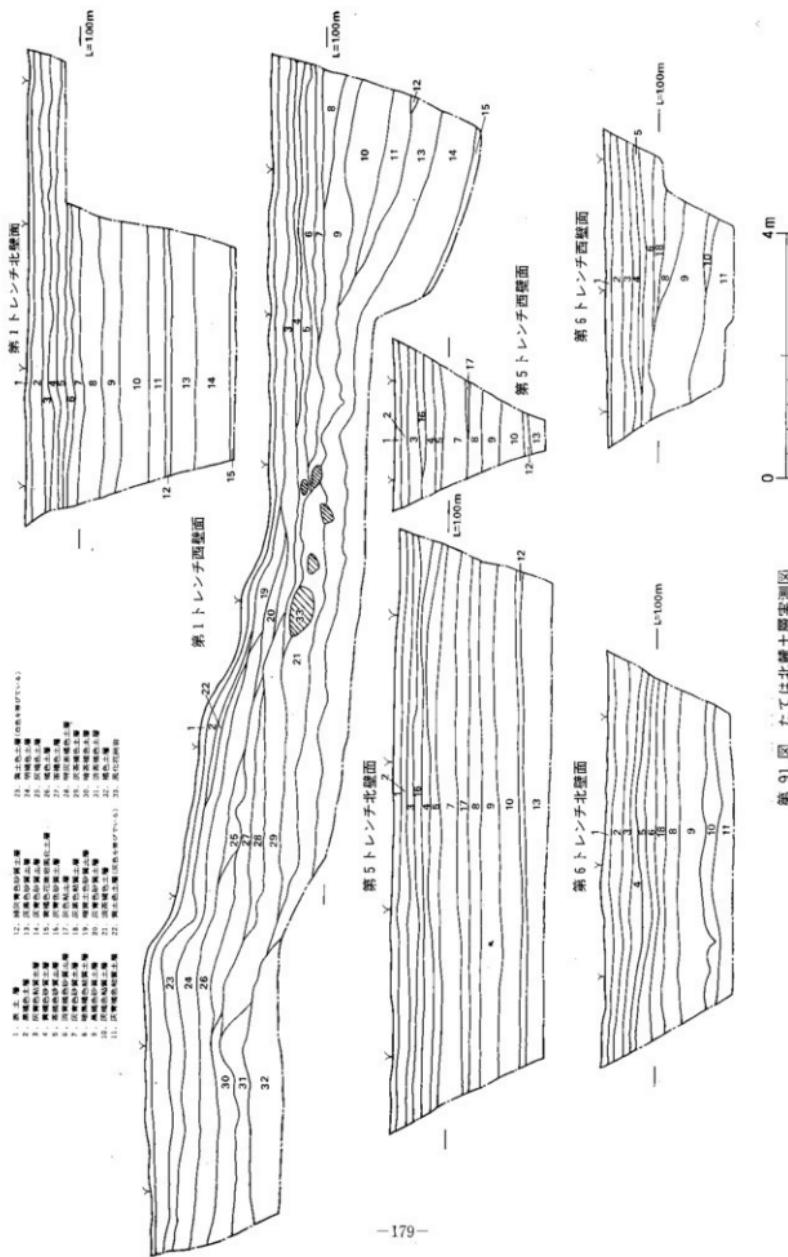
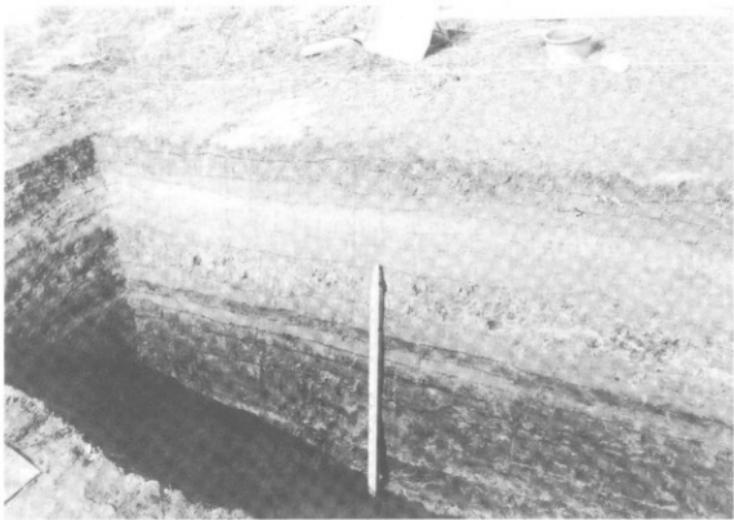


図91 北越土層実測図



第 92 図 たては北麓地区調査風景



第 93 図 たては北麓地区土層写真